

# 麗澤教育

第12号

平成18年(2006)4月

特集：外国語を学ぼう！

- It's "not" all Greek to us -



## 『麗澤教育』発刊の趣旨

本誌は、麗澤大学における教育、特に建学の精神を中心とした人間教育について、教職員や学生、部活動の指導者、保護者、卒業生などが、お互いに議論を深め、かつ、それぞれの実践や現状を報告するためのメディアです。平成7年より毎年1回発行しています。

# 麗澤教育 第十二号 <目次>

<フォト・アルバム>この一年①

<オピニオン>

国際公共人を目指して

高辻 秀興

6

<フォト・アルバム>この一年②

<特集>外国語を学ぼう！— It's "not" all Greek to us —

① なぜ英語を学ぶのか、そして何から学び始めるのか

田中 俊弘

10

② 「英語」を食べていますか？

大場 裕之

14

③ 麗澤の外国語教育の伝統と私

竹内 啓二

18

④ 私の英語

堀内 元子

22

⑤ わたしの英語史

堀内 一史

26

⑥ 私の留学生活

岡田 友里

30

⑦	言葉は生き物……………	山口 綾乃……………	34
⑧	自信を持ってドイツ語……………	草本 晶……………	38
⑨	ドイツ語と私のFamily tree……………	児島 聡子……………	44
⑩	私の中国語遍歴と学習法……………	西田 文信……………	48
⑪	挑戦することの大切さ……………	飯田 規子……………	52
⑫	私と韓国語……………	中山めぐみ……………	54
⑬	タイ語でサバイバル……………	坂本比奈子……………	58
⑭	「異文化研究」について——日本文化とベンガル文化との比較——……………	我妻 和男……………	62
⑮	挨拶と感謝のことば……………	田中 敏雄……………	68
⑯	スペイン語を学びませんか?! ~ Spanish gave all to me ~……………	星井 道雄……………	72
⑰	「小さい」言語 フィンランド語を学ぶ楽しみ……………	千葉 庄寿……………	76
⑱	私の「インスタント日本語」……………	趙 家林……………	81
⑲	外国語を学ぶ努力と絶え間ない忍耐とよるこび……………	竹原茂(ウドムラタナオン)……………	86
⑳	「よろしくどうぞ」で始まった私の日本語修行……………	森勇俊(朴勇俊)……………	91
㉑	「日本語」の学習体験……………	ラウ・シン・イー……………	97
㉒	日本語をたくさん使う機会をつくること……………	チェンダ・ワンチエン……………	102

②③ 習うより慣れる	104	皆川 武志
②④ 日本語は美しい 自分を美しくする	106	バティラナニティマリ・タヌジャ

## 〈現代GPP〉

「国際共通語としての英語教育」プロジェクトに至るまで	110	櫻井 良樹
留学を終えて	113	本多のぞみ
ドイツ留学を振り返って	115	岩切 泰英

## 〈コラム 温故知新・その四〉

難産だった東亜専門学校	118	池田 裕
-------------	-----	------

## 〈麗大の今〉

① R O C K 地域と大学―新たな麗澤の挑戦	124	成相 修
② 英語劇グループ七十周年―更なる向上目指し奮闘せよ!	130	中野 栄一
③ 麗澤の教えと体育会系部活動	134	平澤 元章
④ 麗陵祭から地域へ、世界へ	138	増田 昌義

※寄稿して頂いた在学生の学年は、平成十七年度のものです。





入学式の光景 (2005・4・2)



野外昼食会で料理に舌鼓 (2005・5・11)



留学生歓迎懇親会で和やかに語り合う学生  
(2005・4・22)



比較文明文化研究センター開設10周年を記念した  
国際シンポジウム (2005・7・1)



英語劇グループ70周年に集まったOB、在学生  
(2005・5・7)



高校生が全国から参加した1泊2日の体験入学  
(2005・8・1)

# 国際公共人を目指して

国際経済学部学部長 高辻秀興



麗澤大学国際経済学部は今年で十四年目を迎えた。創設以来、「国際公共人 (Global Servant)」の育成を目指してきた。国際とは、国の領域を超えるというより知の領域を超えるという学際の意味に近い。公共人とは、自己利益だけでなく他者の利益をも射程におく計算能力をもって、問題の発見と解決策の発明とその実現の構想に当たる者を指す。つまり国際公共人とは、広い視野に立って専門的な知識と三つの知力（発見知・発明知・構想知）を活かして社会に貢献できる人という意味である。

いま社会が希少な資源を使用しているとす。全

員が使用したいだけ使うと資源が枯渇するので各人に使用限度を設けたい。これを協定としてルール化するとする。協定に参加するか否かは各人の選択によるものとする。すると、多くの人が協定に参加しているときに、独りだけ協定に参加しないで使いたいだけ資源を使うと、他の人より多くの利益を上げられる。それに追従して協定への不参加者が次々と出るようになる。すると協定ルールが破綻する。これは共有地の悲劇の例である。

この回避策として強制参加と違反罰則とを定めた堅い法制度を提案するのは、制度的信頼を目指す社

会科学の常である。しかしこれは最良の方策だろうか。実際のところ、社会の多くの局面で逐一堅い法制度を定めるのは立法、監視、遵守、および改変のコストがかかり過ぎて効率的ではない。

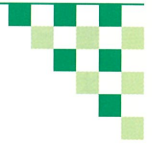
一方、今日の信頼研究が教えるのは、制度的信頼社会より対人的信頼社会の方が柔軟で新局面を切り拓く活力にすぐれているという示唆である。対人的信頼とは決して無防備に不確実な対人的関係の結果を受け入れることを意味しない。新たな対人的関係がもたらす利益と、旧来の対人的関係にとどまる取引費用の節約とに関する、相当に深い計算と読みの知力が要求される。いずれの社会がすぐれているかは単純に結論できるものではなく、なお探究すべき今日的テーマは多い。

しかし、結局のところ協定ルールが目指す社会的協力の利益の大きさを理解し、それに自発的に参加する人々の多い社会が安上がりな信頼社会を築けることになる。信頼研究は、そうした参加者の存在の確度は自らが形成する社会環境に依存すると教えて

いる。つまり、われわれの社会はそう絶望的なほど自己利益だけを追求する者の集まりではないこと、無償の贈与を行う人々が少なからず存在すること、一方それに対し直接的であれ間接的であれ返礼の行為を行う人々が存在することである。外部経済が存在するとフリーライドが発生し費用回収ができないため公共財は自発的には供給されないと経済学は説く。しかし現実にはフリーライドをしない人々もまた少なからず存在し、それによって公共財に類似のものが自発的に供給されている事例を目の当たりにすることは多い。いわゆるボランティア・ソリューションである。

国際公共人とは、そうしたルールと行為の発案者であったり、プレイヤーであったり、継承者であったり、参加を促す伝道者であったりする。われわれはそうした国際公共人の育成に教育コストをかける方が、立法と遵守等のコストの大きい社会より望ましいのではないかと考えている。





今回で3回目の麗澤国際円卓会議 (2005・10・4)



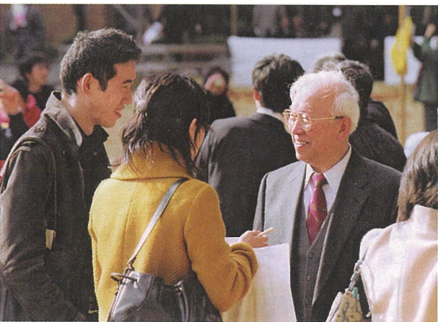
日本の伝統・もちつき大会を体験する留学生たち  
(2005・12・9)



好天の下で幕を開けた麗陵祭 (2005・11・3)



麗澤大学が箱根駅伝8区を走る (2006・1・3)



ホームカミングデーに400人 (2005・11・19)



完成した麗澤大学生涯教育プラザ (2006・2・2)

〈特集〉 外国語を学ぼう！ — It's "not" all Greek to us —

明治維新後、未曾有な文明開化の下、新体制になった日本全体が海外の先進的な科学技術、社会制度等を取り入れるときに直面したのが言葉の壁であった。先人の福沢諭吉らは辞書を作り、訳語を充実させるのに苦労したことはよく知られている。日本は「国際化」への第一歩をこのとき踏み出したが、それは言葉の壁との戦いとほとんど同義だろう。

草田男流に言えば「明治は遠くなりにはけり」だが、爾来、外国語能力の問題は常に時代に付きまといていく。外国語に無筆であることは、政治、経済、科学技術、文化、スポーツ、娯楽等から享受できた「愉悦」を台無しにするかもしれない。かつての「読み書きそろばん」に外国語要素がこびりついているのである。しかし、外国語能力の習得は決して平坦な道ではない。とりわけ、後天的に第二、第三の言語として母国語以外の言葉に精通しようとすると、そのハードルが相当高いことは間違いない。

よく引き合いに出されるのが、中学以来の「英語」

である。大学に至るまで相当の時間数とエネルギーを傾けているにも拘らず、英字新聞も読めなければ、ろくな会話も出来ないとは巷で仄聞ちやまたされる批判である。英語の苦手意識を長い間引きずっている読者も、少なからずいることだろう。なんとなく消化不良、軽い気持ちで先送り、また先送り、そして消化不良の積み増し、挙句の果てにチンプンカンプン (It's all Greek to me)、これが一番不幸である。

そこで、語学を十分にマスターしたい方への応援歌として総力を結集したのが、次頁以降の特集である。本特集では、母国語以外の言葉をゼロから勉強し始めることになった契機、そしてモノにするまでの長く(?) 曲がりくねった(?) 道のり、外国語がわかることすばらしさ、理解不十分なことによる人には言えなかつた失敗談、バイリンガル・オン・オフ状態の思考回路、目から鱗うろこの勉強法、さらには指導法等、読みどころ満載。さあ、次の頁をめくってみてください。

〔麗澤教育〕編集委員長 長谷川 泰隆

# なぜ英語を学ぶのか、 そして何から学び始めるのか

外国語学部助教授 田中 俊弘

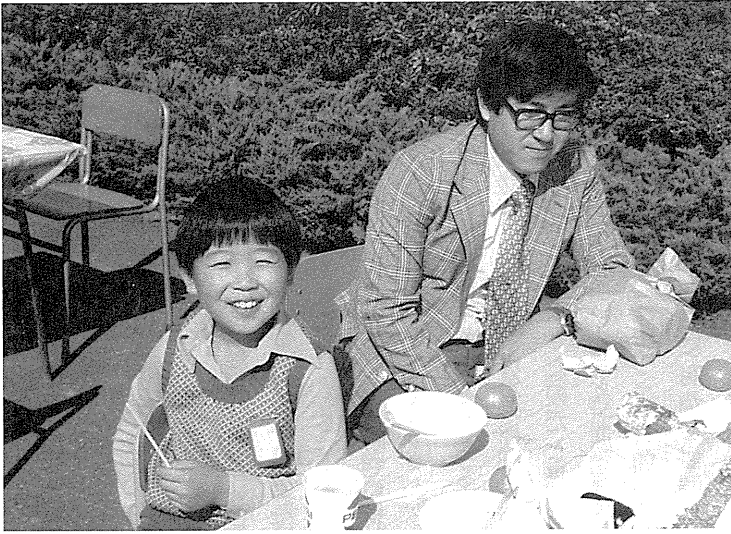


昨夏カナダ旅行をした際に、機内誌で読んだある作家の文章が記憶に残っている。ミッション系の小学校に通って早くから英語に触れてきたし、今も海外に出る機会が非常に多いにもかかわらず、英語がさっぱり出来なくて恥ずかしい思いをしている。しかしカジノなど自分の得意とする世界では、リラックスして英会話も何不自由なくできていくというのだ。この逸話は、私たちが外国語を習得しようとする際の参考になる。早期英語教育の是非はともかく、早くから勉強していれば語学の達人になれるとは限らない。その一方で、「自分の世界」に限定すれば、言葉の壁を越えるのは比

較的容易な筈である。それならば、その外国語を学ぶ当面の目的を明確にすることが、語学力向上のコツと言えよう。RPGゲームと同じで、弱い内からいきなり強敵を倒すことはできない。力をつけて次のステージに段階的に進む方法を模索するべきなのだ。

廣池学園で生まれ育った私が、初めて英語を学んだのは小学四年生か五年生の時だった。現在ではお隣の研究室にいらっしゃる「同僚」中道嘉彦先生のお宅に近所の子供たちと週一度お邪魔して、お菓子をご馳走になり、ゲームをして、英語の歌を歌い、テキストで勉強した。お菓子とゲームが先にくるのは不真面目だ

が、それが当時の私にとっての優先順位だった。それから四半世紀が経ち、何を教えていただいたのかはほ



四半世紀前の麗陵祭で（中道嘉彦先生と）

ほとんど忘れてしまったが、それでもいくつかの歌や英語フレーズ、雑談の内容は不思議とまだ覚えているし、中学校で抵抗なく英語の授業を受けられたのもあの勉強会のおかげだと思っている。英語の理解を強制されるのではなく、小学校の時に少しでも英語に触れた、というのが、私にはちょうど合っていたようだ。

麗澤大学では英語を専攻したが、よく「英語劇学科所属」と揶揄やゆされたように、顧問だったバントック先生のお宅と小劇場とに入り浸っていた。英語で指導を受けて活動し、時に理不尽な先生の注文に反駁はんぱくするなど、劇場という「自分の世界」ではそれほど抵抗なく英語を話していたという（かなり美化された）記憶があるが、大学三年生の春にイギリスを一人で旅した際、そして卒業後に進んだ大学院で、自分の語学力不足を痛感させられた。小旅行をするくらいは英語はできて、そこから一歩踏み込んで議論をする力がまだまだ欠如していることを異国の地で思い知らされ、これまで何をしてきたのかという気になったし、大学院進学

後はさらに辛かった。特に毎週七十五分の授業時間枠を完全に無視して延々と三、四時間続いたゼミは大変だった。院生わずか二、三人のゼミで、カナダ史に關する本を訳して、その日本語を確認する作業を毎週繰り返した。その日の範囲を分担して訳すのではなく皆が全訳し、それを比較検討するのだ。「田中君、その日本語で意味が通りますか」とよく叱られた。英語がでない劣等感に苛まれ、この道で生きていくならもっと勉強する以外にないと躍起になった時期でもあった。少しは英文を理解できるようになったのは、あのゼミと、その後のカナダ留学があつてこそである。英語劇に続いてカナダ研究という場が「自分の世界」になり、その必要に応じて英語力も向上したのだと思う。決して褒められた話ではない。追い込まれて勉強をしたにすぎないのだ。

学生の頃、自分の未来がどこに向かっているのか、自分に何が出来るのかが分からずに暗中を摸索していた。その未来のためにまず何から手をつけて良いのかと悩んでいる内に時間が過ぎていった。語学の学習も

人生そのものと同じで、「英語力を向上させたい」という漠然とした大きな目標を前に立ちすくんでいては何も始まらない。例えば一万語の語彙数を習得しようと思つたら、毎日十語を暗記して、しかも覚えた単語を忘れないという不可能な前提でも千日かかる計算だが、それでも十語から始めなければ何も変わらない歯痒さは、外国語を学ぶ多くの人が経験していることではないか。

そこで諦めてしまわないためには、壮大な未来図とは別に、短期的な目標を持つより他ない。高校まで英語が大好きで、それをさらに伸ばして将来は語学を武器にした職業に就きたいという大目標は素晴らしい。英語を習得して世界中の人とコミュニケーションが取れるようになりたいというのも――先に日本人ときちんとコミュニケーションしてからでも良いのでは？」と意地の悪いことを考えたりもするが――そのようなロマンティックな憧れは理解できる。しかし、漠然とした憧れだけで日々の努力を積み重ねられる人は稀であろうし、ほとんどの人は、もっと切実な必要や具体的な目



標があつてこそ努力できるのだと思う。実際にこれまでに英語学科の学生を見ていて着実に力を伸ばしているのは、「絶対に留学する」とか「来年は絶対上のクラスに入る」という明確で断固とした目標を掲げている人である。欲を言えばその目標が、「この目的のために英語が絶対必要だ」という風に「自分の世界」と結びついてくれればもつと良い。

私が担当する授業で、そのような具体的目標と語学が特に結びつくのはゼミであろう。田中ゼミは「英語圏地域研究」を看板に掲げて、カナダやオーストラリアなど、英米以外の英語圏について歴史的な視点から学んでおり、英文も読む必要がある。三年生の内から各々が自分のテーマを決めて同じ主題で何度か報告をすることにしており、そのために同じテーマの英文をいくつも読むようにと指導している。どんなことを勉強するにせよ、まず百科事典の関連項目をいくつか英単語で読み、さらに英語論文の一本も読めば、その後、同じテーマの本なら比較的早く読み進められるようになる。使用している固有名詞が分かっていると、しかも

話の展開が予想できるからである。わずか一、二年で英語の達人になるのは不可能でも、特定テーマについては英語で説明ができ、議論ができるようになってくれば上出来だし、それが自信になれば、次のステージへと進む道も開けるだろう。

現在、私は英語学科教員として演習の授業（時事英語）も担当しているが、英語力がまだまだ発展途上だと自覚している。語学の達人に囲まれた職場において、私ごときが学習法を語るのは口幅つたいし、本来他に書くべき人が大勢いると思いつつ執筆をお引き受けしたのは、私が語学の天才ではない皆さん（貴方は違いかもしれませんが）の側にいるという認識があるからだ。貴方はなぜ英語を勉強するのだろうか。英語で何をしたいのだろうか。その答えが具体的になった時、英語力が伸びる下地が整ったことになるだろう。そこから取りかかり、徐々に世界を広げていけば良い。

願わくば今度卒業論文に取り組み田中ゼミ一期生たちにとつて、その作業が「自分の世界」と英語を結びつける一助となりますように。

# 「英語」を食べていますか？

国際経済学部教授 大場 裕之



日々「英語」と付き合っている。とは言っても「英語」は専門でもなく、とくに語学センスもよいとは思っていない。しかし、そのような現在の私にとって「英語」は身体の一部であり心の一部になっている。そのような「英語」との出合いは高校時代に遡る。

## 一、様々な「英語」との出合い：学ぶ編

高校時代、郷里（山形県長井市）のバプテスト教会で英会話を習ったことがある。キリスト教は嫌いであったが（今も変わらない）、その教会で出会ったアメリカ人牧師ご夫妻は大好きであったし、英会話にも興味

があった。英会話は主にアメリカ人牧師の奥さんから習った。アメリカ英語との出合いである。今でも忘れないのは、「laboratory」と「lavatory」の違いを指摘してくださいったこと。前者は「研究室・実験室」であるのに対し、後者は「トイレ」の意味だから要注意！

大学（学部）時代は英語にcrazy?であった気がする。何でも英語に置き換えて表現するクセが身についてしまった。だから、今でも無意識のうちに英語が口に出てしまうことがあるようで、「先生の（日本語の）話の中には英語の単語が多い」と苦情を言われたこともある。アメリカ人留学生がたむろする国際学部のラ

ウンジに行つてはよく討論したものである。今から考えれば、文法メチャクチャでも話していたように恥ずかしい。若いっていいですね？ その国際学部では、中国の近代史の授業をとった。授業の中では中国人や中国の地名の英語名がよく出てきたが、日本語表記とは全く違うのでチンペンカンペンであったことを記憶している。学部を卒業する前、インド政府の公費留学生として、インド留学が決まったこともあり、永安先生の社会システム論の試験では、先生に英語で書いていかとお尋ねしたら、「よろしい」という言葉をいただいたので、答案に英語で書いた記憶もある。どうしようもないcrazyな学生だった。

インドのデリーにある国立大学院大学での留学時代がスタートしたのは、今から二十年以上も前（一九七七年）のことである。インド英語との最初の出会いは、留学第一日のデリー空港において私に近寄ってきた税関の官吏の英語？であった。手持ちのラジカセが課税対象だということを、“It's taxable”というインド訛りの英語で話す。何回聞いてもインドの言葉のようにしか

聞こえなかったのだからかなり苦勞した。インド人はよく“*No problem*”（問題ないよ）をよく連発する。だが要注意すべきことを痛い体験を通じて学んだ（そのままそのコトバを鵜呑みにするのではなく、“*No*”と“*Problem*”の間にコンマをつけ、“*No, (it is a) problem*”と理解しておく方が無難）。大学院での講義はすべて英語であり、かなりハードな内容である。最初の半年で十キログラムも減量してしまった。また、当時パソコンもなく、すべて手書きなので、腱鞘炎にもなってしまった。五月に最終試験があるが、デリーでは四十度を超える炎天下であり、しかもクーラーなし！の状況で行われた。私のインド人の友人は“*It's torture*”（拷問）と嘆いていた。そこには、日本人・インド人を超えて同じ苦しみを共有する仲間がいた。日本政府（文部科学省）から経済的支援を得て、修士課程から博士課程でさらに研究を続けた。しかし、博士論文作成中に重度の肝炎となり帰国せざるを得ない状況となり、一時は断念しようとも思った。しかし、随分あとになるが、日本の財務省から支援いただき、論文を完成し、Ph.D.

(博士号)も取得できた。また、それが本として出版(二〇〇五年)されたことはまさに恵みであり、感謝に堪えない。

## 二、「英語」で議論する：教える編

——「英語を教える」ではなく「英語で教える」  
インド留学から帰国し、民間のシンクタンクに七年勤務した後、一九九一年からイギリスにある英国曉星国際大学で教えることとなった。イギリス英語との出会いはある。インド英語とは違い、標準的なイギリス英語は発音しやすかった。しかし、家族と一緒にスコットランドを車で旅行した時はビックリした。近代経済学の父と言われるアダム・スミスが教鞭をとったところがあるというグラスゴー大学を訪ねるため、グラスゴーの街に到着。路上駐車できるかどうかでお巡りさんに尋ねた時、スコットランド訛りの英語で話され、まったく意味不明でわからなかったことを記憶している。麗澤大学でも英語で行っている講義がある。英語を

手段として専門科目を教えている。専門のひとつである日本のライフスタイルについて、海外と比較しながら、教材をもとに英語で討論する。マレーシアやフィリピン、中国、台湾、アメリカなどからの留学生と一緒になので楽しい。参加する日本人の多くの学生は英語で思うように発言できない。悔しい思いをする。自分の英語力のなさにショックを受け、一年間アメリカ留学をし再度挑戦した<sup>ひくま</sup>遅い学生もいる。また、政府の研究機関(AOTS)において、海外の日系企業に勤務する世界各国の人々と「日本の経営」について英語で三時間、長い時で六時間、トイレに行くのも惜しんで討論する機会がある。英語を通じていろいろな文化や価値観の違いも発見でき、素晴らしい体験をしている。英語を武器として、「英語で教える」いるものの、実際は英語を通じて数多くの実りあることを学んでいる。

## 三、「英語」を楽しむコツ、英語を食べるという意味

英語を志されている方へ、また、英語で悩んでいる方に応援歌を送りたい。英語を通じて、いろいろな価

価値観をもった人々に出会える楽しみを是非味わってください。そのためにも、英語を毎日、喜んで、食べるようにしてみてください。毎日欠かさずに英語で聴いて、英語を話して、英文を読んで、英語で書いてみてください。そうすれば、英語は「恐れや苦しみの種」ではなく「楽しみ種の種」となり、あなたの「英語」はヨチヨチ歩きの状態から成長するはずだ。英語を毎日食べて、楽しもう！ 聖書に“Be joyful, always.”（いつも喜んでいなさい）（テサロニケ人への手紙第一）という言葉がある。英語を通じて様々な価値観に触れ、ほんとうに Joyful なものを発見し、Joyful なる人生を送ろう！



# 麗澤の外国語教育の伝統と私

国際経済学部教授 竹内 啓二



## 道徳科学専攻塾の外国語教育

麗澤大学には外国語教育重視の伝統がある。麗澤大学の前身の道徳科学専攻塾の教育について『廣池学園五十年史』には次のように書かれている。

外国語教育では、英語の学習に主力が注がれ、会話を含めた実用英語をめざし、方法としてはオーラル方式とリピート方式を採用した。テキスト（リーダー）全文の暗誦から出発し、英文日記、エッセイ、英字新聞などまで幅広く教授していった。高学年では古典語を修め、地理や経済など、一般の学科を原書で教えるなど、英語の徹底した実

力養成がはかられた。その英語のうえに、ドイツ語や中国語を第二外国語として取り入れていった。

『廣池学園五十年史』第一卷三二八頁)

英語教育については、

従来の旧制中学校における英語教育に不満を抱いていた塾長「廣池千九郎」は、会話を主とするオーラル方式（口誦）（暗記している文句などを声に出して言うこと）とリピート方式（反復繰り返し方式）とを採用して、耳から口へと直結する教育を進めた。そのため、外国人教師を雇い入れたり、二世または外国（アメリカ）在住経験教師を

迎え入れたり、あるいはまた語学に堪能な優秀教師による教育に力を入れた。(前掲書)

外国人との交渉などで英語が実際に使えるようになることを目指していたことがわかる。経済やその他の学科を原書で教えるという方式は、現在でも本学で行われていることである。

廣池千九郎が道徳科学専攻塾の教育方針を述べている資料には、次のようにある。

さて学問と申すものは、必ず先生について、一々習わなければならぬものは語学と数学とであつて、この二つは精神科学「自然科学以外の学問の総称」および自然科学の習得ならびに活用上における方法的基礎学であるのです。そこでこの二つの基礎学は、精神的基礎学たるモラロジーと同じく、どうしても先生について学ばなければわかりませぬが、あとの学問は独学でもできます。(『資料が語る 廣池千九郎の歩み』改訂版、モラロジー研究所編、廣池学園出版部、昭和五十七年、五三九頁)

また、廣池千九郎は、具体的な目標として、「自分で原書がドシドシ読めるようにならねばならぬ」とし、「同じ言葉を二百回くりかえし読めば自分のものになり、会話に役立つ」とも言われたとのことである。(前掲書、五四三頁)

また、修了して塾を離れる塾生に対して、「英語の練習を怠るなかれ。毎夕カレント・トピックスを聞くべし」、「英語にて書ける道徳、経済、商工業の書を読むべし」との訓話をされている。(前掲書、五四二頁)

#### 私の麗澤大学の学生時代

この創立当時の語学重視の教育が麗澤大学には受け継がれてきた。私自身本学の外国語学部イギリス語科(現在の英語学科)の卒業生であり、本学の語学教育によって育てていただいた一人である。私の学生時代は一九七三年四月～七八年三月であり、当時は全寮制で、学生数も少なく、一学年が九十名程度であった。

一年生のときは、田中駿平先生による英会話テキストの授業が毎朝、L1教室であった。イギリス人のギ

ヤビン・バントック先生の英語でエッセイを書く英作文の授業では、先生が丁寧で訂正してくださった。川窪啓資先生の授業では、百科事典のように分厚いトインビーの『図説 歴史の研究』の原書を読むことに挑戦した。卒論は英語で書いたが、割石虎雄先生に丁寧に直していただいた。谷口茂先生には、英字新聞を読み、英語ニュースを聴く授業をしていただいた。大塚善治郎先生には英語の発音の詳しい指導を受けた。宮島達郎先生からは、英語の教師を目指す学生のための教育実習の指導を受けた。森正晶先生には文法を、矢野重治先生にはアメリカ文学を教わった。宗武志先生には、環境問題などを取り扱ったテキストの講読の授業を受けた。

課外活動として、現在も続いているESSや英語劇の活動があり、多くの学生が参加していた。夜の時間でも英語劇やESSの活動があつて、一日の多くの時間、英語に接することができた。年中、英語しか話さないというところで通された先輩もいて、大きな刺激になったものである。夏休みや冬休みなどには、現在の

谷川セミナーハウスなどで、ESSの合宿をやり、その期間は英語のみを話し、日本語を話す罰金とした。川窪先生宅で行われた「英文モラロジー研究会」では、英訳の『新科学モラロジーと最高道徳の特質』の精読を通してご指導いただいた。

私はESS主催の英語スピーチコンテストで思いがけなく優勝できたことがきっかけで英語スピーチコンテストに熱心に取り組んだ。毎日デイリー・ニューズ主催の全国学生英語弁論大会に六人の関東代表の一人として出場できた。宗先生から個人的にスピーチの指導をしていただき、先生のメリハリがあつて、流れるような英語のスピーチを聞かしていただいたひと時は、私にとって貴重な宝物のような時間であつた。

また、英語劇は毎年参加し、一番大きな役は、リア王の信頼する家臣であるグロスターの役であつた。英語劇の良さは、実際の状況の中で英語を使うことを覚えることであろう。セリフを動作や表情をつけ感情を込めて覚えることは、実践的な英語力をつけるために役立つと思う。繰り返し練習し覚えたので、今でも



セリフの一部は覚えていくほどである。最近、演出をしてくださったバントック先生が、当時録画してくださっていた劇の映像をDVDにしてください、学生時代の自分に再会した。

### 私の英語の授業について

私は、国際経済学部が創設されて以来、英語の授業を担当してきた。現在は、国際経済学部の英語講読と英語セミナーを担当している。私は、英書の多読を学生に推奨している。英語を日本語に置き換えていく英文和訳も大切である。しかし、学校教育で、あまりに英文和訳、英文解釈に力を入れてきたために、学生は英書を訳さずに読む楽しみを味わうことができていないのではないだろうか。自分自身を振り返っても、専門に関連する本を精読したり、翻訳したりすることに多くの時間を費やしてきて、確かに、英文の文章を詳しく読み取る力をつけてきた。しかし、日本語の小説を楽しむように、英語の小説を楽しむ機会はあまりなかった。だから、時間のある学生の間に、その喜び、

楽しみを味わってほしいと思う。そうすれば、卒業後も、何かの折に、英書を手にとって読み始めるのではないかと思うからである。英語の学習も楽しみがなければ長続きしない。

英米の子供の利用する絵本や児童書、漫画、さらには、本学図書館地下二階に配架されている英語学習者の段階別読み物をたくさん読むことを推奨する。段階別読み物とは、Penguin Readers, Oxford Bookworms, Macmillan Readers などのシリーズである。これは使用される語彙数が段階的に増えていき、文法事項もやさしい順にレベル別に導入されている。やさしい本からの多読のやり方や体験談などは『辞書を捨てれば英語が読める―100万語多読入門』（古川昭夫、伊藤晶子共著、酒井邦秀監修、コスモピア）、『快読100万語！ペーパーバックへの道』（酒井邦秀著、ちくま学芸文庫）を読んでもください。この方式をSSS (Start with Simple Stories) と称し、SSS 英語学習法研究会というグループもできている。この研究会は、ホームページも開設しているので、見てください。

## 私の英語

国際経済学部教授 堀 元子



父の転勤でロンドンに行くことになったのは私が十二歳のときでした。その頃は北極回りで二十四時間の長旅なので、アラスカのアンカレッジに寄ったのを覚えています。アルファベットや簡単な英文の特訓を二ヶ月弟と一緒に受けて旅立ったのですが、このアンカレッジでその英語を試す機会が訪れました。りんごを見かけてこれを買おうとして私が発した英語は、「apple want」だったのをはつきり覚えています。

この幸先の悪いスタートから一年間は悪戦苦闘の連続でした。今の皆さんのように英語の環境には全く恵まれません、文法も知らず、ほぼ空白で半年は過ぎました。

学校で誉められるのは数学だけ（これは全ての帰国子女の経験です）。来る日も来る日も何を言うかも聞くかもわからないことが続きましたが、不思議と嫌気がさしませんでした。

恐らく子供であった為、何かを話して自分を伝えること、そもそもその自分が固まっていなかったために、友達がやさしければ少し明るくなり、意地悪をされれば、それに落ち込むことの繰り返しであったような気がします。自分が固まっていないことは、それだけ吸収力があるとも言えます。相手がある行動や言動をする時の言葉遣い、仕草、ニュアンス、そしてイントネ

ーションが少しずつ、ほぼ無意識の内に浸透したとも言えます。

特に英語の会話、その延長線上の書き言葉ではイントネーションが格別に大切なものとなります。語順も文章も同じでも、イントネーション次第ではまるでニュアンスが違ってきます。でもこれは最初にして最後の関門であるといえるでしょう。この間で一番大変なのは、実は私の「I apple want」なのです。つまり、この場合は単に語順の問題であるのみならず、日本語に対応させて英語を理解しているわけです。これは私が子供であったため、日本語にも英語にも固まっておらず、対応を諦めなくてはいけないので終わった問題です。

が、英語を学習するに際して一番大変な思いをしてしまうのはこのためからです。語順のみならず、文章の中の言葉を対応させようとすると、壁にぶつかってしまいます。これ乗り越えるには、別々に覚えるのが一番遠回りのようで近道なのです。ただし、英文翻訳の際には、この二つをどれだけ別々に理解してい

るかが試されます。私の場合には、この後他の言語を学習する際に、これを別の体系として終始一貫して学びました。それが可能であったのも、英語を別の体系として学ばされた体験があったからだと思います。

この日本語と英語の対応が不可能なのは、一つには考え方が違うからだと思います。たとえば「nothing has changed」と言うのを、「無」何も無いが変化するのはおかしいという指摘がクラスで出ました。この場合に「everything has changed」の反対として理解してもらったのですが、「無」という概念が日本語では定着していても「在る」という神から全てが発するキリスト教の欧米系の言葉ではこの説明はとても難しいと思います。私は少し思想史もかじったので、これが厄介な問題で、自分の手には負えないことも承知しています。

特に言葉では論理上のつじつまを合わせるために、虚構を考えることがあります。これもその一種かなとも思いますが、そうすると問題はますます複雑になります。

これと同じ位、もしくはこれ以上難しい質問にも出くわしました。それは「I was beginning to realize」と

「I began to realize」との違いです。最初の文章は進行形であるのですが、次の文章には区切りがあります。しかも「何々し始める」と、「始める」の間には違いが無いとも言えます。しかし、ニュアンスとしては、最初のほうが少しずつ夜が明ける、に近い感じとも言えます。私の拙い解釈では、最初の文章を述べる時には「I」という「私」は始まった時点で自分を置いていません。次の文章では、「I」という「私」は始まった時点を取り返っている時点にいます。この時点と言う問題はまたしても考え方の違いから来ているように思えます。

キリスト教文化圏では始めと終わりがはっきりと区切られていて、現在はその二つの間のどこかに位置しています。この現在というのをどこに位置付けても、そこから過去と未来が位置付けられるのです。なんとなく始まり、なんとなく終わるといふ曖昧な感覚の中では、位置は測定できません。その曖昧さが日本語の

表現方法の豊かさであるとも言えます。

さて、ここまでくればはっきりするでしょうが、実は言葉は虚構なのです。考える時の道具としての言葉は、自由に操れます。虚構にはパラエティーがあるので、一つの虚構と別の虚構の間を行ったり来たりもできます。一つの虚構の中のある言葉が、別の虚構の中では違う働きをしたり、それとは違う言葉が同じ働きをしたりしているのです。

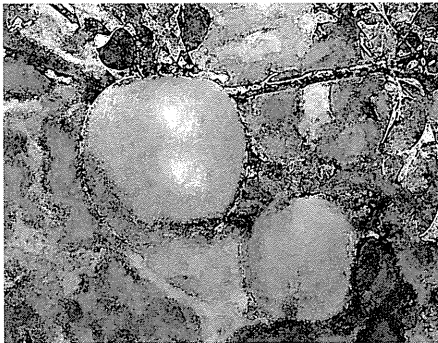
こうなれば、もう一つの問題は、虚構と虚構をつなぐ翻訳、通訳の問題です。文字通り単語を引いて対応させる語順で英語から日本語、日本語から英語を訳していくと、文章にはなってくれません。一体自分はどこらに足場を置いているのであろうと考える以前に、重要なのは、その二つを隔てて見る自分の存在です。考えがしっかりしていれば、その言葉のベールをすかして見ると、論理的な構造が見えてくるはずですが。それだからこそ、論理や理性の普遍性が成り立つのだと思います。そのことがはっきりわかるのは、別の言語

体系のなかに自分を置いて、その言葉の構造を理解することができた時です。もちろんエスペラントのような言葉が理論的には可能なものもこの普遍性のためであるとも言えましょう。この考えることが無いと、単に“hello, good-bye”の挨拶英語、そしてフィーリングとスラングの英語になります。

無論、ボディー・ランゲージは、動物としての人間、一番共通性のある伝達手段でもあるために、虚構を飛び越えて相手に事柄を伝えることもできる手段です。しかし、感情以上の伝達は恐らく不可能でしょう。言葉は人間の道具ですから、その人を表すだけでなく、その人を支配をもします。その言葉を自分の内面世界と感ずるのは詩人には許されるでしょうが、言葉の学習は一つの虚構ともう一つの虚構に対して第三者的に存在する具体的で客観的な事実を正確に伝えることから始まるのではないのでしょうか？

つまり、虚構である言葉が現実のものに対応する時、特に物であったり、自然現象であれば、言葉も現実の一部に成り得ます。相手に言葉で自分の気持ちを伝え

るのは後回しにして、いかに事実を伝えるかを学ぶことができた時に、英語に一步近づけるような気がします。特に英語という言語が客観的な描写に優れている特性を持つことを考えると、これが遠いように見えて、そして退屈で、実際は意外と近い道なのではないでしょうか？



## わたしの英語史

国際経済学部教授 堀内 一史



何かを始めるにはきっかけが必要のようです。わたしの場合、誰に勧められたわけでもなく、いつのまにか外国語に関心を持っていったという印象が強いのですが、今思い返してみると、小学生の高学年のころ、実家にあった百科事典でさまざまな国を調べていたときに、各国の言語の欄に載っていた日常会話のカタカナ発音表記を丸暗記したのがきっかけだったのかもしれない。

英語に興味を持ったのもそのころでした。それ以来、田崎清忠先生が担当しておられたNHKの英会話番組組を見たり、松本亭先生のラジオ英会話の番組を聴いた

りしていました。高校へ進学すると、英語の弁論大会に出場したり、英会話の合宿に参加したりして好きな英語を伸ばす努力をしました。また、日中国交回復による中国ブームに煽られて中国語に興味を持ち、中国語同好会を設立したのも高校生のころです。

大学は中国語と英語のどちらかを専攻するか迷った末、本学の外国語学部イギリス語学科で英語を専攻することになりました。当時の麗澤大学は、ある種牧歌的な雰囲気の中で時間がゆったりと流れるような学風の大学でした。全寮制で、少人数でしたからキャンパス内に知らない人はほとんどいないほど小さな大学でもあ

りました。

入学当時（一九七三年）、学業と部活動に明け暮れる毎日でした。朝は、授業が始まる前にアリー・モーニング・クラスという単位にならない授業があり、教室に行くと、若手の先生方と先輩が待ち構えていて、英語で三十分ほど会話をしました。午前中の授業が終わり昼食時ともなれば、友人と食事をしながら英語で語らうグループLEE (Let's Eat English) に参加し、新しく仕入れた表現を使って友人が理解できないでいるのに気づくと快感を覚えたものです。放課後は、剣道部の部活動で汗を流しました。夕食後には、所属していたESS (英会話部) の部活動です。活動は比較的地味なものでしたが、学期に一度の学内スピーチコンテストや東京理科大学など近隣にある大学のESSと共催のスピーチコンテストなどにも参加しました。

今思えば、授業はもちろんのこと、一日の大半を英語の環境に身をおいて過ごしていたようです。当時留学や単位の互換制度などはありません。留学するには休学か退学の他に道はありませんでした。ですから、

とにかく自分の生活環境を英語の環境にすること以外に、英語の上達を促す方法はないと固く信じていましたので、ネイティブの先生の存在はとても大切でした。イギリス語学科の英語ネイティブの先生は専任、非常勤それぞれ一名しかおられなかったと記憶しています。中でも、一番記憶に残っているのは、バントック先生です。キャンパス内にあったご自宅によく伺ったものです。ESSの顧問をしておられましたが、一年生のころ先輩が先生と英語で口論をしているのを見て、いつかこの先生と英語で口論ができるようになるぞ、と密かに闘志を燃やしたものです。

第二外国語はドイツ語を選択していましたが、授業以外にもリュッケ・コスマンというドイツ人の講師のお宅に足しげく通って、薄いドイツ語のテキストを英訳して自分の理解が正しいかどうか、先生に点検してもらったりもしました。あのころは、英語とドイツ語を混ぜて意思疎通を図っていたのであろうと推測しますが、語学は使わなければたちどころに錆び付いてしまふものです。ドイツ語に関しては今それをしみじみ

と実感しています。

わたしが本格的に英語と接するようになったのは、二十七歳のときです。初めての海外留学。ロサンゼルス国際空港に降り立ったときのことを今でも鮮明に覚えています。晴れ渡った八月の空は雲ひとつなく、眩いばかりの陽光が降り注いでいました。当時勤務していたモラロジー研究所に關係する知人のお宅へ行くためにタクシーを拾ったら、ドライバーは大柄な黒人の男性でした。住所を書いたメモを見せ、そこへ行くように伝え、返ってきた彼の英語がまったく聴き取れずに困惑しました。自分の聴解力に落胆していると、いつものまにかタクシーはフリーウェイを走っていました。ところが、同じ道を引き返しているのに気づいて、えもいわれぬ不安に襲われました。どうにか目的地に着いたところで、ドライバーから道を間違え遠回りしたことを知らされました。その後、道を間違えたのは自分のミスなので通常走行した場合の料金を請求するという言葉に感激し、とても幸福な気分になりました。聞けば、ドライバーは週末には欠かさず教会に行く

敬虔なクリスチャンであることに、さらに感激したものです。

一年目は、麗澤大学と提携關係にあったレッドランズ大学に交換留学生として留学しました。英語研修課程のない大学ですから学部の授業を受けたのです。アメリカの大学生は一学期間にげっそり痩せると聞いていましたが、それが単なる噂ではなかったことを実感することになります。履修した科目は学部のものが中心でしたが、かなりハードなものでした。予め文献を読むことが宿題として課され、ひとつの授業で五十〜六十頁が毎回割り当てられます。四科目履修すると予習の読書量が二百頁を超え、さらに授業は週二コマでしたから、アメリカ人の学生でもかなり厳しかったようです。わたしなど夜は図書館で授業の準備に明け暮れました。それでも足りないのです、週末を図書館で過ごすこともありました。大学の図書館も夜遅くまで開館していて勉強する体制が整っています。ゆつたりと、静かな雰囲気のある図書館で勉強するのは至福のひとつでした。今でもわたしはアメリカの大学のそんな雰囲気



が懐かしくてたまらなくなるときがあります。こうした環境の中での留学生活ではありましたが、日本での学生時代のようにネイティブの先生との接触は欠かしませんでした。パット・ワジリエフスキーという社会学の若手の女性講師に勉強会の依頼をしたところ、自分の勉強にもなるということで、快く引き受けてくださったのです。週に一度先生の空いた時間に研究室に押しかけ、自分が専門にしようとしていた宗教社会学の論文を数本一緒に読みました。一対一の勉強会でしたから、わたしの些細な質問にも丁寧に答えてくださいました。

大学院でも最初は英語で大変苦労しました。宗教社会学や宗教学、社会倫理を学んだのですが、わたしの他はみなキリスト教やユダヤ教などの信仰を持つ院生だっただけに、特定の信仰を持たないわたしは、英語はもとより、とても大きなハンディを背負っていました。しかし、泣き言はいつておられません。最初の授業は、まったく発言できずに終わり途方に暮れました。教授の講義は理解できても、学生の議論だけは一旦始

まるとなかなか中に入れないのです。そこで、先制攻撃という戦術を試みることにしました。兎に角、最初に発言をして自分の準備した事柄から議論が始まれば後は何とかなると考えたのです。予習をしっかりと、発言内容を予め準備しておき、教授の講義が終わって学生の議論が始まるころを見計らって、まず自分が真っ先に発言をし、調べておいたことを話しました。出だしに成功するとたいいの授業で三、四割の議論に参加できました。予習や復習に時間が奪われ、ずっと睡眠不足だったのは言うまでもありません。

留学後の十二年間、わたしはアメリカに留まりモロロジ研究所・麗澤大学ワシントン事務所に勤務しました。しかし、留学していたころが一番英語に苦労しましたし、またその分飛躍的に力がついたと考えています。学生諸君に助言することがあるとすれば、それは、外国語を身につけたければまず留学すること、そして何よりも生身の外国人と接することです。

## 私の留学生活

国際経営学科二年 岡田 友里



私は今、アメリカのロードアイランド州にあるサルベレジーナ大学に八ヶ月間の留学にきています。留学のきっかけは小さいころにこっちに住んでいてアメリカにすごく興味があったというのもありますが、これを機に本格的に自分の英語力を伸ばしたいと思ったからです。今まで何度か同じことを思ったりはしましたが、具体的に何から始めたらいかがかわからず、結局は何もせず終わっていました。そんな自分がいやになり、私はこのサルベレジーナへの留学を決意しました。

アメリカにきてまず初めに衝撃をうけたことは、挨拶です。すごく簡単なように聞こえますが、最初のう

ちは挨拶ひとつも満足にできませんでした。それほどいうことかというところ、こっちの人は初対面の人にも目があえば挨拶をします。その挨拶ですが日本の教科書にのっているような堅い挨拶は全くと違っていいほど聞きません。なので、最初のうちは挨拶をされてもその返事に困ってしまい、そんな初歩的なことすらもできない自分にひたすらイライラしていました。しかし、二週間もしたらその挨拶にも慣れ、周りの人たちの会話を聞きながら自分も真似をしていました。アメリカにきて日本の授業では習わないような言い回しなどをたくさん聞くことができました。日本では文法

や単語、熟語などに重点をおきますが、実際に一番大切なのはコミュニケーション能力なのだと改めて感じました。こちらの大学の留学生でフランス人の友人がいるのですが、同じ第二外国語を勉強しているのに、決定的な違いはコミュニケーション能力でした。長文読解、文法などは日本人のほうが得意なのですが、それを実際の生活にあまり活かせていないのです。ディスカッションの授業では一層違いが明らかです。

自分も含め、多くの日本人は、間違えることを恥ずかしいと思つて発言をしなかったり、わからないことを聞かずに流してしまつたりがすごく多いと思います。しかし、それをずっと続けていては伸びる英語能力も伸びないと思ひました。こちらで本当に英語力を伸ばしたいと思うならば、わからなくて当たり前なのですから、その恥ずかしいと思つてしまう壁を壊さなければいけないと思ひました。

このサルベレジナ大学の留学の特徴は、正規の授業を一般の学生と一緒に受けられることです。アメリカ人の学生と同じ授業を受けてみて、すぐに思つた事

はアメリカ人の学生は日本の学生に比べてやる気がすごくあるということです。日本にも、もちろんやる気のある学生はいっぱいいますが、大半は実際のところ遊びにきているようなものだと思います。授業の講義中寝ている人もいますし、その光景が当たり前になつていると思ひます。しかし、こちらの学生で寝ている人は一人もいません。みんな一生懸命授業に参加しているのです。モチベーションが違います。私は日本の大学の制度を本当に見直すべきだと思ひました。そして同時にその光景が当たり前になつていゝことをすごく恥ずかしく感じました。授業の内容ですが、アメリカ人と全く同じ授業を受けます。アメリカ人でもわからないこともあるのですから、当然わからないこともいっぱいあります。もちろん課題もテストも全く同じです。評価も同じにつけます。ですから、先程も書いたように、わからないことをそのままにしていたらすぐついていけなくなります。私は授業のあとに教授にいつもわからないことを聞きに行くようにしました。日本ではその授業の内容を教授に聞きに行ったことが

なかったのですが、わからないことがあれば聞く習慣ができたので、それはとてもいいことだと思いました。

授業ではどういうことをするのかというと、私はビジネスのメジャーでしたので、もちろん講義もありますが、プレゼンテーション、レポート、リサーチペーパー、ディスカッションが多いです。私は今、マクロ経済、マーケティング、企業倫理などを今回のセメスターで履修しています。そのなかのディスカッションでは、ちょうど最近アメリカに大型ハリケーンが直撃して、経済に多大な影響をもたらしたので、そのトピックについてが一番多かったです。あと、どの授業でも中間、期末テストの他にきちんと内容を理解をしているかのテストが毎週あります。ですから、みんな授業も一生懸命です。

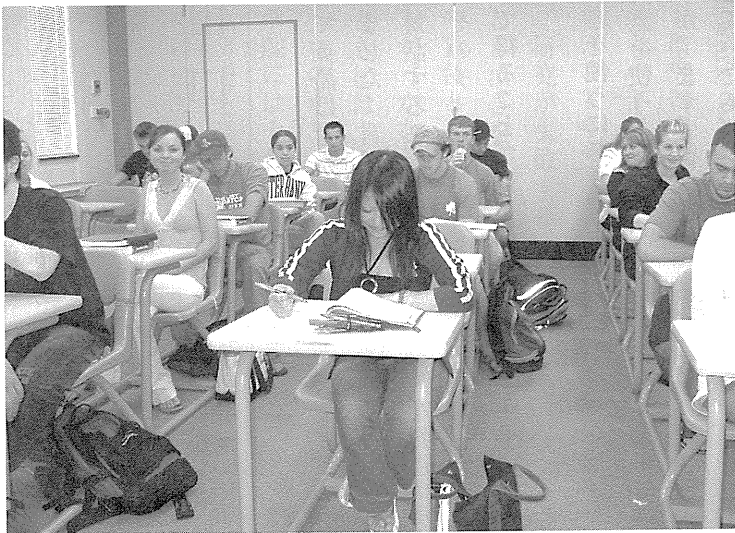
最近ではなぜか日本にいた時よりも辞典を使う回数が減りました。もちろんわからない単語があれば調べますが、逆に辞典に頼る事がなくなりました。今では一回も辞典を使わず理解できる授業もできて、だんだん授業にも慣れてきました。また、辞典を引くとき

には最近では英和辞典ではなく、最初に英英辞典を開くように心がけています。どうしてもわからない場合はその後英和辞典を見ますが、このやり方をやっているとして少しずつですが、何かを説明するときに単語がスラスラ出て、わかりやすくものを言えるようになってきました。ですから、少し慣れたらこのやり方はとてもおすすめです。それと、一週間に三、四回ですが、ジャーナルを英語でつけています。内容はその日にふったこと、感じたこと、ニュースを見て思ったことなど、何でもいいのでこちらに来てから書き続けています。これも、文章を書く習慣になり、すごくいいと思います。十二月に入るのでそろそろテスト、プレゼンテーション、ペーパーの提出が全部の授業で重なる時期なので、大変だとは思いますが頑張っていきたいと思います。

最後に少しこちらの学校以外での生活について書こうと思います。私は今寮に住んでいるのですが、二人部屋でアメリカ人のサラというルームメイトがいます。すごくいい子で毎日二人で単語の教え合いをしています。

す。私は日本語を、サラは私に英語の単語を教えてくれます。そして、それを部屋の壁に貼ったりしています。今年のウィンターブレイクはサラが家に招待してくれているので、二週間ほどお世話になる予定です。サラのおかげで私はこちらの生活に慣れることができました。なので本当に感謝しています。

まだ私の留学生活は終わっていませんが、充実していて、毎日が発見の連続でいろいろ成長させてもらっています。この留学は八ヶ月間で終わってしまいますが、日本で大学を卒業してからは、アメリカの大学院でまた勉強をしたいと考えています。それほどこの留学は私の中で大きなものになりました。残り少ないですが、後悔の無いように精一杯頑張って、日本に帰ってこの留学は成功だったと自信もって言えるようなすばらしいものにして帰りたいです。そしてこの留学をさせてくれた両親に本当に感謝をしたいと思います。



サルベジナーナ大学での授業風景

# 言葉は生き物

国際経営学科二〇〇〇年三月卒業 山口 綾乃



## Introduction

ハワイから“ALOHA!”私は二〇〇〇年三月に麗澤大学国際経済学部を卒業した山口綾乃と申します。現在は、ハワイ大学大学院社会学研究科博士課程に在籍し、医療社会学、社会疫学を専門に学んでいます。もともと、修士課程の専門領域が異文化コミュニケーションであり、医療系における社会資本、社会的サポート、ならびに社会的ネットワークを異文化の視点から研究しております。

大学時代から異文化コミュニケーションに大変興味があり、英語を学ぶにあたって、異文化のことを語ら

ずして英語は習得できないという気持ちか私には強くありました。言葉は、生き物です。その土地の人々と直接対話することでその生きた言葉を習得できると考え、そのチャンスをいま私はハワイ大学大学院留学を通して得ることができたわけなのです。

## 英語を使うにあたっての苦しみ

英語を使う苦しみというと、日々体験していることですが、まず、留学して一番に思うことは、日本で学習していた英語がまったく通じないということなのです。これは、私の友人達もまさに同じ体験をしています。

すが、TOEFL®テストがかなりハイスコアでも、大学院の授業についていけないという事態がおきてくるわけなのです。私も初めのころは、英語が通じず、ネイティブの友達に「電話で連絡がほしい」といわれても、「英語が聞き取れなかったらどうしよう」、「間違っ  
て聞き取ってしまったらどうしよう」という恐怖心が強くあり、電話ではなくメールでのコンタクトをした  
思い出があります。さらに、授業登録の際も、アメリカの大学は日本と違い、管理する側がかなりいい加減  
などところがあるのですが、授業登録の内容の確認を  
したいと思っても、電話は使わず、直接オフィスに向  
き、face to faceで話しに行きました。face to faceだ  
とどこが間違っているのかを、言葉ではない部分で説明  
できるからです。

例えば、大学院の授業についてですが、ペーパーと  
いう課題が主流を占めてきます。このペーパーを書く  
ために、かなりの量のジャーナルを読まないといけな  
いのです。そのため学生は寝る暇がないのですが、そ  
んな状況の中で一生懸命書いたペーパーに対して、

アメリカ人の先生方は往々にして、“Keep up good  
your work”といって励ましてくれます。しかし、あく  
までも研究は自己責任という意識が強く、学生が積極  
的にペーパーに関してやり取りをしなければ、それ以  
上のコメントやサポートは得られないのです。結果と  
して、研究が失敗するということも多々起きますが、  
そのとき泣きをみたとしても、アメリカの大学院は、  
学生の責任として処理されます。だから責任の追及の  
され方が、かなり厳しいように感じられます。日本に  
いたときには、先生と生徒の關係に「情」や「情け」  
というものがあつたように感じられますが、アメリカ  
の大学院にはそれはないと言えるでしょう。研究が失  
敗しようとうとうと、結局は学生の研究であり、  
教授の研究ではない。しかしながら、教授たちはいろ  
いろな注文を言うし、失敗しても責任は彼らではなく  
学生。そういうところで改めて、アメリカの大学院の  
厳しさを思い知らされるわけです。

彼らにしてみれば、学生の研究を少しでもいいもの  
にしたいと思つて言ってくれているわけです。でもあ

くまでも独立した研究者の卵として自己責任の重さを  
彼らは学生に要求します。この点でかなり私も苦勞し  
てきましたし、いまだに苦勞しております。

日本にいと、学生に対しそこまで自己責任は追及  
されないし、その背景には「情」「情け」という東洋的  
な感覚が入り込んでいることはいうまでもありません。  
しかしながら、アメリカの大学院ではあくまでも  
“friendly but friend”であるということを学ぶことがで  
きました。あくまでも教授は学生に“independently,  
not dependently”なわけなのです。

日本にいたときは、「英語をどうやって習得しよう」  
ということが勉強や生活の中心だった気がしますが、  
今は、英語をどうやってではなく、何とか使いこなし、  
乗り切るしかないという方向に変わりました。英語を  
理解するために、何時間もジャーナルを読んだり、ネ  
イティブの友達と一緒に勉強会を開いたり、映画にい  
ったり、そうした体験を通じて、体で英語を学ぶ機会  
を得たことが大きな収穫だと思えます。そう思うと、  
いまは「英語を習得するぞ」という入り口ではなく、



MA (修士課程) 時代からのよき相談相手の先生と



「英語を丸ごとマスターしよう（それは相手の文化的価値観をも理解してその言葉がどういう意味で使われているのか、アメリカにいうことで、また、ハワイという多文化に身を置くことで、“Intercultural competence”が磨かれ、英語に関しても文化的な背景がわかってくるので、“know”ではなく“understand”に）」と体ごと切り替わってきたような気がしています。これは、本当の意味で「英語を学ぶ」という醍醐味だと思いますし、麗澤大学にいる皆さんも、留学する機会がある人、または無い人でも英語の環境にすることはできると思います。英語を学ぶ際に、自分はどのように英語のスキルを生かしたいのか？どうして英語を必要として学びたいのか？などと自分自身で目標を決めてそれに向かってトライしてみてください。何かを極めるということは、苦しみを伴うこと。しかしながら、その苦しみがあるからこそ、それを乗り越えたときに楽しみがあるのではないのでしょうか。

## Conclusion

英語習得といっても、苦しいときのほうが多い。でも、私は、苦しいことを含めて、相手に言葉が通じたときに得られる感動は言葉では説明できないくらいのものであるということを知っていますし、それがあからこそ私は続けていけるのだと思います。誰かとコミュニケーションしたいという思いが、英語学習を苦から楽にかえ、喜びをくれるものだと思うからです。「半分しかない」ではなく、「半分もある」という“Positive Thinking”で、英語が苦手な人でも、「どうして苦手になってしまったのか？」と考えてみるのでもいいと思います。その原因がわかったら、それをSolvingするために、大学の先生方や周りの方に相談するのも悪くないと思います。それとか、友達とともに「Times」を一緒に読むとかやり方はたくさんあるはずですから。そうこうしているうちに、英語がだんだん読めるようになり、きつとあなたも英語学習を苦から楽へ、“Negative Thinking to Positive Thinking”に変えていることではないでしょうか。お互いに頑張ってください。

## 自信を持ってドイツ語

外国語学部講師 草本 晶



ドイツ語を始めたきつかけは、なんだっだろう。「どうしてドイツ語を選んだのか?」という質問はよくされるが、うまく答えられたためしはない。その当時の気持ちを出そうとしても「ヨーロッパにいつてみたかったから」ということしかないのだが、それだけではあまりに単純で拍子抜けしてしまうらしい。なぜフランス語やイタリア語ではなくてドイツ語なのか、という疑問にも答えていない。とはいえ、他に特別な理由もなく答えようがないので、長いこと「フランス語は私にはおしやれすぎて」と笑ってごまかしていた。だが、一度ドイツの人に「ドイツ語はおしやれじやな

くてごめんね」と皮肉を言われてからは、それも使っていない。

なぜヨーロッパに行ってみたかったのか。幼い頃、私は父の仕事の関係でアメリカに五年ほど住んでいた。幼稚園から小学校へ入ってしばらく、現地の学校に通ったこともある。おかげで高校二年くらいまでは、とくに英語の勉強はしなくともそこそこよい成績が取れていた。さすがに受験する段になって、七、八歳の子供の語彙ではとても太刀打ちできないことに気づき、勉強を始めた。それでも、英語はまあ基本ができてからいいんじゃないの、という感じで、新しい言語を

勉強したいと思っていた。小さい頃から二つの言語に挟まれて育ったせいかな、言葉そのものに興味があつたし、欧米人の友人も欲しかった。ヨーロッパの美しい町並みや豊かな文化にも憧れがあり、言葉を覚えるなら現地に行くのが一番、と考えていた。

ドイツ語を勉強しようと思ったのは、麗澤大学のドイツ語学科を受験するときである。なぜこの学科を選んだかという、「ヨーロッパへ留学ができる」「少数で外国語が学べる」「実家から通える」という理由からだった。麗澤にドイツ語があつたので、ドイツ語になつたのだ。もし麗澤にフランス語しかなかったとしたら、フランス語を始めていただろう。もしヨーロッパの言語がなかったとしたら、ほかの大学へ行っていたかもしれない。それだけの理由である。(何かを始めるときの理由なんて、案外この程度なのかもしれない。)

そんなわけで大学に入ってからドイツ語を始めた。当時は学科の定員が現在の半分(三十人)で、一年間は寮生活が義務づけられていたので、なかなかインテンシブな毎日だった。好きなことが勉強できたし、留

学という目標もあつたので、毎日楽しかった。はじめて覚えたドイツ語は「Tecker」(おいしい)だったと思う。新入生歓迎会でテーブルの食べ物をとっていると、クルムアイヒ先生がやって来て、教えてくれたのだ。

谷川のオリエンテーションキャンプでは、四年生の先輩がドイツ語の歌の歌詞をすらすらと訳すのを目の当たりにして「私も頑張れば四年後(正確には三年後)にはあんな風になれるのか?」と衝撃を受けたことを覚えている。その歌は、実際は「私は外国人でドイツ語がよくできません。ゆっくり話してください」という内容で、大した事はなかったのだけど。

その年の秋には、「ドイツ事情」という授業のレポートでベルリンの壁について書き、「この先ベルリンの壁が再び開かれる時はくるのだろうか」という文で締め上げて提出した。その数日後に「ベルリンの壁崩壊!」のニュースをテレビで見ても然然としたりしていた。

二年生の夏からは、憧れの留学も経験できた。「環境を変えただけで、まったく新しい人生を始めることができるんだ」と感動したが、異文化の壁は厚かった。

ドイツ人の話すスピードやテーマについて行くことができず、結局他のアジアからの留学生と話すことが多かった。アジア人であるというだけでいやな顔をされたり、ドイツ語力が足りないことなどで、自信も失った。留学は貴重な経験だったし、とても楽しかったが、帰国してからはずっと「ドイツ語は好きだけど、ドイツへは当分行きたくない」と思っていた。

卒業後は、ドイツに行く勇氣もなかったが、社会に出て働く気もなかった。もう少しドイツ語を勉強しよう、教員になれたらおもしろいかな、とおぼろげにしか考えていなかったが、何を間違えたか大学院の入学試験に受かってしまい、苦労が始まった。というのも研究対象としてのドイツ語とコミュニケーションで使うドイツ語は全く別物だったからだ。それでも、のらりくらりしているうちに周りの助けもあって修士論文もクリアしてしまった。性格がのんびりしていることが欠点になることもある。このときもっと危機感を持って勉強していれば、今頃もっと偉くなっていたのと思う。よほどの強運の持ち主らしく、縁があつてま

た麗澤大学に戻ってくることができた。正直に白状すると、勤めはじめの頃は自信がなかった。大学院生時代からドイツ人とのコンタクトが薄れていたこともあって、自分のドイツ語に自信がなかったし、神経をぎりぎり削るほど勉強してきたわけでもないのに、周囲から「優秀な卒業生が戻ってきた」と期待されているのを感じて「化けの皮がはがれたらどうしよう」と思っていた。幸い、ここでも支えてくれる人が現れる。当時一緒に着任したコルネリア・マレット先生や、その二年後に彼女の後を継いだクラウディア・ラング先生は、二人とも同年代の女性だったので、親しくなり、いろいろな面で助けてもらった。二人ともあまり日本語がわからなかったもので、日常生活のこまごましたことから、ドイツ語の教授法、学生との接し方、学科での仕事分担、はては日本の名所案内、人生相談、恋愛相談、世界情勢などにいたるまで、互いにアドバースしたり議論したりした。二人がいてくれたおかげで、ドイツ語の勘を養うことができ、少しずつ自信を取り戻すこともできた。

自分のドイツ語に自信が持てるようになったのは、実はようやく最近になってのことである。私には長いこと、「言葉でうまく表現できない」というコンプレックスがあった。欧米では、小学校のときからあらゆることを言葉で表現する訓練が行われている。自分の意見を言ったり、議論をしたりなどは、子供でもしているのだ。一方日本では、そういう訓練は学校であまりなされない。あえて言葉にしなくても気がつくとか、相手の気持ちを察することが良いこととされているので、すべてを言葉にするのは、味気ないというか理屈っぽいと取られるように思う。

日本では、女性としても、口数を少なくして静かに微笑んでいればかわいがられる。なので、すべてを言葉にしなければならぬドイツでは困った。「どうしたい?」「どう思う?」「なぜ?」という問いに対して「なんとなく」や「別に」は許されない。苦勞して「: : :」だと思おう」という文を脳みそから絞り出しても、「それはどういう事?」と詳しく説明するように促され、言葉に詰まっているうちに相手はしびれをさらして会話

をあきらめてしまう、ということがよくあった。ただ、ある時気づいた。ドイツ人もそれほど大した答えを返しているわけではないのだ。いつも追いつめられるのに嫌気がさして、逆に相手に「それどういう事?なぜ?」と聞いてみると、「それは私にとって大事なことだから」とか「そういうの好きじゃないのよ」程度の返事だった。なんだ、それでいいのかと気が楽になった。

ドイツ語に限らず、どの言語でも簡単でいいので、自分の感情や疑問を表現できるのは大切だと思う。そのときに「正直に」というのも重要なキーワードだ。日本には、「本音と建て前」があるので、「正直に」というのは案外難しいかもしれない。私などは「本音を言ったら相手の機嫌を損ねるかもしれない、その場の雰囲気壊すかもしれない」と日本人的な発想からなかなか抜けられなかった。それはそれで、日本では大事な気遣いなのだが、ドイツ人と一緒にいるときは、たとえ正反対の意見でも、正直に言った方が誠実とされ、信頼される。

ドイツ語力やコミュニケーションのしかたで長い間苦勞したが、それでも少しづつ自信をつけてきた。そして昨夏、私にとってまた大きな自信につながる出来事があった。八月初めに一週間ベルリンで歴史セミナーに参加する機会に恵まれたのだ。主にヨーロッパ圏のドイツ語教員が集まってくる場で、どれだけ議論に加われるか、力試しのつもりで臨んだ。

セミナー三日目に、その年の五月に完成したばかりの「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑」を訪れた。ブランデンブルク門に近い約二万平方メートルの敷地に、それぞれ高さや傾きのすべて異なったコンクリートの長方形の柱が、二千七百本以上整然と並んでいるものである。地下には情報センターもあり、そこでスタッフの人に話を聞く機会があった。

この記念碑は、起案段階から、どのようなメッセージを込めるのか、デザインや資金はどうするのか、記念碑の時代は終わったのではないか、そもそもベルリンの一等地に建てる意味はあるのか、いつまで反省をすればすむのか、これで過去を清算しようとしている

のかなど、とにかくあらゆる方面から批判があったという。しかし、粘り強い議論と十八年近い時間を経て完成にこぎつけた。興味深かったのは、批判がすべての政党から、またユダヤやシンティ・ロマの側からも出たという話だった。それを、いったいどうやって乗り越えたのだろうか、反対勢力をどうやって説得することができたのだろうか、と思った。その場の真剣な雰囲気、気負われてかちかちに緊張したが、思いきって質問した。すると聞いていたスタッフが、姿勢を正してこちらへ身体を向け「犠牲者を追悼することは、正當なこと、という点で多くの意見が一致したからだ」と丁寧に説明してくれた。

その時間が終わった後、ドイツ人のセミナーリーダーが私のところへ来て「良い質問だった」と言ってくれた。このときの、私にとって何よりの成果は、ユダヤ人問題というドイツ人にとっては「やっかいなテーマ」で本質的な質問ができたこと、それに対して誠実な答えをもらえたこと、そしてその質問を通して彼らに認められたことだった。

このときほど、ドイツ語をやっていてよかったと思  
ったことはない。相手の言葉で、相手を傷つけたり怒  
らせたりのことなく、タブーに近いテーマについて  
中身のある話ができただ。自分のドイツ語力が誇らしか  
ったし、自分の考えが浅い、拙いと思われるのでは、  
と心配する必要もないことがわかった。

それ以来、もう一度ドイツへ行きたいと考えている。  
今度こそ、じっくり腰を据えて勉強したい。いままで  
のんびりしてきた分を取り戻したい。ここまでくるの  
に随分時間がかかってしまったが、これからまたがん  
ばればいい、と本気で勉強する覚悟ができた。

最近の学生は、明るくのびやかで、私がうじうじ悩  
んでいたことなど「なにそれ？」という感じで、ドイ  
ツ人とコミュニケーションが取れているように見える。  
それは、ドイツで親友ができたという留学報告書の記  
述でもわかるし、学内でドイツ人留学生と一緒にいろ  
いろな行事を楽しんでいる光景からもわかる。ドイツ  
留学を経験した学生が多いので、ドイツ人の友人がい  
るのは普通のこと、という雰囲気があるのも素晴らし

い。これは他の大学ではなかなか見られないと思う。  
学生には、やはりコミュニケーションのおもしろさを  
知ってほしい。相手の気持ちが理解できること、そし  
て自分の気持ちを理解してもらえることは、とにかく  
素晴らしいことだ。ドイツ語に限ったことではないが、  
新しい外国語を学ぶことで、まったく違う立場や考え  
方の人と理解しあえる道が開けるとするのは、考えた  
だけでわくわくする。

また、簡単にあきらめないでほしい。相手の懐へ入  
っていけるほどのドイツ語レベルに達するまでには、  
どうしても何年かはかかると思う。そこへ至るまでの  
小さなステップ、買い物ができるようになったとか、  
レストランで注文ができるようになったとか、電話で  
話ができるようになったとか、恋の悩みを相談できた  
とか、そういったことを自信にして、さらに上を目指  
してほしい。そして言葉を通じて世界中に友人をつく  
り、彼らの文化にも興味を持ってほしい。世界の平和  
も、実はそんな小さなつながりに支えられているのか  
もしれない、と思う。

## ドイツ語と私の Family tree

ドイツ語学科二〇〇三年三月卒業 児島 聡子



「なぜドイツ語？」と、聞かれることがよくある。それは、日本にいても、ドイツにいても。例えばゲーテの文学や、カントの哲学に感銘を受けてと、高尚な理由はいくらでも捻<sup>ひね</sup>り出せそうだが、このようなお堅い雰囲気がある国の言葉を学びたいと思ったきっかけは実に単純なものであった。

生まれて初めての海外、そして私の人生を大きく変えた出会いは、オーストリアの首都ウィーンにあった。当時高校一年生であった私は、幸運にも青年派遣団という名目で、東京都府中市の姉妹都市ヘルナレス区へ飛ぶ機会に恵まれた。夢が現実になかった瞬間、世界

が大きく広がった感覚を今でも鮮明に覚えている。そこで出会ったのが、私のホストファミリーだ。学ぶだけの英語が、この時、初めてコミュニケーションの英語になった。

しかし、オーストリアの公用語はドイツ語。雑踏の中、耳に入ってくるのは、まったく聞き取ることの出来ない言葉だった。お世話になったザビーネとチヨーの間には、当時五歳になるわんぱく盛りの男の子（エリアス）がいた。私が外国人との交流が初めてならば、このエリアスにとっても、異質なアジア人の登場は、驚きであったであろう。好奇心をあまり隠すことなく、



男の子は早速いろいろなことを話しかけてきた。およそ二週間の滞在はあつという間で、彼とは世界共通語（一）の「子ども語」を駆使して仲良しになった。

別れは、本来なら悲しいものであるはずが、すっかりウィーンが気に入ってしまった私は、「また来るさ！今度はドイツ語で話そう！」と明快な約束をして日本への帰路についた。

それが、高校に入学した夏の一大イベントであった。私の頭には、大学に入ったらドイツ語を勉強しようという決意が、確実に固められていった。だからこそ、進路を選択する際の迷いはなかった。

大学でのドイツ語の勉強は期待に満ちたものであったが、早速挫折した。ドイツ語がいかに厄介な言葉かを全く知らず、勉強を始めたのである。ABC…がア、ベー、ツェーと発音されることに当初、何故か納得できずにいた。文法も、聞きなれない単語も、なんとか覚えようとするだけのものは、結局、数学の方程式をむやみに頭に入れているようなものであった。しかしながら、ドイツ留学への野心は大きかった。たっ

た一年半のおぼつかないドイツ語力で、私はハレ大学に留学へと旅立った。

出合いに恵まれた一年だったと、あの頃を今でもよく思い出す。親切な人との出会いの分、感謝を述べたい人も多くいた。相手がいるからこそ成り立つコミュニケーション。基本的なことではあるが、それに気づかない人も多いのではないだろうかと思う。例えば、柏の街角で、外国の方がごちないながらも「ありがとう」と言ってくれた言葉で、嬉しい気持ちになる。現在、教鞭を取っている日本語コースの生徒や麗澤大学からやってくる学生に、常に語り聞かせるのが、この嬉しい気持ちだ。言葉を学ぶにも、そのモチベーションが必要不可欠なのであると、私は考える。

二年半、さらには在学中の留学期間を含めた計三年半のドイツ生活は、すっかり板につき、私もロスツックのベラン組の域に入ってきた。経験も、通訳という立場に回ることも増えてきた。いつしか、ドイツでの生活が、私にとっての日常として馴染んできた。しかしながら、おもしろいことにこの夏、言葉が通じな



デンマークのセミナー合宿で

いことによつて生じるストレスとカルチャー・ショックを改めて経験することになった。

ヨーロッパは、大陸で繋がっているものの、様々な言語が混在する。いずれも、似たようなものであれば良いのだが、ス

ラブ系、ゲルマン系、そしてラテン系では、言語史の視点から辿っても、その枝分かれは明解だ。  
友人を訪ねにハンガリー、ポーランドへ行った。駅

で切符の買い方が分からない。喫茶店で、コーヒーを注文できない。なんと不便なことだろう。英語は、中心地であれば多少は通じる。しかし、すっかりドイツ語文法構造になってしまった私の頭は、英語を発音させるだけでも一苦労なのだ。ドイツ語を外国語として学び、ようやくその不便さが軽減し始めた私にとって、この煩わしさがかえってショックでもあった。楽しい旅行に來た自分が、初日、どつとストレスを抱え床に就いたことに自分でも驚いた。

私を迎え入れてくれた友人とは、ドイツで知り合っていた。よって、お互いの共通言語はドイツ語であった。しかし、友人を通して、少しずつその国のことが見えてきた。「こんにちは」や「ありがとう」、お決まりの言葉なら言えるようになり、少しずつ簡単なことが聞き取れるようになってきた。外国にいるということとは、こういうことなのだと思う。新鮮な気持ちを改めて感じた瞬間であった。友人は、「ありがとう」と日本語で言った。私は「ジंकクワイエ（ポーランド語でありがとう）」と応える。異文化交流を重点に、大学の

セミナーで取り組んでいるが、様々なセオリーが実証として目の前に突き出された。

当たり前と思っていたことが難題として登場し、そこから得た驚きが、再発見となった旅は、改めて、私の経験から多くの人に語ってきたことは間違いではなかったと確信した。それは出会いの大切さと、その関係をいかに持続させるかである。例えるなら、植物を育てるような感じ。水を与えないバラは枯れて死んでしまう。そうなれば、バラも私も悲しい。気遣いの水は、言葉となつて相手に染み渡る力を持っていると思う。

不自由の少なくなってきたドイツ語で、出来ることも増えてきた。しかしながら、この不自由というのは決して消えることはない。それは、決してネイティブにはなれないという証でもあるが、常に学べる刺激はある。それこそが、語学習得の醍醐味なのではないだろうか。

ドイツ語に限らず外国語を学ぶのならば、臆病であつてはならない。なぜその言葉を学ぶのか、その国の

文化、歴史、人、何か好きなものが一つでもあれば、そこがスタート地点だ。

私は、ただ机に向かうだけの勉強は好きではない。今までも、「出会い」で好奇心のアンテナを常に張ってきた。「一期一会」の精神で、Family treeのうとく、その言葉と自分を幹に、ぐんぐん大きくなっていく人生。それを楽しめることが外国語と一生お付き合いしていく秘訣だ。外国語学習者にアドバイスするとしたら、ノートの書き方、単語帳の作り方より、私から言えるのは、そんな言葉と、言葉を通して見ることが出来るものへの姿勢だ。言葉が通じないなら、新しくその言葉を学べば良い。分からなかったら、聞いてみよう！そうやって、海外での不自由なことすら楽しんで欲しい。

ウィーンのホテルファミリーとの出会いから、およそ十年が経つ。当時五歳のエリアスは、十五歳になつて空手を始めた。そして今、少しずつ日本語の勉強を始めていると聞いて、嬉しく思った。

# 私の中国語遍歴と学習法

外国語学部講師 西田 文信



私は本学で中国語関係の授業を担当させていただいているものの、中国語プロパーの人間とは言えないので本稿執筆に適任であるかは定かではないが、ご依頼のあった私の中国語遍歴・私の考える中国語学習法等について書いてみたいと思う。

私の中国語との関わりは実は小学生時代に遡る。何気なく見ていたNHKテレビの中国語講座の発音を訊くも分からず真似していたのが始まりである。この時点では物真似の程度であるが、後に大学に入り中国語を本格的に学んだ際の基礎になっているのかもしれない。また、高校時代には漢文が得意科目の一つであった。

私の大学は入学時には専攻は無く、一般教養科目と外国語のみで勝手気ままに学ぶことができた。二年次になる前に専攻を決めなければならなくなったが、殆ど迷わず中国文学科に進むことを決めた。そのころからマイナーなものに惹かれる性質であったのだが（現在は中国の少数民族言語を調べている）、教員スタッフ六名のところ同期が六名という、この上なく贅沢な環境で中国語・中国文学について学ぶことができたのは幸いだった。その頃からどちらかというと語学の方に関心があった。中国語学科は無かったのであるが、おかげで古今を問わず中国文学の珠玉の作品をかなり集

中的に読むことができた。語学の方は、幸い言語学関係の授業がかなり多く開講されていたのでそちらを取ることで渴きを癒すことができた。正直言うと、その頃はたいして中国語会話能力は高くなかった。二年次の夏休みに、友人と一緒に北京師範大学と上海の復旦大学に短期留学で中国語を習いに行きはしたが、今教えている学生よりも口頭表現能力は劣っていたといえる。

大学三年次にちょっとした偶然から香港中文大学に交換留学することになったが、香港で話されている「広東語」と中国語の共通語たる「普通話」の二足の草鞋は無理と判断し、広東語を集中的に学ぶことにした（おかげで私の中国語は南方訛りがこびりついてしまっている）。日本でも週一回勉強していた広東語ではあったが香港では殆ど通じず、また文法を知っているだけでは話ができないという、外国語学習の困難さを痛感した。大学院に進学する際に、思うところがあった米国はハワイ大学に行くことに決めた。「中国語をやっているのに何故ハワイ？」としばしば訊かれたものである。結局、ハワイには二年ほど滞在したが、ハワイで

中国語を口にしない日は一日たりとも無かった。英語がある程度上達したのは言うまでも無く、中国語能力もかなり伸びたことが実感できた。それが先の質問に対する一つの答えである。ハワイでは、中国大陸・台湾そして華僑・華人の友人たちと本当によく語り合った。私の中国語の会話能力はハワイで伸びたと言える。

その後、紆余曲折があって二度目の香港滞在が三年数ヶ月続き、その後本学に中国語教員として赴任した。

以下は、私が中国語を教えてみて感じていること、教室で学生に話していることを書いてみたい。

中国語に限らず外国語学習において最も重要なのは、目的（何のために）及び目標（何をどこまでやるか）を明確にすることである。それは、とりもなおさず、この言語を何故自分は今勉強せねばならないかを、自分自身に対して明確にしていることが先ず何より大切なのである。また、通常は自分の水準を一応の目標にすることになるのであろうが、何のために外国語の学習をするのかが定まったら、その目的にあった学習をすればよい。本居宣長曰く、「かならずその奥をきはめ

つくさんと、はじめより志を高く大にたて、つとめ学ぶべき也」。後々のためにも、語学学習の水準は少し高めに設定しておいたほうが良い。これと関連して大事なのは動機付け。外国語の学習には強い動機が成功要因となる。シュリーマンが「外国語の習得にはそれを続けざるを得ない環境に自分を追い込むことが必要不可欠だ」と心得ていたのは蓋し卓見である。

以下は各技能についてのお話。中国語は発音が命である。発音の正確さは文法の正確さよりも重要であると言っても過言ではない。くどいようだが、発音が中国語の学習にとって大切である事、発音に関しては始めが肝心であることだけは肝に銘じておいていただきたい。日本人にとって難しい音は中国語のごく一部であるから、注意すべきは日本語にない音のみである。

学習の目的・目標を明確にし、発音をマスターすれば、自ずと学習の重点は語彙と文法に絞られる。語彙は三千語程マスターすれば良い。しかしこの三千語はいい加減ではなく、徹底的に内容を調べ抜き、覚え込むこと。勿論頻度の高い単語、三千語を選び出さねば

ならない。注意すべきは、日本語との同音（同形）異義語である。意味の差異を明確にせねばならない。単語を覚える際は丸暗記は避け、なるべく例文とともに文脈の中で覚えるようにしたい。自分に必要な語彙に興味のある分野から増やすのも良い方法である。

文法（中国語では「語法」とは、語をより上の単位へと組み上げていくルールの集合という意味であるが、外国語学習は新しい思考回路を提供するものである。早めに基本文法を鳥瞰ちようかんしておき、その後の学習で詳細を覚えていけば良い。

聴き取りに関しては、聴いて書き取る練習（中国語で言う「听写」）が中国語力を上達させる。考えてみれば当たり前のことであるが、相応の語彙力・文章解析能力があったうえでリスニングの練習をするのでなければ本末転倒であるから、それらの力も伸ばした上で話である。

中国語学習者の多くが目指しているのは会話能力を高めることであろう。会話ができるためには、文字・発音・文法・単語の総合的な知識は勿論であるが、瞬

発的に言葉が出てこなければならぬ。意図的でない数秒の沈黙は会話の断絶を意味する。運動能力と同じで瞬発力を身につけるように心掛けたい。繊細さも大事だが、恥ずかしがらず間違えを恐れず大胆になるのもまた大事である。会話はコミュニケーションのためであるから、中身のある話ができなければならない。現在教えている学生をみても中国語の能力自体は高いのだが、コミュニケーションが上手くない者も多い。言語は一義的にはコミュニケーションの手段、それを使って何を語るのか、問われるのはその中身なのだ。母語でさえ、中身のある話ができない人間、ましてコミュニケーションが苦手な人間にどうして外国語でそれが可能だろう。私の中国語コミュニケーションの授業でも「先ずは母語たる日本語でのコミュニケーションの能力の涵養を」と口を酸っぱくして言っている。

私の経験からすると、どんなに複雑そうに見える講演やニュースにしても、または専門的な原書にしても本当に難解なのは極々一部分で、大部分は容易な、極めてありふれた単語から成立している。会話の時のみ

でなく一人で読書する場合でも、易しい言葉や表現の所でつかえていては非能率的。難解な表現を覚える前に、基礎的な、自明な事を確実に徹底的にものにするよう心掛ける事が肝要である。

「目標に近づくほど、困難は増大する」(ゲーテ)。中国語を勉強するということは、ノンバーバル(表情・身振り等)なものから、歴史・民俗・故事来歴、はたまた方言差等の文化全般まで学ばねば完璧とは言いがたい。現代古典を問わず文学作品を正確に理解し訳すことが、至難の業であるのもむべなるかなである。中国語は、やればやるほど、わかればわかるほど深遠な言葉になり、これで終わりということがない。絶えず学び続けるのは自分自身との戦いであるが、寸暇を惜しんで学習すれば必ず中国語をモノにできる。中国語を理解すれば日本語の理解力も向上すること請け合ひである。

是非中国語を原文で朗読し、そのリズムの良さ、韻の響きを味わっていたきたい。それこそ中国の「心」に触れる第一歩であるから。同時に中国語に対する「勘」を養うことにもなるから。

## 挑戦する事の大切さ

中国語学科四年 飯田 規子



中国語の音が好き。ただそれだけの理由で漢字嫌いだったにも関わらず、私は麗澤の中国語学科に入りました。入学後は、ゼロから学び始める言語なだけに、幾多の障害が待ち受けており、それに日々大量の予習・復習・小テストなどが加わって、受験生の時より机に向かっている時間が長かったかもしれません。しかし、勉強は勉強でも、今思い起こしてみると、不思議と辛く苦しいものではなかった様な気がします。入学後約一ヶ月間必死にした発音練習、単語や文法のテスト、ビジネス中国語の授業など、どれもとても楽しく大切な思い出です。

その中でも特に印象深いのは、今年七月中旬に北京で開催された「第四回『漢語橋』世界大学生中国語コンテスト」への参加です。このコンテストは、中国語と中華文化を世界に広めることを主目的としたもので、今回はアジア、北・南アメリカ、オセアニア、ヨーロッパ、アフリカの四十五ヶ国で予選が行われ、それを通過した九十五名の大学・大学院生が参加し、「三分間程度のスピーチ」「中国技芸（中国歌曲・中国舞踊・中国絵画・書道など）」「中国に関する知識問題または即興スピーチ」の合計三つの項目を得点化し、競うものでした。





世界大会での飯田さん（左から5人目）

今年五月に孫玄齡先生より幸運にも「参加してみないか」とお声を掛けて頂いたのがきっかけでしたが、当時は就職活動もまだ終わっておらず、また世界大会などという大きなイベントに出る勇氣もなかったので、正直お断りしようと思っていました。しかし、先生

も熱心に付き合って頂いた事を今でもよく覚えています。そのお陰で、六月に中国大使館教育処で行われた予選を通過し、七月に北京での本選に参加し、結果として二等賞を頂くことが出来ました。

参加して思ったことは「どんな事でも挑戦してみろべき」という事。自分には無理だろうから、勇氣がないからといって、自分の可能性に線を引き、何もしていないでいるのは本当にもったいないと実感しました。たとえ挑戦した結果、何か目に見える形で成果が残らなくても、必ずや大切な物を学んだり、感じたりしているはず。現に私は、この大会に参加することによって、先生から最高のご指導を受けられ、先生・友達や家族の有難さを再度感じ、また多くの国に友達が出来ました。

私自身まだまだ勉強中の身である今日、日々思うように話したり、読んだり出来ないもどかしさと闘っています。しかし、ここでめげることなく、このもどかしさを力に変えて、これからも挑戦し続けて行けたらと思います。

## 私と韓国語

外国語学部助教授 中山めぐみ



私が韓国語を始めようと決意したのは今から約十五年前のことでした。それから三年間はすっかり韓国語に熱を上げてしまい、暇さえあればNHKラジオ講座のテープを聞いたり、韓国の流行歌を覚えたり、文学作品をかじったり、また通勤の帰りに上智大学のコミユニティカレッジに通って韓国語講座を取ったりしていました。その後韓国語熟は落ち着きましたが、ハングル検定試験だけは受験し続け、二級まではどうにか合格できたものの、一級は何度挑戦しても歯が立ちません。やっぱり留学が必要かな？私はそのようになって一九九六年夏、三週間でしたがソウルの高麗大学にある語

学堂に短期留学しました。そして帰国すると今度は大学院で韓国語が勉強したくなり、麗澤大学大学院言語教育研究科を受験して合格すると、梅田博之先生のゼミに入って、以来九年間、先生のご指導を受けながら十七世紀の朝鮮資料『捷解新語』のハングルに取り組んでいます。韓国語は私を未知の世界へと引っぱって行ってくれました。そんな韓国語と私との係わりを今の機会に少しだけ振り返ってみたいと思います。

"I am a Korean. I can't speak CHINESE!"

イーさんは憤然とした口調で言いました。十五年前の

別科生と教員の懇親会の席でした。教員になって日の浅かった私は大学で中国文学を専攻したこともあり、中国語を話の種にして中国人別科生とあれこれ会話をしていました。だんだん話が盛り上がるとそのうちの一人が相手かまわず隣にいた男子別科生に中国語で何か話しかけました。ところが、話しかけられた相手は韓国人のイーさんだったので。私はあわてて「韓国語で焼肉は何と言ったっけ？」という覚えの記憶を辿りながら話しかけました。

「ブルコギ」は何ですか？」

彼はちよつと考えてから言いました。

「それは「魚」です」

「……え？魚を入れるんですか？牛肉は？」

当惑している私に彼は丁寧の説明してくれました。

「ムル」は水です。「コギ」は（と言って自分の腕の肉をつまむと）肉です。水の肉、だから魚です」

私が「ブルコギ」（불고기）を「ブルコギ」と言ってしまうために、「ムルコギ」（물고기）のことだと思っただけです。その日の帰り道、私は突然「明日から韓

国語を始めよう」と決意しました。そしてそれから三年間というものの、韓国語学習は私の生活の中心でした。

ところで、それより十二年前の一九七八年夏、私は財団法人ラポ国際交流センターの韓国交流プログラムに参加して一ヶ月間ソウルのイーさんというお宅にホームステイしました。当時私は大学三年生で、ホストのジースクは大学四年生、私達はお互い英語でコミュニケーションを取りました。彼女には弟のテギユとミンギユ、そして妹のスンシンがいましたが、このスンシン（승신）の「ン」の発音ができなくて泣きたい思いをさせられたことがあります。スンシンは私に自分の名前を何回もリピートさせました。私は一生懸命真似しましたが、何回繰り返しても 아니（ノー）です。ジースクも、テギユ、ミンギユも面白そうにこちらを見物しています。そのうちにスンシンが「ン」と言いながら舌先を前歯で噛んでみせたので、私も「スンシン」と言いながら舌先を前歯から出して見ました。すると四人が一斉に笑い始め、床を駆け回って涙までこぼしています。私はすっかりいじけてしまい、こんな

に発音の厄介な言葉は一生勉強するまいと思いました。将来、寝ても覚めても韓国語という日が来ようとはその時には想像もできないことでした。

そして十二年後、韓国語を始めたばかりの私はNHKテレビ講座の応用編のスキットを熱心に見ていました。「図書館で」というスキットを覚えた時、別科生のキムさんに発音を直してもらいました。すると彼女は私の「閲覧室」(열람실)の発音がよくないと行って何度もしピートさせました。「先生の発音は重いです。もっと軽く、軽く」いくらしピートしてもちつともOKが出ません。何十回しピートしたでしょうか、キムさんは急に口をつぐむと何か考え込むような顔で宙を見つめていました。がやがて私の顔を見て言いました。「先生の韓国語をずっと聞いていたら、頭が痛くなりました」

二年後、久しぶりにキャンパスでキムさんに会いました。彼女は学部の二年生になっていました。私がふと「韓国語の会話練習の相手になってくれないかな」と頼むと、彼女は気持ちよくOKしてくれました。会

話は全て韓国語ですることにしました。

“대단하시네요, 선생님” (先生、すごいです)

“대단하기는요, 발음이 정말 어려워요.” 열람실.

지금도 아직 이상하죠? ” (すごくなんかいいです。発音が本当に難しいです。「閲覧室」、今でも変でしょう?)

“괜찮으신데요” (大丈夫ですよ)

二年前の厳しさがウソのようです。発音練習はスパルタに限るのかもしれませんが。

さて、ソウル留学中に一度会話の授業で五分間スピーチをさせられました。スピーチのテーマは「思い出」で、私は十歳の時に病気で亡くなった父の思い出について話そうと考えました。スピーチの前日、話す内容をノートにあれこれ書いてみましたが、なかなか文章がまとまりません。しばらく悩んでいましたがどうもダメで、これは出たとこ勝負でいくしかないかな、と観念しました。ところが翌日、私の番になって口を開き始めると、どういいうわけか韓国語がスラスラと出て来ます。父がよく台所で料理をしていたこと、アイス

クリームを作ってくれたこと、胃癌が脊髄に転移してとても苦しんだこと、亡くなる数日前枕もとの私に向かって「メグミの目は青いね」と笑った目の温かさ、思い出は次々とよみがえり、やがて私のスピーチは、

“ 아버지의 추억들을 저는 언제까지나 소중히

간직하고 싶습니다 ” (父のこの思い出を私はいつまでも大切にしたいと思います) という言葉で締めくくられました。スピーチが終わると、それまでじっと聞いていらした会話のクオン先生が何かおっしゃいましたが、聞き取れません。キョトンとしていると先生はもう一度おっしゃいました。

「チョン.ファツケヨ (정확해요)」 (正確ですよ)

私はン (응) の直後のゴがなかなか聞き取れません。クオン先生の “정확해요” は私の耳にはほとんど「チョウツケヨ」のようでした。スピーチで気をよくしたのも束の間、「正確ですよ」も聞き取れない現実に直面してしまいました。「私の韓国語力を測る物差しはやっぱり聴解力なんだろうなあ」とその時考えました。

十五年たった今も私の韓国語はまだまだですが、「韓

国語を始めよう」と決意した時は、この言葉を使って韓国の人と交流したいという気持ちでいっぱいでした。もう一度初心に返ろうとあらためて思うこの頃です。



1978年夏、関釜フェリーにて(向こうに見えるのが釜山)

## タイ語でサバイバル

外国語学部教授  
坂本 比奈子



### 一、はじめに

旅行ばかりでなく、国外へ出るチャンスが広がり、国内でも外国人と接触する機会が増えました。外国人とコミュニケーションしたいという希望を持つ人が増えていますが、なかなか上達しない人が多いようです。私も決して外国語が上手とはいえませんが、タイ語でならサバイバルできるつもりでいます。私の専門はタイ語ですから、できて当たり前と思われるでしょうが、それなりに努力してここまでまいりました。

### 二、私の現地体験

初めてタイに行ったのは、一九七〇年の三月でした。家族四人でバンコク空港に着いたとき、私は一言もタイ語を知らず、夫の後からついていくだけでした。その日、大使館の方が迎えに来る約束でしたが、空港には誰も来ていませんでした。いくら待っても誰も現れず、空港には私たちだけが取り残されました。夫は案内所に行つて、ホテルの予約を取り、市内のホテルに向かいました。空港から市内への道路は簡易舗装で、ほこりが舞い上がり、道の両側の水路にハスの花が咲いていました。三十五度から四十度の猛暑の中を、これから二年間住むための部屋を探して歩き、せっかち

な夫は三軒目できめてしまいました。門にはブーゲン  
ビリアの花がからみ、小さいプールがあつて、二階建  
でのこじんまりしたアパートでした。お手伝いさんは、

大学の前任者の方が連れてきて下さり、ようやくパン  
コクでの生活がはじまりました。夫が大学へ行き始め  
ると、私は一人では何もできず、どこへも行けない自  
分に苛立ち始めました。文字は独学で覚えましたが、  
基礎は手ほどきを受けたほうが速そうだと思います、タイ  
語学校へ行きました。少人数のクラスの先生は五十歳  
くらいの男性で、小さいころ、現在の空港周辺は象が  
いる森だった、というような話をしてくださったので、  
ああ、やはり日本で学ぶのとはぜんぜん違うな、と感  
動しました。ことばができないと危険な目にあう可能  
性が高いことを思い知ったのは、子どもたちと海岸へ  
出かけたときのことです。路線バスで終点まで行って、  
三輪タクシーに乗って海岸に行こうとしました。車が  
反対方向に向かって走り出したので、大声を上げ続け  
て車を止め、子どもたちの手を引いてとびおりました。  
その後タイ語の勉強に力を入れるようになりましたが、

この時は家族同伴で、あまりタイに溶け込むこともで  
きず、三年間滞在しても日常会話の域を出ませんでした。  
た。

しかし、帰国後、語彙集『タイ語千五百語』を編纂  
するときに、現地体験を生かすことができました。千  
五百の見出し語を、私の知っているタイ語、つまり、  
日常語という基準で選んでみました。語彙には口語的  
なものと文語的なものがありますが、その区別が自  
然にできたのは現地で学んだからだと思います。タイ  
語は文語と口語の区別がかなり厳しく、話すにも書く  
にもその知識は必要です。

二回目のタイ滞在は一九八二年～一九八四年で、国  
際交流基金派遣の客員講師としてチュラロンコン大学  
文学部東洋語学科に派遣されました。今度は単身赴任  
でした。テレビを購入し、英字新聞とタイ字新聞にざ  
っと目を通してから出勤するようにしました。なにが  
話題になっているか、新聞で確認しておくのと、テレビ  
や、大学での会話に少しはついていけるからです。タ  
イ人の中で一人ぼつんとしているのは悲しい気持ちで

したが、話すのは下手でも、話題についていければ、話は弾みます。また、わからないところは必ず質問し、一日に一語でも覚えるように心がけました。

着任してしばらくすると、タイ人の先生方が質問にくるようになりました。言語学を基礎にした日本語分析というのが役に立つと思われたようです。日本語を教えながら、自分もタイ語を調査するという楽しい二年間はあっという間に過ぎました。しかし、このときも、私の周りのタイ人は日本語の上手な人、日本語を話したい人が多かったせいか、会話の方は大して上達してはいませんでしたし、タイ語の言語学的理解が進歩したという実感も持てませんでした。

### 三、文語学習の必要性

私のタイ語理解が前進したのは、帰国後、岩本一恵さんを通してトヨタ財団の「隣人をよく知ろうプログラム」の出版助成をうけ、チット・プミサックの『シヤム・ラオ・コームという語の変遷』を翻訳してからです。チットは「タイ最高の知識人」といわれる人で、

頭脳明晰な合理主義者であり、彼のタイ語はとても明瞭でした。一般に、話し言葉は省略が多いので、書き言葉の方が文法構造を学ぶのに役立ちます。文学作品より論文のほうがいいと思います。長い年月をかけて六百五十ページの大作を訳し終えてみると、タイ語というものがわかったような気になりました。そして、タイ語文法に関する論文を二編書き上げました。作文に必要な知識は文法と語彙です。翻訳はこの面でも大きなプラスでした。

### 四、発音の習得について

タイ語の発音で、日本人にとって難しいのは声調です。また、リズムが日本語と違うため、タイ人らしく発音するのはちよつとたいへんです。私は、タイ語を教えるようになってから、発音が進歩したようです。おそらく、初級タイ語の授業で、ゆっくり、正確に、繰り返し発音していたからではないかと思えます。授業では、タイ人の留学生に協力して頂いていました。ネイティブの発音をよく聞いて、自分でも声に出して



練習することが発音習得には欠かせません。また外国語の音を正しく聞くのは困難なことです。が、理論的体系的に音の仕組みを知っていると、聞き取りも発音も最初から正確にできます。大人になってからの外国語学習では、理論的なアプローチが、最短にして最善の方法だと思います。

## 五、ネイティブのようでも

現在、私はタイの少数民族、ムラブリ族（黄色い葉の精霊族）の言語を調査研究しております。タイの山中で現地調査をするときの媒介言語はタイ語ですが、困ることはほとんどありません。少数民族は、たいてい、母語と共通語のバイリンガルです。私の調査対象の人たちは実にタイ語が上手です。語彙の豊富さに驚かされます。彼らの言語には文字が無く、彼らはすべて耳から言語を学びます。狩猟採集民であった彼らは、物音一般にとっても敏感です。彼らの言語能力は環境に応じて発達したもののなのです。ところがタイ語の文字を習う場合には、とても苦労します。基礎的な文字言

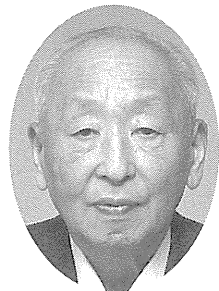
語能力と音声言語能力は別のものであり、どちらも小児期から訓練する必要があります。

最近、日本では0歳からの英語教育が盛んになってきているそうです。バイリンガル教育は悪いことではありませんが、明確な動機づけがなければ学習効果はあまり期待できません。宇宙飛行士の野口さんは、宇宙飛行士になりたいという明確な目標があったからこそ英語が上達したのであって、その逆ではありません。大人になってから始めても、留学しなくても、動機があつて、理論的にきちんと学べば、通じる外国語が話せるし、適切な文が書けるようになります。私の場合、仕事を通じてタイ語力をアップしてきました。発音は日本式でも、話の内容があれば感心されることはあつてもばかにされることはないはずだとか、少し訛っているほうが、外国人なのにタイのことをタイ人よりよく知っているといつて尊敬されるかもしれないなどと聞き直つてみてください。会話が楽になること請け合いです。

## 「異文化研究」について

# — 日本文化とベンガル文化との比較 —

外国語学部教授 我妻 和男



ベンガル文化は、アジアで初めて一九一三年にノーベル文学賞を受賞した詩人であり、現代のルネッサンス人であり、一流の画家としても、音楽家としても多彩な活動をしたロビンドロナト・タゴールを生み出した文化である。彼の天稟の才は、無と有、無限と有限、生と死の相交わるときと閃く才である。彼の祖先は、現在のバングラデシュ、インド、パキスタン分離独立前の東ベンガルの出身であり、タゴール自身はインドの西ベンガル州のコルカタ出身である。従ってタゴールの作詞作曲の歌謡が西ベンガルの村々で愛唱されている。タゴール作詞作曲のベンガル語の歌の

一つはバングラデシュの国歌となり、もう一つの歌がインドの国歌となっている。

ベンガル文化とは、ベンガル語を母国語とするベンガル人の文化である。インドの西ベンガル州では六千万人の人々がベンガル語を喋り、バングラデシュの一億一千万人の人々がベンガル語を母国語としている。更に海外在住のベンガル人を併せると二億二千万人の人々がベンガル語を使っている。これは世界で五番目の使用人口である。フランス語やドイツ語を母国語として使用する人口より遥かに多い人口である。

ベンガル語は、英語、ドイツ語、フランス語、ロシ

ア語、スペイン語と同じ印欧語族の中のインド・イラン語派のインド・アーリヤ・グループに属する。古代インド・アーリヤ・グループはサンスクリット語（日本では梵語と呼ばれる）、中世インド・アーリヤ語はプラークリット語と言われ、近代インド・アーリヤ語は十世紀ごろから始まり、総称してバーシャーと呼ばれるが、その中にヒンディー語、ベンガル語など多数の言語があり、ベンガル語もその十世紀より現代まで変化し、現代ベンガル語となっている。フランス語がヨーロッパのアーリヤ諸語の中で美しい言葉であるように、ベンガル語も近代インド・アーリヤ諸語の中で美しい言葉といわれる。

日本語も美しい言葉といわれる。両者の第一の共通点は、心情、感情を表すのにふさわしいことである。論理を表すより、詩心、歌心を表す。タゴールが一九一六年訪日した折、『日本への旅人』という紀行文の中で、芭蕉の「古池や 蛙飛び込む 水の音」や「枯枝に 鳥とまりけり 秋の暮」をベンガル語に的確な韻律をつけて訳している。韻律に関して言えば、日本語

では音節の数に依っているが、ベンガル語では音節の数と音量、頭韻、脚韻、欄外余剰律韻など多彩であり、本当に詩の好きな国民で、バンングラデシユのベンガル人もインド西ベンガルのベンガル人も、年一回の国を挙げての詩人大会では数千人の詩人たちが自作の詩を朗読する。正に詩人の民族である。日本語には多様な方言がある。各方言の差異はかなり大きく、沖縄の人の言葉と青森の人の言葉とは相互にほとんど分からないほどである。ベンガル語も方言の差が甚だ著しく、相互に全く理解できず日本語以上である。日本語もベンガル語も民謡が発達していて、ベンガル語では民謡が全くの方言で歌われる。ベンガルでは村芝居が盛んで、それは各方言で行われる。すなわち方言文化が大変優れている。

日本とベンガルの根本的に異なるところは、宗教のことである。日本は、全体として東日本も西日本も宗教状況が大体同じであるのに対して、ベンガルでは、東ベンガルのバンングラデシユではイスラム教徒が七十パーセントで、いわばイスラムの文化を主としていて、

インドの西ベンガルではヒンドゥー教徒が六五パーセントであり、ヒンドゥー文化が主となっている。従ってその点で文化の際立った対照が見られるが、両地域共通の文化、あるいは両文化の相互尊重が見られる。それはやはりベンガル語という共通語のお陰である。タゴールの詩と歌、戯曲などは、両ベンガルで宗教には関係なく愛好されている。インドで英植民地から急進独立運動のため逮捕、死刑判決を受けた人が、死刑の断頭台上がり、タゴールの民族主義歌を歌いながら露と消えていった。それと全く同じく、パキスタンから東ベンガル即ち東パキスタンが独立して、バン格拉デシュをつくる時、殉教者たちはタゴールの民族歌を歌いながら殉じていった。ドイツのゲーテ、イギリスのシェークスピアが世界詩人であるように、インドとバン格拉デシュのタゴールは世界詩人である。一方、イスラム教徒のカジ・ノズルル・イスラムは、イギリスのインド支配の枷からの解放に人生を捧げた民族詩人であり、インド、バン格拉デシュ両国から今なお尊敬されている。彼もベンガル人である。彼も作曲をし、

彼の歌はノズルル歌として、今もベンガル人の間で愛唱されている。

インドの西ベンガルではヒンドゥー教徒が大部分、次にイスラム教徒、バン格拉デシュのベンガルではイスラム教徒が大部分で次にヒンドゥー教徒というだけではすべてを語っていることにはならない。それ以外の少数派のことも認め尊重している。バン格拉デシュではチョットグラム近辺の百万近くの仏教徒、非アリア人のカーシー族、サンタル族、吟遊詩人のパウリなど、独自の文化、独自の民俗芸能を持っている。インドの西ベンガルでも同様である。

日本でも、日本人の間の地域別多様性があるのに対して、ベンガルでは、地域別は勿論宗教的多様性、異人種多様性がある。

日本人は自然を愛し、風光明媚な四季を楽しむ民族である。ベンガル人もベンガルの風、ベンガルの川、ベンガルの土地を愛し、いわば大地の思想に生き、ベンガルの六季節を体験する。特にバン格拉デシュでは毎年雨季に網の目のような川が溢れ、大海原のような

大洪水となる。即ち毎年のように繰り返す洪水は人々を限りなく苦しめる。多い時は二十万人、三十万人の人命を失う。日本をはじめとした国際協力によって少しずつ対策がなされつつある。いずれにしろ、このような厳しい哀歓の中、共同体や家族間の愛情が深いことが窺える。ベンガルの大平原を村々を外国人として歩いても、どこでも楽しく迎えてくれるであろう。

次に日本の生活文化とベンガルの生活文化を比べてみると、食生活では、ベンガルでは昔の日本と同じく米と魚が主食である。原則として三食とも米食で、昔の日本と同じである。暑いので水を入れておいて、夕ご飯を朝に、朝ごはんを夜食べる。これも、日本で夏行われていた。ベンガルは暑いので、一切生の物を食べない。昔はサラダも食べなかった。すべて火を通す。魚には日本人と同じく目がない。生は食べないが、特にチョットグラム地方では、くさやの干物まで食べる。海の魚より川と池の魚を好むのである。日本人の中には川魚の匂いは合わないという人がいるが、ベンガル人は海の魚の匂いと味が苦手である。それよりもパン

グラデシユのガンジス河の本流である大河ポッド河のイリシユという魚の美味は、ベンガル人の魚の味の理想と言われ、インドのベンガル人も手に入れるのに夢中になる。日本に比べて暑いベンガルでは、果物と野菜の種類は驚くほど多様である。日本ではお目に掛からないものが多くある。西ベンガルのマルダ地方での真夏のマンゴーは世界一と言われる程美味である。野菜、魚、果物に関しては、両ベンガル共通である。しかしイスラム教徒は、豚、亀など食物禁忌の動物が多くあり、ヒンドゥー教徒は牛を食べない。少数民族サントル族は、ネズミ、リス、ヘビなどを食べ、食物禁忌は全くない。また西ベンガルのベンガル人の中には、西インド、南インドのインドに倣って菜食主義者も多く見かける。従って、ベンガルにおける食習慣は、共通の面と多様な面とがある。調味料、隠し味、香料、味文化、匂い文化など、深く、広い問題がある。このような日常生活文化は、食文化のみでなく、衣服文化、住文化など多くの比較すべき文化がある。それらベンガル生活文化をきめ細かく考察することによって、日

本の生活文化をより本質的に理解することができる。多くの点で、ベンガル生活文化が日本生活文化と類似するところがあるため、なおのこと異文化を考察することが必要である。同じように、ベンガルの芸術文化、思维方法、情緒、心情などと日本のそれと比較することによって、両者の類似を見出すことによって、日本とは何か、日本文化とは何かが分かってくるものと思われる。

そのためには、ベンガル文化を担うベンガル語の基本的音声、アルファベット文字、基本的文法、基本的日常会話、初歩の読物の学習にあたる必要がある。ベンガル語を学習すれば、インドの国語であり、母語人口が約三億人であり、世界で第四番目の使用人口であるヒンディー語を習得するのが容易である。

また、文化についても、ベンガル文化を知ることとは、インド、スリランカ、ネパール、パキスタン、ブータン、モルジブ各国の文化、即ち南アジア文化を知ることによってベンガル文化の特色を更に明確にすることがで

きる。

比較文化研究のもう一つの重要な面は、文化交流である。この百二十年の間、南アジアの中でベンガル地方が日本との文化交流が最も深い。インドの Kolkata に印日文化センターが、Bangladesh に Bangladesh Cultural Centre が設立されつつあり、あと一年後には文化交流が始まるであろう。将来の進め方は、三分の一は講義で、あとは発表と討議とそれにレポートにする。

最後にベンガルと日本の映像文化の比較を行う。インドのベンガルのシヨトジット・ライ (Satabdjit Roy) 監督の映画は、日本の黒澤明監督の映画と同じく、多くの国際映画祭で数々の賞を受賞している。インドの映画は、ややもすると勧善懲悪の歌と踊りのヒーローものが多いが、シヨトジット・ライの映画は類まれな芸術性を持っている。黒澤明とシヨトジット・ライはお互いに尊敬し合っていた。シヨトジット・ライのベンガル映画「大地の歌」は特に傑作である。それを教室で鑑賞してもらいたい。



ベンガル語で講演する我妻教授



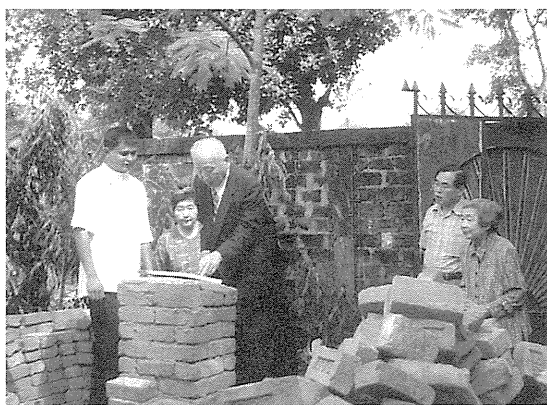
インド・コルカタの印日文化センター祝賀式



ベンガル語、ベンガル文化の授業



バングラデシュの野生の象



バングラデシュ・日本文化センターの定礎式

## 挨拶と感謝のことば

大学院非常勤講師 田中敏雄



ずいぶん前に、ある女子学生から聞いた話です。

運転免許を取るため教習所に通っていたときのことです。仮免の時、教官が尋ねました。「お前、ヒンディ語を習っているんだってな。「おはよう」をなんていうんだ?」「ナマステー (namaste)」「こんにちはは?」「ナマステー」「こんばんはは?」「ナマステー」「さよならは?」「ナマステー」「おれを高卒だと思っただかになすんなよ」と教官は女子学生の頭を殴り、「本当なんだから」と女子学生は相手の胸に強打を返した、このことです。このときハンドルはどうなっていたでしょ

うかね。

当時、英語や日本語で出版されていた入門書や会話入門書では、女子学生の言うとおりでした。感謝のことば「ありがとう、ダンニャワード (dhanyavadi)」と共に冒頭にあげられていました。

今から四十年前の私の経験をお伝えします。一九六五年八月、デリー大学の学生寮ジュビリー・ホールに到着した時、夕食を終えた寮生たちが散歩に出るところでした。数人の寮生が、すばやく気持ちよく荷物を私の部屋まで運んでくれました。私は「ダンニャワード」を連発しました。翌朝、朝刊を片手に食堂に向か



う私は、出会う寮生に「ナマステー」を繰り返しました。子供のときから、朝は「おはよう」と言うようにしつけられていたからです。生活に必要な品物―バケツ、洗剤、インドの衣服などの購入に、寮生たちは案内してくれました。ヘバーザール（商店街）です。ここでも「ダンニャワード」の連発。しばらくすると、私は「ヘミスター・ナマステー」へミスター・ダンニャワードと呼ばれていると知りました。

それからです。観察を始めたのは。朝、寮生たちは「ハイイ、どう調子は (Kya hai hai)」と交し合っています。感謝すべき場面に「ダンニャワード」はいいません。

十一月、長老のヒンディー語作家が私をラクナウーに招き、書齋を私に明け渡し、一週間、滞在させてくださいました。朝、主婦は「どう、としお、よく眠れた？早く来なさい。お茶が冷めてしまうわよ」「ナマステー」をいう間もなく、幸せな気持ちになっっていました。

こうして、家庭内、家族的関係の寮生活では、相手

の健康、気分を気遣うことばが交わされるものと学びました。紹介された時や初対面の時を除いて連発しないものです。

農村出身の寮生に招かれ、数週間滞在した時のことを思い出します。朝、出会った農民に「ナマステー」と挨拶したところ、きよとんとされてしまいました。それから、農民達がどのような挨拶を交わしているか、と観察すると、ヒンドゥー教の神々の名を唱え、「勝利あれ」「万才」を意味する「ジャエ (Jay)」が付けられると知りました。「ラーム、ラーム (Ram Ram)」「ジャエ・ラームジー・キ」「ジャエ・スイヤーラーム (スイヤーとは、ラーム／ラーマの配偶神スイーター)」と知り、相手の挨拶語をそのまま復唱することを覚ええました。すると朝の朝から、ラーマを讃美している気持ちになったものです。ある朝のことです。早朝、友人の父上にお伴して散歩していると、農民たちは、「パンディットジー・パーラーンゴウン (Panditji paragoun)」と挨拶するのではありませんか。父上はバラモン、ですからバラモンへの敬称とまでは理解できませんでした。尋

ねますと、〈御足に触れます〉、つまり、接足作礼のこ  
とと知りました。学ぶべきことはなんとあるのでしょ  
うか。

聖地、寺院、案内僧に引率され、神像の前で〈ジャ  
エ〉を唱える巡礼者たちを見ました。

前書きがすっかり長くなってしまいました。インド  
とかヒンディー語について語るといつもこうなってし  
まうのです。

「ナマステー」に戻ることになります。「ナマスカール  
(namaskar 恭しい挨拶)」が一般的です。<sup>1</sup> namah<sup>2</sup> は、  
私たちにとって親しい〈南無阿弥陀仏〉〈南無妙法蓮華  
経〉の〈南無〉です。〈南無〉を〈帰命、敬礼〉と理解  
するより、〈恭しく頭を下げる〉とした方がよいと思  
います。恭しく頭を下げる対象が阿弥陀であり、妙法蓮  
華経であるわけです。対象を二人称<sup>3</sup> に置き換え、  
「ナマステー」としたのは、スワミー・ダヤーナン  
ド・サラスワティーにより設立されたヒンドゥー教社  
会宗教改革団体アーリヤ・サマージでした。グジャラ  
ート出身のダヤーナンドさんは、北インド各地でサン

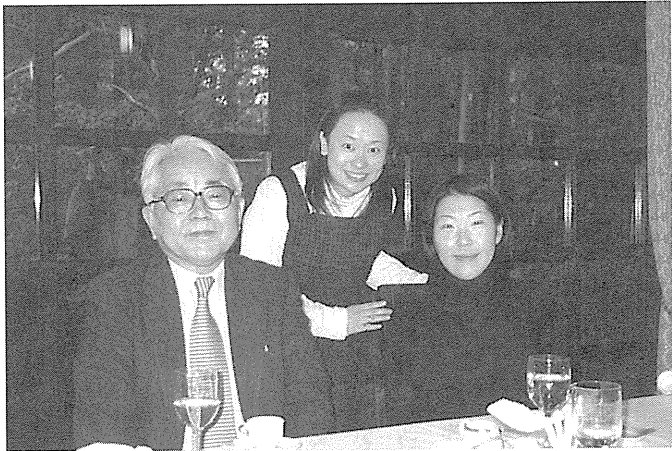
スクリット語による説法をしましたが、受け入れられ  
ないため、ヒンディー語に切り替えたとのこと。こ  
この団体の活動は、パンジャブ、北インドの都市部  
の人たちに大きな影響を及ぼしました。一九二〇年代  
の都市を描いた小説に、アーリヤ・サマージ系女子学  
校の女性教員が登場します。送って来た男性に「ナマ  
ステー」といつて別れます。「」を作者がわざわざ付  
けているのは興味深いことです。

一九五五年、インドを訪れたソヴィエトの指導者フ  
ルシチョフが合掌をし、大きな声で<sup>4</sup> namaste<sup>5</sup> と挨拶  
しました。インドの人たちはもうびつくり、やがて驚  
きはこの指導者への好感に変わった、と聞いています。  
六十年代の中頃、インドに滞在していた私は、ラジオ  
で外国の要人たちが、<sup>6</sup> namaste<sup>7</sup> と挨拶するのを耳に  
しています。会話入門書の冒頭に登場するようになり、  
九十年代、私たちの国で、〈ナマステー、インディア〉  
というイベントが開催されているのは、ご存知の通り  
です。

麗澤大学では、ヒンディー語の授業は週一回。つま

り、第三外国語です。どの程度伝えられるか、講師は毎年実験を繰り返しています。

一冊の本を紹介します。池田香代子再話 C・ダグラス・スミス対訳『世界がもし100人の村だったら』（マガジンハウス、二〇〇一年）。受講希望者は、ヒンディー語を何人が話しているか、当ててください。ただし、ヒンディー語とウルドゥー語を一緒に数えます。普通、ヒンディー語は、ブラーフミー文字の系譜にあるナーガリー文字で表記され、ウルドゥー語は、アラビア、ペルシャ文字に工夫を加えたウルドゥー文字で表記されていますが、文法体系は同一なのです。

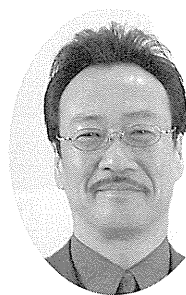


麗澤倶楽部で院生と共に

# スペイン語を学びませんか?!

Spanish gave all to me

外国語学部助教授 星井道雄



「スペイン語は、本国スペインの他、北はメキシコから南はアルゼンチンまでの中南米ほぼ全域（十八ヶ国）、アフリカの赤道ギニアなどで話され、その数は四億人に達する世界第四位の言語。ただし、母国語話者の数で見れば、中国語に次いで世界第二位」なんてことは、今ではすらすら出てくるが、三十年前この言語を学び始めた頃は、高校の世界史で学んだこと以外ほとんど何も知らない門外漢だった。もちろん、その頃のスペインが、一九三六年〜三九年の内戦に勝利したフランコ將軍率いる右翼の軍事政権下にあったこと、その内戦中フランコを支援するナチスドイツがバスク

地方の村に人類史上初の本格的爆撃を行ったこと、またそれに抗議してピカソが滞在中のパリでその村の名を冠した大作「ゲルニカ」を描いたことも。つまり、スペインやスペイン語には全く興味がなかったのだ。僕が大学に行った目的は英語の教職免許を取ることで、専門は英語。言い訳がましいが受験勉強をやり過ぎたせいかな、大学に入った頃は勉強意欲を失くしていた（今で言う五月病か。僕の場合は四月にもう始まってたけど）。よく友人と酒を飲み、「お前の生き様は何か？」などと今から考えると赤面したくなるような議論をやらかしては大人になったような気になっていた

(学生諸君、くれぐれも真似しないでね)。「これじゃマズい！」って立て直しを図った時は、もう年の暮れ。文法は一切教えず、モニターの絵を見ながらネイティブの発音を真似する、正に「音で覚える」式の教授法が学生間でとても評判が良かったフランス語を二年になったら第二外国語でやると決めていたので、まずはその予習をしようと文法書を一冊買って来て読み始めた。ところが二年になって新学期が始まり、貼り出されたカリキュラムを見て愕然。何とフランス語が教職科目とぶつかっていて取れなかったのだ。出鼻を挫かれたってやつでメゲかけたが、どうにか一学期中にその文法書を終え(結構これが後になって役に立った)、また発音に自信が持てなかったので、夏休みにアテネフランセに通ったりもした(そこも六十人の大クラスで発音の方はどうにもならなかったが。でも、ついでに取ったラテン語はその後に役立った)。そのうち二学期からスペイン語が開講されると知り、「将来の展望」なんて全くないまま、「ちよつとカジってみっか」程度のノリで始めたのが運の尽き、じゃなくてツキ。

発音は簡単(多分世界一)、文法はフランス語とほぼ同じ、その上、先生は品がよくて母親みたいに接してくれて……。まさに水を得た魚、すぐにスペイン語に嵌まった。ところが、好事魔多し。一ヶ月でその先生が病気で入院、僕もスキーのケガで一ヶ月半の入院。ここで役に立ったのが先のフランス語の独習。スペイン語の授業も文法の説明がほとんどなかったもので、これまで自分で買っておいた文法書を病院のベッドで広げ、今度は発音が簡単なので単語も全部覚えた。今言うマニアだった。でも、無理にはではなく、自然にどんどん覚えられる感じだった。

そんなこんなであつと言う間に一年が過ぎ、出席日数は足りなかったが先生の好意で試験を受けられ単位も取れたものだから、「じゃ、スペインに行っか！」ということになり、まずは一ヶ月バレンシアの語学学校とホームステイを日本で予約、後はどこかいい大学を現地に行つて探すことにし、一年の予定でスペインに出発した。着いて早々タクシの運ちゃんにボラれるやら、ホームステイと謳いながら、そこは未婚のおばさ

ん（ガチガチのカソリック信者で、非キリスト教徒の僕は目の敵にされた）が一人でやっている下宿屋だったりで、「エラいとこに来たな」と後悔することしばしば。特にヘコんだのは、町を歩いていてしょっちゅうすれ違いざまに侮蔑的な言葉を聞きとれる程度の小声で言われることで、外国で差別されることがどれ程キツいか身に染みた。しかし、ある時「僕が日本人（またはアジア人）であることは何も悪くない。悪いのは人種差別をする方だ」と気づき、できるだけ自分が「傷つかない」ように努めた。「慣れ」は「恐ろしい」だけでなく「いい」こともある。その内「傷つかない」どころか逆に彼らに同情するようにさえなった。

言葉の方は、いろいろ不思議な経験をした。最初、知ってる言葉がたとえ少しでも聞こえたらうれしくてしようがなかったが、一週間もしない内に聞き取れない方が気になり始め、最後に聞き取れるはずの言葉まで聞き取れなくなっていた。真剣に耳鼻科に行こうかと考えたが、ひよんなことで解決。映画館に籠ったのだ。スペインは映画が安い上、普通一度入場料を払え

ば一日何回でも見られる。音響は確かにナマの会話に比べ劣るが何回も同じ映画を見てると筋は分かるし、回を追う毎に聞き取れる言葉が増えて行く。それに、多分逆療法ってやつで、悪い音響状況に置かれる程我々の聴覚能力は逆に向上するのだろう。映画館を出て耳にした町の人達の交わす言葉がなんとクリアーに聞こえたことか！それ以来、僕は聞き取り能力が落ちたと感じる度に映画館に通った。

一ヶ月後、バレンシアを出ていくつかの町を回り、最後にサラマンカというヨーロッパで三番目に古い由緒ある大学と、最も美しいスペイン語を話すことで知られる小さな大学町に住むことに決めた。いいファミリーも見つかり、スペイン語の勉強も順調に進んだ。特に効果があったのは、毎日必ず新しい単語を五十個スペイン人との会話や新聞などから見つけだしノートにとって覚えたことと、スペイン人相手に毎日三時間ぶっ続けて会話したことだろう。籍を置いたのは大学の外国人コースだったが、それは名ばかりで僕はスペイン人学生の為の一般教養の授業に入れられた（そ

れが僕には却って良かった。

最初の授業が終わるや否や、前の列に座っていた数人のスペイン人学生が声をかけてきた。「お前、空手知ってるか」「カンフーなら知ってる」「じゃ、教えろよ」「じゃ、僕の会話の相手をしろよ」って感じで、即契約成立。結局七人のスペイン人が集まり、日曜の午前中に僕が彼らにカンフーを教え、彼らは毎日日替わりで三時間僕の会話の相手をすることになった。何故三時間かはそれが頼める限界かなと思ったからで、そんなに深い意味はなかった。最初の一時間は日本語が邪魔してスペイン語に集中できない。でも二時間目に入ると一時間目に使った言葉や文法が頭の引き出しの奥にじゃなく、正に「唇の間」に残っている感じで楽に使えるようになる。三時間目が始まる頃がピークで、日本語など全く頭から消えてるし、とにかく話すことに夢中。最後には自分でもびっくりするような気の利いた言い回しや、特に覚えた記憶のない言葉が何故か自然に口について出てくるなんてこともあった（もちろん、僕だけじゃなく相手のスペイン人も大喜び）。

三時間が終わったころは、千本ノックを受けた三塁手のようにぐったり。で、二週間も経った頃には、少しやっかいな文法事項（冠詞や名詞・形容詞の性・数一致、動詞の人称活用など）も全く苦にならなくなっていたし、言いたいことはほとんど思うが早いかすぐに口について出てくるようになっていた。

後の日々は「おまけ」だった。十二月に大学が民主化闘争でストに入るやサラマンカを引き払い、スペイン中をヒッチハイクして回った。帰国直前、どうしてもアルハンブラを見たくてグラナダに行った時のことが忘れられない。居候させてもらっていた友達の家から車で二時間程の道程なのに、何台も車を乗り継いで結局十二時間かかった。つまり、十時間は道路で「親指」を立てていた。それも、真夏のアンダルシアで（ラジオでは日陰で五十度だって言ってた）。でも、全然苦じゃなかった。その時、焼けついたアスファルトの上で吸った空気、体を撫でて行った風の匂いがまだ僕の記憶のどこかに眠っている。そして、時々目を覚ます。快感！

## 「小さい」三言語

# フィンランド語を学ぶ楽しみ

外国語学部助教授 千葉 庄寿



「森と湖の国」と呼ばれる北欧の小国フィンランド共和国。日本からは直行便で十時間ほどの「最も日本に近いヨーロッパ」である。面積は日本よりやや小さい程度で、大きさとしては決して「小国」ではないが、人口はわずかに五百二十万人。国土は森と湖が八割を占める緑豊かな国であり、湖沼は大小合わせて十五万にも上る。

フィンランド語（フィンランド語の自称はsuomi、「スオミ」）は、もっぱらフィンランド共和国の中で話される言語である。フィンランド国民の九三％が母語として話す言語であり、五％が母語とするスウェーデン語

とともに、公共サービスを提供するフィンランドの公用語となっている。

「なぜフィンランド語を勉強しているか？」という問いを、フィンランド人からも日本人からもしばしば受ける。この小稿では、この質問に対する私なりの（直接的・間接的な）回答を三つほど挙げ、フィンランド語、ひいては新しい外国語を学ぶ人への激励の言葉としたい。

回答一…フィンランドが好きだから

フィンランドというと、どんなことを想像するだろう？サンタの国、北極圏の白夜と極地夜、オーロラ、



森と湖、サウナ、ムーミン、さらには建築・インテリア・服飾などの先進的なデザイン、F1やラリー、スキートのジャンプやクロスカントリリーなどスポーツでの活躍、オープンソースの基本ソフト Linux 発祥の地、世界的な携帯電話会社NOKIAまで、フィンランドのもつイメージは実に多様である。経済協力開発機構(OECD)の国際学力比較調査(PISA)で子供の学力の高さが話題になったことも記憶に新しい。

フィンランドに限らず、その国や地域に関心をもつきっかけはさまざまだろう。私の場合は大作曲家シベリウスの深遠な音楽だった(中学校の時に、たまたまラジオで録音した「交響曲第四番」を、作曲家も曲名も知らずに十年近く聴き続けていたのだった)。今でも、フィンランド語の中に運命的なシベリウスの響きを感じることもある。

回答二.. 変わった外国語が「難しい」とは限らない

から

私は学部時代文学部に在籍した。何か外国語を身につけ、それを生かした仕事をしたいと思い、大学入学

後さまざまな言語にチャレンジした。しかし、どの言語に「自分の未来」を託したらよいか、悩んだものの結論が出ず、結局言語一般に関する事なら何でもアリ、また研究対象とする言語も好きに決めてよい、という「言語学」を専攻することにして、今に至る。

いろいろな言語をかじっては諦めた。発音が難しい、変わった文字を使うのがダメ、名詞ごとに覚えなければならぬ性(ジェンダー)が許せない…。そんな中で偶然出会ったフィンランド語は、「発音が簡単」「アルファベット系の文字で綴りと発音が一致」「アクセントが常に語頭にある」「名詞に性の区別がない」といった、ぐうたらな私の性に合った性質をたまたま備えていたのである(注1)。

フィンランド語の、馴染みやすいが「ひと癖ある」発音の特徴を一つだけ紹介しよう。フィンランド語の音には有声音(いわゆる「濁音」)が少ない。㇀や㇁はあっても、対応する有声音である㇂や㇃が存在しない。そのため、私たちがよく知っている外来語も、それと知らない人には一見何かわからない。さて、次

のフィンランド語の単語は、何という英語に対応するだろうか（答えはこの記事の末尾をざらんにただきたい）。

pankki

pallo

patteri

p と k はフィンランド語の辞書の見出し語の実に四分の一を占める。そこで、以下のような p ばかりのフィンランド語の早口言葉が生まれることになる。

Kokko, kokoo koko kokko kokoon!

コッコ ココー ココ コッコ ココーン

鶯 集めて 全ての 焚き火を まとめて

「鶯よ、全ての焚き火を一つに集めておくれ！」

この早口言葉からはまた、フィンランド語に子音（と母音）の長短の区別があることもお察しいただけるだろう（この点でもフィンランド語は親しみやすい言語である）。

回答三：フィンランド語が好きだから

これは「なぜフィンランド語を勉強しているか？」

に対する回答にはなれ、「どういうきっかけでフィンランド語を始めたのか？」という質問に対する答えとしては全くトンチンカンなものだろう。

フィンランド語は、「ウラル諸語」と呼ばれるグループに属し、その特徴は、なじみの深いヨーロッパの言語とはかなり異なっている。そして、文字と発音という最初のハードルが低い代わりに、その先には「普通の言語とは一味違う」好奇心をくすぐるさまざまな特徴が待っている。語学に関心のある人には、たまらない魅力のある言語なのである。以下、「語形成」という観点からフィンランド語の「面白さ」を紹介しよう。

フィンランド語の単語は実に多くの語形に変化する。ヘルシンキ大学の Fred Karlsson 教授によれば、名詞 kauppa 「カウッパ」「店」の可能な変化形を全て挙げると二二五三通りにもなる（注②）。フィンランド語話者は、これらの語形を全て記憶しているのだろうか？ そうではない。単語に付く要素の付く順番は厳密に決まっておらず、また単語に付く要素の形自体は一定なので、単語につく要素とその順番さえ覚えれば、語形は簡単

に予測できるのである。auto「アウト」「車」を例に、語形変化の仕組みを見てみよう (表1)。

実際、一度規則を知ってしまえば正しい語形がどんな作れるのは、驚くほど楽しい。どんな複雑な語形を作っても話しても、フィンランド人はちゃんと分かってくれるのである。

フィンランド語では、一つの単語から新しい単語を作る仕組み(「派生」と呼ぶ)も発達している。たとえば、kala「魚」からは kala-staa「魚を釣る」kala-inen「魚の」kala-isa「魚のたくさんいる」kala-mainen「魚のような」kala-ton「魚のない」といった単語が派生する。この特徴は、単語と単語の意味の関連を形の上でも理解することができるだけでなく、ssa (sɛ:ʂɛ) がつくると「〜がたくさんある・いる」という意味になり、ton (tɔ:n) は「〜なしの」といった意味になる、といった予測ができるので、結果として認識できる語彙の数を飛躍的に増やすことができる。

さらに、派生語と、先に挙げた語形変化の仕組みを組み合わせると、単語がどんどん長くなる。長い単語

単語(語幹)	数	格	所有	小辞	
auto					auto「車」(主格)
auto	i	ssa			auto-ssa [アウトツサ]「車の中で」
auto	i	ssa			auto-i-ssa [アウトイツサ]「(複数の)車の中で」
auto		ssa	mme	ko	auto-i-ssa-mme-ko [アウトイツサンメコ] 「私たちの(複数の)車の中で(です)か?」

表1: auto「車」の語形変化の例

の例としてフィンランド人が自慢する epäajestelmällistyttä mätömyydelliansäkäanköhän (「あの人の物事を順序立てさせないでおくことができない性格のせいで「はないんでしょかね」)とでも訳せるだろうか) は、「東京―特許―許可局」のように複数の単語を並べてズルをしているわけではなく、一つの単語にさまざまな要素を次々とつけて作られた「まっとうな」語形である。ここまできると、フィンランド人に負けるものか、という気持ちになってくる。事実、フィンランド語の面白さに必死で付き合っ、留学して一年ほど経ってみると、フィンランド人と普通に話し、また大

学の授業で自分なりの議論ができるだけの語彙と文法はいつのまにか身につけていたのだから不思議である。

おわりに

ひとたびその外国語に親しみ、コミュニケーションの道具としてその言語を使うようになると、その外国語を使って得られるものの大きさ、豊かさは、その言語を学びはじめた時には想像もできなかったものであったことに気づく。

フィンランド人がよく話すジョークのなかに「フィンランドと日本は国を一つはさんで隣り合っている」「近所同士」というのがある。間にあるのはロシアという巨大な国だけ。果たして「近所」といえるかどうかはともかく、この言葉はフィンランド人にとっての日本の心理的な「近さ」をよく表している。おそらく、フィンランドという小さい国の言語だからこそ、その外国語を介して得られる友情や信頼関係の絆は強く、深いであろう。「小さい」言語を学ぶ喜びは、こんなところにもある。

追記・麗澤大学外国語学部の二〇〇四年度からの新カリキュラムに「自主企画ゼミ」という学生が企画・発案する新しいタイプの授業が開講できることとなり、二〇〇五年度の二学期に十人あまりの学生が、麗澤大学で初めてフィンランド語の授業である「基礎フィンランド語」を受講してくれた。来年度より始まる麗澤大学オープンカレッジ (ROCK) でも、フィンランド語の講座を担当する予定である。

回答二の問題の答え・フィンランド語 pankki 「銀行」 (＝英語 bank)、フィンランド語 pallo 「ボール」 (＝英語 ball)、フィンランド語 patteri 「暖房器、バッテリー」 (＝英語 battery)。語末に母音が入るのもフィンランド語らしい特徴です。日本語にも似ていますね。

(注一) フィンランドは一九〇七年に独立したばかりの若い国である。フィンランド語も、書き言葉の標準が確立したが、十九世紀の終わりという非常に若い言語であり、そのことが、フィンランド語が合理的な綴り字(正書法)をもつ大きな理由になっている。

(注二) <http://www.jinghelsinki.fi/keartso/genkaazhumi>

# 私の「インスタント日本語」

国際経済学部教授 趙 家林



子供の頃から、「課題作文」が苦手で大嫌いだった。教師になったらこういった苦役とはさらばだと思っていたら、甘かった。締め切りに追われることはしよっちゅうだし、逆にやみくもに言葉を並べて却って駄文を綴る羽目になることもままある。

ところで、今回、日本語の勉強法について書いてくれと頼まれ、ふっと思いついたのが、大連での日本語勉強だった。

当時、中国では留学に行く学生はごく少数で、パンダ並みの丁重な扱いを受けていた。こんなとき、我々全国から選ばれた約二百名の留学予備生が、大連で日

中両国政府の協力による日本語特訓に参加したのである。日本で博士課程に進学するための特訓だった。大阪外大と大連外国語学院の教授陣が共同企画したプログラムは、半年で日本語をものにさせるという野心的で密度の濃い授業内容だった。そこで私は初めて日本の塾式勉強のやり方を知り、寝言で日本語を口走るという二十四時間語学漬けの日々を送った。平日の授業はいうまでもなく、土曜日毎に作文が課され、翌々日の月曜日の朝に提出しなければならぬのが、たいへん辛かった。ある日曜日などは、作文の種が尽き、さんざん悩んだ末、次のような話をでっち上げた。

「我々は猛勉強で疲れ果てた。作文の時間に寝てしまった。夢の中でサンタクロースに会い、クリスマスプレゼントをもらった。それは自動作文機だった。そのマシンは、好きなテーマだけ入力すれば、好みの長さ文体で最適な文章を用意してくれるように出来ている。このようなすばらしい機械を入手したお陰で、今度は先生が量産した文章を判読するのに疲れ果てる羽目になった。」これを恐る恐る提出したところ、先生からユニークな発想だと褒められ、なんとAを貰ったのだった。

大連でのプログラムは、我々にとつて、かなり刺激的な競争プログラムだった。毎週小テストが行われ、上位十名の氏名が廊下に貼り出される。しかも、この毎週の成績の累計平均点で文部省の奨学金が決まると当初から明言されていた。文部省の奨学金は、税金なしの手取りで十七万円、奨学金の貰えない学生は中国政府支給の六万円ばかりである。奨学金の枠は正確には覚えていないが、恐らく四、五十名だったと思う。留学生の三分の二は、私のように大学の第一外国語と

して英語を勉強してきた学生だった。我々と第一外国語として日本語を四年間勉強してきた学生との差は歴然としていた。七十メートルのハンディを負って百メートル競走しろと言われたようなものだ。半年の日本語の勉強だけで奨学金が決まるなんて不公平だとクレームを付けても全く受け付けてもらえなかった。日本での留学生生活がバイトに明け暮れるか、それとも余裕をもって勉学に励むことが出来るかが、たった半年での日本語の成績で決まってしまうなんて冗談ではない。旧ソ連の創立者であるレーニンは「外国語は人生の武器の一つである」と述べている。文句を言ってもしょうがないから武器を手に入れて勝負に出るしかなかった。

実は、私は学部時代、日本語を馬鹿にしたことがあった。同級生の教科書をなめ読みして、勉強しなくても内容が分かるとうそぶいたのだ。漢字から意味を推測して、八割ほど言い当てることができたからである。勉強しなくても八十点は取れるのだからお前達はむだな努力をしていると同級生をからかったのである。

残りの二割は仮名だったので当てようがなかった。しかし、この二割の仮名が、日本語の鬼門であった。さらに、「ガールフレンド」のような外来語も元の発音とあまりにもかけ離れているため、また当てようがなかった。正直に言うが、日本に来て二十年以上が経った今でも、「テニオハ」には未だに自信がない。漢字の間に挟む仮名は、いつも私を嘲笑うように見える。大連外大の図書館で、「『は』と『が』の区別について」というレンガほどの分厚い文法書を手にしたとき、ハンディを埋めてやるという意気込みが突然、後悔へと変わった。書棚に並ぶ文法書が、障害物競走の柵のように私の道を遮った。半年しかないのに、これでは文法書を読破するだけで時間切れになるではないか。本当に困ってしまった。

「足で通り抜けられない道は、頭で通り抜けてみよう」と、昔の賢人は言った。二点間の最短距離は直線である。効率よくゴールするには、テストの結果に焦点を絞り、米軍の越島作戦のように、太平洋中に点在する島々を無視して東京爆撃という中央突破を狙うし

かない。奇襲作戦なしでは先に七十メートルを走った人に追いつかないのは明らかである。最小限の文法勉強で最大限のテストの正解を狙う戦法を取らないと時間のハンディに圧倒されてしまう。とにかく、朝から晩まで頭を日本語の辞書に突っ込んでいても四年間日本語を「食べて」きた人間にはかなわない。そこで私は思った。では、面倒臭くて憶えにくい文法に貴重な時間を割く代わりに、一つでも多く文章を読み、一分間でも多く発音練習にしたらどうだ。あの文法のプロで語学専門の先生でさえ、「学ぶより習え」と言っているのではないか。

これは、一見無謀な語学攻略法に見えるが、いわゆるネイティブが母語を憶えるプロセスと合致する。中国人の書棚に「中国語文法」というタイトルの書物が並んでいることはまずない。日常的に日本語を喋っている日本人は、広辞苑をポロポロになるまで調べることはしない。母語の中では誰しも自分の「文法なし言語生活」を不自由だとは感じない。では、なぜ成人してから外国語学習では文法と辞書なくしてはその言

語を習得できないとみなは信じて疑わないのだろうか。もしかするとこれは、疑ってもよい「常識」ではないだろうか。文法と辞書は、言葉と文章の意味を理解するのに役立つ手段であり、吸収力と記憶力が衰えた大人の言語遍歴を補助する杖のような道具である。直接意味を掴むことができるなら、手段と道具はあつてもなくてもあまり関係はない。極端な例を挙げれば、猫や犬は辞書と文法には縁がない。動物はなぜ人間の言葉を理解できるのかというと、特定の発音と飼い主の「飴と鞭」という調教が動物に経験を与え、動物は与えられた体験と関連する人間の発音から、反射的に自分にとって福か災いかを予想できるからである。

大連での日本語競争は、最終的にはハンディを負った「大学英語組」の勝ちだった。私達の秘密兵器は、英語を学ぶ時に身につけた「図々しく厚かましく喋る」、「毎朝大声で発音練習する」、「よい文章を選んで朗読する」、「外国語漬けになって大量に読みこなす」、「文法より意味理解を重視する」といった勉強法だった。小テストの結果が公表されて五週目、ハンディ組の名前

がリストに現れるようになった。初めて自分の名前を見たときは、本当に感無量だった。大連での日本語学習だけではなく、私にとってはそれに先立つ大学四年間での英語も、ほぼゼロからハンディを負って追い付こう、追い越そうとする毎日だったのだ。ライバルは全国共通入学試験でナンバー二の伝説的同級生であった。このような優秀な同級生に恵まれなかったら、私もここまで頑張る気力はなかっただろう。また、大阪外大から来た先生の真剣さも忘れられない。クラスの成績が一時落ちたとき、みんなの前で先生は涙をこぼした。既に二十年以上を経た今でも、咽び泣く先生の顔を思い出すと心が痛む。

自分が教壇に立つようになってから、私は授業中、語学とスポーツを比較し、両者の共通性を説く。頭を使わないスポーツマンは変化球を出せないし、相手の変化にも対応できない。駆け引きと変化のないゲームほどつまらないものはない。スポーツを上達しようと思うなら、まずよいチームに入り、強いライバルの相手になる機会を努力して手に入れる。コーチに恵まれ



るより、練習相手とライバルに恵まれる方が選手にとって大切である。ライバルとの競争で負けを喫することほど、勉強になることはない。諦めさえしなければ、失敗は多くのことを教えてくれる。一方、練習なしで上達できる語学勉強法などは存在しない。上手い選手は例え世界ランキング上位になったとしても毎日素振りと基礎トレーニングを日課としてこなす。語学で上達しようとしたら、毎日大声を出して読む練習をし、毎晩テレビの番組やラジオ放送を聴いて聞き取りの練習をしなくてはならない。高校の物理学で「力学的エネルギー保存の法則」を学んだ者なら、エネルギーの消耗と距離の移動との間に一定の関係があり、物を動かそうとしたら力を出さなければならぬというのとは常識だろう。省エネをして蚊ほど小さい声しか出さずに発音がうまくなるはずはないし、メモも取らずに数学の定理や公式を覚えるはずもない。こんなごく当たり前のことさえせずに、先生の教え方が下手だから上達しなかったと平気で言う学生が多い。これは卓球の市民大会レベルの競技で、基本さえ出来ていない棒立

ちの選手が、一発勝負で得点を狙う光景と似ている。腰とひざを曲げるくらいに苦勞も煩わしく感じて努力を惜しんでいるくせに、失敗を他人のせいにするのは如何なものか。

ところで、半年で速成した私達の「インスタント日本語」だが、テストこそ高得点を取ったものの、実用に耐えるものではなかった。仙台に辿り着き、東北大学の先生と初対面のときは、本当にショックだった。「です」と「ます」しか聞き取れなかったのだ。頭の中が真っ白になった。そのときから、漢字の意味がほぼ共通しているから日本語は簡単だという軽い気持ちには完全に消えた。そこでは、漢字の書けない「金髪青い目の外人さん」が我々より流暢な日本語を操っていた。「石の上にも三年」と言うが、半年の「修業」はやはり短かった。「力学的エネルギー保存の法則」は語学にも通用するのだ。その時、相手に通じる日本語を、もう一度ゼロからやり直そうと心に決めたのである。

## 外国語を学ぶ努力と

# 絶え間ない忍耐とよろこび

外国語学部教授 竹原 茂 (ウドム・ラタナヴォン)



### 一、まえがき

私は小学校三年生からフランス語を学び小学校六年生の中学入学試験に五十人のクラスの中でただ一人だけ合格した。当時ラオスはフランスの植民地政策によって中学以上の学校は全てフランス語を勉強せざるをえなかったのです。教員も皆フランス人だった。高校卒業（バカロレア=Baccalauréat 大学入学資格）後、ほとんどのラオスの学生はフランス政府の奨学金でフランスへ留学する。私はアジア人なので日本を選んだ。しかし、日本について何もわからないのに「何で日本を選んだか」フランス人の先生から質問を受けたこと

はしばしばであった。「アジア人で特に発展途上国出身で、なぜいきなりフランスへ行かなければならないのですか」と私は思った。ちようど当時は日本政府文部省のただ一つの奨学金が私の高校にまいこんできたので、「日本留学奨学金試験」に挑戦した結果、運よく合格したのです。そして一九六五年の春、日本留学が実現したわけです。

### 二、日本語との格闘

二十代の私が全ラオスからだだ一人日本へ行く。日本語もほとんどゼロにひとしい。たよる人も誰もいな  
いし、とつても不安でいっぱいです。当時ラオスには

日本語を教える学校などなく、留学前に勉強することもできなかったため、ことばにはほんとうに苦勞しました。驚いたことに、日本語には、ひらがな、カタカナ、それに漢字と三種類もの文字があるので、一つの文字だけでも大変なのに、三つもあったのでは苦勞も三倍です。いいえ、三倍どころではなく、フランス語と英語を入れると五倍です。とりわけもつとも苦勞したのは漢字でした。なぜなら、ラオス語はバーリ語や、サンスクリット系文字から伝来されたのであるからです。たとえば、*ຳ, ຂ, ຄ, ງ, ຈ, ຈຳ, ຈຳ* などで、子音だけで二十七字あり、母音は基本母音は三十二種類、声調記号は四つあります。ラオス語はタイ語とほぼ同じ姉妹語と考えていいと思います。ところで実際に日本語を勉強し始めますと、なかなか覚えられず、ひらがなの「あ」と「お」、「ぬ」と「ね」、「ぬ」と「め」、そして漢字で大変困りました。一学期の成績が悪いと留学は取り消されると聞いていましたから、そんなことになったら大変だと思い、なんとしても覚えなければならぬと必死で勉強しましたが結局五十五

点しか取れませんでした。漢字を指導してくれた先生からは、「ご飯は後、勉強が、先だ」としかられて、くやしくて涙が出ました。けれども、その後、どうにかこうにか買い物や、友達との話は通じますが、二学期の期末試験に失敗したら、ラオスに帰らなければならぬと、必死で日本語を勉強しました。奨学金の一部を使って、ソニーのオープンリールのテープレコーダー（当時カセットテープがまだなかった）を買ってきて、自分の声の日本語や、日本人の友達の声などで、日本語の本から録音してもらって留学生寮にもどったあと、毎日夜遅くまで勉強しました。当時は、英語圏以外の外国人に教える日本語教師の数が少なく、また教材も十分ではありませんでした。ですから、意思の疎通にはお互いに他国語である使い慣れない英語を使って日本人の教師とコミュニケーションをとりました。その他、ある日、私は黒板を使った学習方法を思いつきました。黒板に文字を何度も書いたり消したりすれば覚えられるのではないかと思ったのですが、当時は寮で使うような適当な大きさの黒板などは売ってない

のです。そこで私は三万円（当時）の奨学金のうち、二千五百円をはたき、横一メートル、たて八十センチメートルくらいの小さな黒板を注文して作ってもらった。その黒板を寮の部屋（たたみ三畳ぐらい）の壁にかけ、漢字を書いては消し、消しては書きしていました。それでもなかなか覚えられず、漢字には、ほんとうに苦勞させられました。特に画数の多い漢字はなかなか覚えられず、おおいに困られました。私は悔しいやら、もどかしいやらで、泣きたくなくなってしまいました。

一度覚えられた漢字は忘れないように部屋の天井に画びょうやセロハンテープで貼りつけるということもやりました。朝起きると、その漢字がまず目に入ってくるのです、いつしか、天井だけでなく、壁にもすき間がないほどに漢字があふれていました。もう一つの苦勞は日本語会話です。いくら漢字やひらがなが覚えられても、日本語会話ができなければ意味がないと思ひ、毎日自分の部屋でNHKのニュースや民放の楽しい番組やドラマなどを見ていました。時々日本の総理

大臣や有名人の演説も録音しておいて、ゆっくり聴く練習をしていました。休日には、ポケットにローマ字の『和仏中辞典』（白水社）を入れて、喫茶店（café）や小さな飲み屋でも店員と日本語会話を練習していました。忙しく日本語の勉強に取り組む傍ら、私は友人（日本人、タイ人、インドネシア人など）たちと暇を見つけては、好きなテニスをよくやりました。ふるさとを思い出して寂しくなると、大都会東京を離れ田舎へいつも小さな旅をしていました。

### 三、日本語を日常生活に生かす

このように日本で留学生生活をさせていただいたおかげで私はだんだんと日本語と日本の生活習慣や文化を理解するようになり、毎日楽しく過ごしてきました。今もよくゼミの学生に「学生時代にしかできないことがたくさんあります。『よく学び、よく遊べ』と言われるように若い頃によく考え、たくさんを経験をして、自分の人生の設計をすることが大切だと思います。語学を専攻するなら、一生をかけて追求するくらいのもりで徹底して勉強したほうがいいと思います。中途

半端な勉強では、なにをしても人生が中途半端になつてしまいます」とお話をしています。外国語である日本語を一生懸命に勉強し、麗澤大学で教鞭をとるまでは、たくさんの人々のお役に立っていかかと思ひます。

日本の外務省、日本青年海外協力隊、アジア福祉教育財団難民事業本部、日本やタイのNGO、モラロジール研究所、在日ラオス人協会（今は在日ラオス人定住者協会）など。現在、大学の授業で特に国際協力論、基礎ゼミ、教養ゼミの授業は自分なりの日本語でやっています。しかし、フランス語（病気になる前に二十五年間フランス語を教えた）やタイ語を教えた時は、フランス語やタイ語で説明することができませんが、学生が理解できないのです。なぜなら皆、初級からやらなければならぬからです。そうなら、私は一生懸命に日本語でフランス語やタイ語の文法を説明することになります。皮肉なことに自分はラオス人でラオス語が使えず、なにかも外国語で話さなければならぬ運命に嵌<sup>はま</sup>つたのです。しかし、外国語がわかることのすばらしさは誰よりもうれしく思ひます。学生に教

えるのに日本語の本や英仏語資料、ラオス語、タイ語の本や資料などを使って準備してはいますが、日本語の資料を読む時、読めない漢字がしばしばあります。その時は学生に聞き、書き方も教えてもらっています。自分は先生だから、恥ずかしいとか考えず、学生は日本人だし、自分より漢字はおそらくよく知っていると思います。外国語を学ぼうと思うなら、恥ずかしいとか遠慮とかあまり考えない方がいいと思う。会話をする時もあるべくその言語だけ（日本語なら、日本語だけ）を考えて話すのです。私の場合はよく通訳、講演、翻訳を日本語でやってきたので、だいぶ慣れましたが、それでもやはり、日本語は難しいです。

#### 四、むすび

外国語（ことば）は何よりも楽しいです。他国の言語をマスターして、その国の文化、歴史、社会、習慣をよく理解できるからです。私は毎日一日もかかさず、日本語の新聞を読み、授業に必要な記事があつた場合、すぐに切り取りをしています。テレビ番組もよく注意して、授業に必要なものがあると、すぐにテープに収

めておくのです。日本語が理解できて何とすばらしいことでしょう。お金にかえられない喜びです。欧米の先生は（一部の人を除く）他国民が自分の言語を勉強してくれるからあまり苦労しないようですが、自分が住む国（日本）の言語も読めず、話せず、きつと不安だろうなあ！と思います。私は五ヶ国語も理解できるし、お金さえあればどこへ行っても心配はないと思います。

学生諸君、外国語を学ぼう！ 自分と自分の国を守るために。特にアジアの非漢字言語文化の国、たとえば、タイ語、ラオス語、カンボジア語、ミャンマー語、インドネシア語などです。きつと、将来には自分にとつても、日本の国のためにも大いに役に立つかと思えます。外国語が理解できるとは何とすてきなことです。よう。

さあ、外国語を学ぼう！

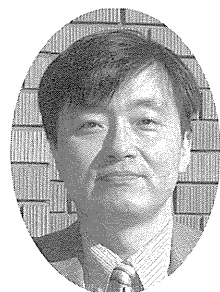


学生を連れてタイ・スタディ・ツアーへ

「よろしくどうぞ」

## で始まった私の日本語修行

外国語学部助教授 森 勇俊 (朴 勇俊)



私が来日したのは、今から三十年ほど前である。当時、私はまだ小学校六年生であった。父は韓国の大学

で教鞭をとっていたが、国費留学生として東京教育大学（今の筑波大学の前身）の大学院に学ぶため、勤めていた大学を休職し渡日していた。その間、母と私は二人で韓国の全州という地方に住んでいた。

私は日本で暮らすことになるとは思ってもいなかった。たので、日本語の勉強などはしたこともなかった。ただ、父から日本の少年漫画雑誌等を送ってもらっていて、意味も分からず絵だけを眺めては、勝手なストーリーを創り上げたりして遊んでいた。漫画の吹き出し

に書かれている文字が不思議な形に思えて、子供ながらに異国的な雰囲気を感じていた記憶がある。

当時、夕食後にラジオの連続ドラマを聴くのが母と私の楽しみの一つだったが、ダイヤルを回すと偶然NHK放送の周波数に当たることがあり、その時の女性アナウンサーの話す日本語の不思議で美しい響きが今でも鮮明に耳に残っている。そして、胸ときめかせながらラジオにかじりついていた幼い日の自分の姿がありありと目に浮かんでくる。小学生の私にとって日本は遠い異国で、日本語は不思議な未知の世界だったのである。

父が渡日してから数年後、母と私は父といっしょに日本で暮らすため、羽田行ききの国際線に乗り海を越えていた。拍子抜けするほど短く感じられたフライトの後、スチュワーデスの「またお会いする日まで、ごきげんよう、さようなら」という機内放送に送られ日本の羽田空港に降り立った。それからは、何もかもが物珍しく新鮮で、戸惑うことだらけの日々が続くことになる。たった二時間半ほど飛行機に乗って降りたら、周囲の人たちが大人も子供もみんなラジオでしか聞いたことのない日本語を話し、道路に出れば車は反対方向を走り（韓国では車は右側通行である）、タクシীর車体の色がやたらと派手で、ドアを開けようとしたら、なんと自動的に開いたのである。これには本当にびっくり仰天したことが今では懐かしく思える。

こうして親子三人の日本での生活が始まった。最初に私の学校のことを先決問題だった。日本語がまったくわからない状態だったが、両親の意向で、日本の小学校に入ることになった。東京の豊島区にある区立小学校に初登校した日、クラスのみんなの前に立たされ、

女性の担任の先生が私の紹介をしてくださった。そして緊張している私の顔を見ながら先生がおっしゃった次のひとことを聞いた瞬間から私の日本語との悪戦苦闘が始まったのである。



小学校の卓球大会で(中央でトロフィーをもって)

「よろしくどうぞ！」

一瞬、私は頭の中が真っ白になった。「よろしく???何をよろしくすれ  
ばいいんだろう?」「どうぞ???何をどうぞなんだ?」「訳がわからずぼかんとしている私を見て、先生はもう一度「どうぞよろしく!」と語尾を少

し上げ気味におっしゃった。「今度は『よろしく』と『どうぞ』の語順が逆になったぞ!これにも何か意味があるのか。どうすればいいんだ」。私はますます混乱し凍りついたように固まってしまいいちちつくしていた。

結局、前の晩に必死で丸暗記した自己紹介とあいさ



つを述べる機会も逸してしまった。後から、あいさつをうながして下さった先生の意図を教えられ、ひとり臍はらをかんだ。

日本語はひじょうに多義的であるということをしれば感じる。そしてその多義的な表現を通して微妙な心の機微や相手の意図や腹の内を読み取ることのできるなコミュニケーションをはかろうとする場合が多いようだ。「どうぞ」や「よろしく」「どうも」「まあ」などは代表的なもので、外国人にとっては使い方が難しい。

詩人谷川俊太郎の次の詩は日本人のコミュニケーションの多義的で曖昧で複雑な面をデフォルメした内容で面白い。

「ごあいさつ」(谷川俊太郎、「これが私の優しさです」から)

どうもどうも

やあどうも

いっぞやいろいろ

このたびはまた

まあまあひとつ

まあひとつ

そんなわけで

なにぶんよろしく

なにのほうはいずれなににして

そのせつゆつくり

いやどうも

そのうち、仲のよい友人もたくさんでき、順調な小學校生活を送ることができるようになった。友人たちとの交流の中で、日本語も自然に身につけていき、授業の内容も理解できるようになったが、その道のりもあちらこちらでいろいろな勘違いや誤解による失敗もたくさんあった。

たとえば次のようなことがあった。友人の一人といっしょに学校から帰る道すがら、いろいろな話をしながら歩いていた。話がとぎれてしばらくしてから、「じゃあね!」とその友人は言った。私はそれが別れの挨拶だとは知らず、話題を続けるためにかけたことばだと思い、「うん、それで?」と話の続きをうながした。友人はげんそうな顔をして二言三言話してから、また「じゃあね!」と言った。私はまた、「うん、さつき

の話だけ……」と言いながら話を続けた。こういうやりとりが何回か繰り返されるうちに、私は友人が妙な動作をしているのに気がついた。

「じゃあね！」と言って少し前のめりになったとき、私が話しかけると体勢をもどし、「じゃあね！」といっで行きかけると私がまた話しかける。行きつ戻りつをぎくしゃくと繰り返しながらも私の拙い日本語での話を誠実に聞いてくれた友人と私のこっけいなやりとりが今思い返すとほほえましくなつかしい。

また、ある時は次のようなことがあった。仲のよい友人のグループで遊ぶことになり、仲間の一人を誘いにその家まで行った時のことである。その友人は小林という名前であった。その家の門の前で、私が「こばやし！」と友人の苗字を大声で呼んだとき、そばにいた仲間の一人が強い調子でこう言った。「おい、呼び捨てにしたら失礼だぞ。ちゃんと小林君と呼ばなきゃだめだよ。この家には小林のお父さんやお母さんもいるんだぞ。その家族たちも名前が小林なんだから、ちゃんと君づけで呼ばなければだめだよ。何も知らないん

だな」。そう言われて私ははっとした。

韓国では、同じような状況で子供同士は呼び捨てにするのが当たり前である。しかし、そのような自国の習慣を無意識にそのまま持ち込んでしまうと間違いをおかすことがあるのだということを初めて学んだ瞬間であった。言葉にまつわる、体で覚えた「異文化理解」である。

こうした失敗を繰り返しながらも、仲間を支えられ楽しい小学校生活を送ることができた。振り返ると、私の日本語学習はこの小学校六年生の一年間のさまざまなか体験、仲間との楽しい交流と遊びを通して、ひじょうに濃密に凝縮された形でなされたような気がする。

日本語と韓国語は多くの点で類似しており、互いに学びやすい言語だといわれる。たしかに語順が等しく、「てにをは」の助詞があり、同じ意味領域で使用される漢字語彙が多いなど、韓国人にとって日本語はもっとも学びやすい外国語のひとつであるということができ

る。しかし、だからこそ日本語を使用する時に韓国語の

習慣が持ちこまれやすく、知らずのうちに誤りをおかすことが出てくるのである。韓国人の日本語学習者はそういう点を常に確かめながら正しい日本語を習得するようにこころがけるべきであろう。

たとえば、日本語で「八方美人<sup>はっぽうびじん</sup>」は、だれにでも如才なくふるまう人を皮肉をこめて言う場合が多い。しかし、韓国語で「八方美人<sup>팔방미인</sup>」と言えば、あらゆることに優れている多才な人への褒め言葉なのである。このような韓国語での語彙の使い方が日本語使用時にうっかり持ちこまれると、日本人に対して褒め言葉のつもりで「あなたは八方美人ですね」などと言ってしまったり、とんでもない誤りをおかすことになりかねないのである。そんなことを言ってしまったら、たぶんその人は二度と口をきいてくれないかも知れない。

ことばは意思疎通のための単なる道具にすぎないものでは決してない。ことばには当該国の歴史・思想・慣習・しきたり・文化がとけこんで一体となっている。このような外国語を学ぶということは異文化を学ぶということである。したがって、外国語を習得し当該外

国の人々と真の交流をするためには、ツールとしての言語だけでなく、その背景にある文化をも深く学び理解することがとても大切であるということができらるろう。

日韓両国の敬語の使い方がちがいをみると、文化の違いの一部が見えてくる。父親への電話に出た子供の応対の違いについて見てみよう。日本では、「ただいま、父は出かけております」と父の不在を伝えるだろう。ところが韓国では「ただいま、お父様はお出かけになりました」というのが普通である。韓国の場合は身内に対しても敬語を用い、日本では身内には敬語を使わない。一般的に韓国語がいわゆる「絶対敬語」、日本語が「相対敬語」と呼ばれるゆえんである。韓国での人間関係においては、目上か目下かという年齢の上下関係が最も重要視される。だから初対面の相手に対して、まず年齢を尋ねることも珍しいことではない。また、昔から主君に対する忠誠よりも親に対する孝行を最優先するという文化がある。だから子供が親に対して敬語を用いることは当たり前のことなのである。

日本では年齢の上下以外にも、内か外かの関係が敬語の使い方にも大きく影響する要因であるようだ。外の人間に対しては、自らへりくだることによって相手への礼節を示し、それがたとえ自分の父親のことであっても敬語を用いないで話すのが普通である。また、子供が直接親と話すときも敬語を用いることはほとんどないようである。

たいていの韓国人日本語学習者は、最初このことに戸惑いをおぼえるようである。しかし、自国の文化に固執するのではなく、それぞれの文化のスタイルの違いを理解し、臨機応変にスタイルのシフトチェンジを行っていくことで異文化に適應していけるのではないだろうか。日本では日本語を話さなければ通じないように、文化に関しても日本のスタイルを学び、スムーズなシフトチェンジを行って、衝突のないように自らを運転していくことが大切である。

日本語には日本の文化と人々の生きてきた歴史がこもっている。日本語は私にとって日本を見る窓口であり、日本そのものでもある。私は日本語を通じて、さ

まざまなことを学び、いろいろな日本の人々と触れ合い、助けられ、これまで日本で暮してることができた。お世話になったさまざまなたちに心からの感謝を申し上げたい。

思えば、小学校の先生に「よろしくどうぞ！」といわれて、途方に暮れていた時から三十年以上もの時が流れた。ふりかえると様々な光景が走馬灯のようによみがえり、感慨深いものがある。長い年月を経て日本は私にとって第二のふるさとなった。私はこれからも家族とともに日本で暮らしていくだろう。そして日本語とも一生つきあって行くことになりそうだ。

最後に学生の皆さんにひとことお伝えしたい。人間はことばによって世界を認識し、ことばを手にしたことであらゆるものを築いてきた。ことばは人類の財産である。学生の皆さんには、日本の財産である日本語を美しく保つことに努め、世界の様々な言語に興味をもってなるべく多くの外国語を学んでほしいと思う。ことばは世界を映す鏡だから。

## 「日本語」の学習体験

国際経済学部教授

ラウ・シン・イー



「日本語」の学習体験について書いてくれと頼まれた際に、何を紹介するかを戸惑っていた。私の生まれ育ったところは多民族と多言語の環境であったため、外国語の学習は自然的な形で行われていたように思う。私の国籍はマレーシアである。この国は主にマレー人、中国人、インド人、そしてその他の人種から構成されている多民族国家であると同時に、多言語の国でもある。また、この意味から、この国においてはマレーシア人という民族の概念がなく、国民のアイデンティティはそれぞれの人種 (Race) の言語、宗教、慣習等の文化的な要素によって定められる。人種で言えば、私は

中国系であり、母語は祖父の出身地で話されるミンナ語という方言である。中国の方言は地方によって異なっており、例えば、中国系マレーシア人が話す代表的な方言として、福建省南部や廈門 (アモイ) 等で話されるミンナン語、広東地方で普及している広東語、そして中国南部と台湾等で使用される客家 (ハッカ) 語等がある。これらの方言は正式な文字がなく、それぞれの方言の音声は異なっているが、共通して漢字が当てられている。その上、「普通話 (北京語)」は中国語で教育を受けた人々によって共通語として話される。私の場合は祖父が福建省出身のため、使用言語はミ

ンナン語である。また、家の隣人は広東を始め中国南部の出身が多かったため、広東語、客家語や海南語等の方言が話されていた。このような環境の中、私は小学生になる前に、極自然に福建語、広東語と客家語をマスターした。そして、北京語(普通話)教育による小学校に通っていたため、そこで北京語の会話や漢字の読み、書きを覚えた。また、小学校では他の民族とコミュニケーションを図るため、マレー語や英語の授業をも受けた。小学校の後、英語とマレー語両方を教育の言語媒体とした中学校や高校に進学したため、必然的にこの二つの言語を覚えるようになった。この二つ言語の学習はコミュニケーションを重視したことを特記しておきたい。このような背景に、マレーシアで暮らしていた私にとって、外国語とは先に述べた言語以外のもの、例えば、日本語、フランス語、スペイン語、ドイツ語やロシア語といった言葉になるのである。

マレーシアのような生活や教育環境で育ってきた私にとって、留学生として来日し、日本語を最初の外国語として学ぶことになった。多言語の環境で生活して

きた私にとって、日本語の学習に関してあまり違和感はないが、日本での留学は英語圏で留学すること比べて機会費用が高いと思った。来日する前に日本語の知識は皆無であった。日本に来る前に、日本語の言葉として「ドラゴン怒りの鉄拳」というブルース・リーの映画を通じて、「ありがとう」や「バカヤロー」という倉田保昭の台詞を覚えてただけ。もちろん、これは日本語の学習に何も役に立たなかった。振り返ってみると、ゼロからの出発は私にとって良かったのである。なぜならば、日本人の先生から正しい発音を学ぶことができたからである。私に通っていた日本語学校では、実際に何人かの同級生が来日の前、マレーシア人の日本語教師から学んでいたが、残念ながら正確ではない発音を教えられ、日本にいてもその間違った発音の修正が出来ず、その結果、正確な発音が出来ずにいたままで日本語学習を終え、彼らは未だに間違った発音を直すことが出来ないでいる。

日本の大学へ進学するのに、留学生は日本語能力検定試験が定める一級コースのシラバス、つまり、九百

時間以上の日本語学習、その間二千字の漢字、一万語の語彙、高度な文法や読解と聴解の能力を身に付けることが要求される。私は大学への進学を希望していたため、この一級コースの内容を学習していた。既に二十年以上経ったので、その学習内容についてはあまり鮮明に記憶していないが、大凡<sup>おおよそ</sup>次の様に勉強していたのではないかと思う。日本語能力検定試験の一級コースによって定められた目標を目指し、最初の一週間に平仮名（母音や子音）と片仮名の発音、それぞれの書き順を学習した。二週目から文法の初歩的な構造（例えば、「これは何ですか」、「それはペンです」）を勉強しながら、日本語で簡単な挨拶と会話を覚え、その過程で語彙の数を増やしていった。最初の一ヶ月はほとんど平仮名と片仮名を用いた学習であった。それを経て漢字を用いて語彙、その音読みと訓読みや書き順を覚えたりして簡単な作文を教えられた。この様にして約三ヶ月の日本語初級の学習を終えた。その間、日常生活において最低限の簡単な会話が日本人とできるようになった。初級における学習の特徴は「丸暗記」

であり、つまり、平仮名と片仮名、語彙、そして文法の構造を暗記し、機械的に覚えたのである。漢字に関しては北京語ができたため、音読みに関してはさほど苦労しなかった。訓読みについては暗記する以外方法がなかった。

中級の学習課程では文法構造がより複雑になり、片仮名や漢字で表現する語彙の数も増え、読解と作文も複雑になってきた。片仮名は外国語の言葉を日本語風の発音に直して用いている事に気付き、いつも片仮名の音で英語の語彙を覚えるようにした。ただそれは英語の場合に限られる。この覚え方の弱点はそこであり、つまり、片仮名表記の外来語には、英語以外にドイツ語やラテン語等の言語からの外来語も多く、それらについてなかなか覚えられないのである。同様に、片仮名で外来語を表記する際の法則があるが、私は元来その外来語のオリジナルな発音でそれを覚えてしまうため、未だに片仮名表記をいつも間違っているので（例えば、Australia のオーストラリアをアウストラリア、whisky のウイスキーをウイスキに、beer のビール、building

のビルなど)、「ならば」と、結局今もできるだけ片仮名を使用しないようにしている。敢えて、外来語の表記には英語ならその単語をそのまま書く様になっている。

他方、漢字の学習についてあまり苦労はしなかった。北京語が分かるので、漢字が読めなくても、または発音が間違っているでも、大体意味が分かるので、あまり気にしていない。まして今ではワープロを使用すれば、大体漢字を使って作文することができる。中級の学習を三ヶ月経て(日本語学習を開始して六ヶ月)、簡単な新聞記事を読めるようになり、特に新聞記事の読解にあたって、漢字が役に立っていた。

一年三ヶ月の日本語学習を終え、大学へ進学した。思えば、学部の一学生のところ、大学の授業やその予習と復習は大変であった。工学部に在籍していたため、数学の勉強は数式で何とかこなせたが、他の自然科学、たとえば、化学や物理等の講義を聴講していたときに、日本語の固有名詞等を聞き取れなかったりしてほとんどチンプンカンプンであった。結局、授業に出るのもイヤになってしまい、期末試験の直前に授業をぬけ出

て出題範囲の情報を入手し、一夜漬の試験勉強(ほとんど丸暗記)をした。さらに、実験を行ったときに、日本人の実験パートナーと日本語の専門用語でのコミュニケーションに苦労した。とりわけ、化学の物質をカタカナ語などで正しく発音出来なかったため、英語や日本語のチャンポンで、化学式での筆談をした。そして、日本語の作文もしばしば悩まされた記憶がある。特に、与えられた読書リストの書籍を読んで、日本語で感想文を纏めようとしたとき、自分の意志を日本語で表現出来なかったり、伝えたい考えを作文すれば、文法が間違ったりして、よく教官に「何を言いたいのか」とか、「君の感想と考えが理解できない、本を読んだのか」というコメントが寄せられた。そうした状況があったにもかかわらず、進級に必要な最低限の単位を取得させて頂いたことは助かった。

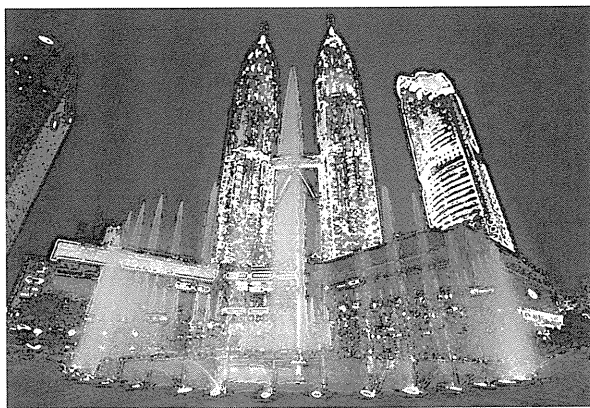
もう一つは日本語学校で学んだ日本語が大学の日常生活、つまり、日本人の学生とのコミュニケーションに大して役に立たなかったことである。語学学校で学んだ日本語とは丁寧な表現の多い標準語であり、日本



人の大学生同士がそれを使わず、知らない単語や文法になっていない台詞を丁々発止して、私のような留学生は全く会話に参加出来なかった。後に、居酒屋でバイトをしていわゆる「普通」の日本語を話せるようになったと同時に、お客との応対を通じて丁寧語を覚えるようになった。さらに、正しい発音を覚えるのに、バイト先の日本人同僚から、「隣の客はよく柿食う客だ」、「竹垣に竹立てかけた」、「あおまきがみ、あかまきがみ、きまきがみ」、「東京特許許可局」、「ぼうずがびょうぶにじょうずにぼうずのえをかいた」等の発音練習をさせられ、日本語の発音も良くなったのである。こうした環境の中、私の日本語も徐々に上達し、学部 of 二年次以降、会話、読み、書き、聞き取りという四つの能力も向上し、大学での勉強においてもあまり困らなくなったのである。

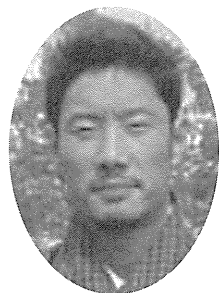
このような「日本語学習体験」を通じて、外国語を上達するには、決して簡単ではないが、与えられた環境の中で正規の学習方法に従いながら、自分で学習方法を見つけ、その言葉を使う機会を増やし、恥ずか

しがらずにゆつくりと学習を進めていくしか方法がないと思う。



# 日本語をたくさん使う機会をつくること

国際産業情報学科四年 チエンダ・ワンチエン



私は二〇〇一年四月から二〇〇二年三月まで麗澤大学の別科（日本語研修課程）で日本語を学び、二〇〇二年四月から国際経済学部国際産業情報学科に入学しました。

来日前、初めての日本を、とても楽しみにしていました。しかし、実際に日本に着いてみて、辛いことが沢山ありました。言葉が通じない、食べ物合わない、友達が出来ないなど、いろいろと考えさせられたことがいっぱいでした。

その辛いときを、乗り越えるためには、頑張って日本語を覚える他なかったのです。来日して数ヶ月は、

日本語を覚えることで必死でした。ひらがなやカタカナはすぐに身に付けることができましたが、自慢できるようなものではありませんでした。宿題はどこなのか、毎回クラスメートに教えてもらいう有様でした。来日して一ヶ月後、ひらがなを「読む」「書く」はまあまあ出来るようになりましたが、「漢字」はなかなか覚えられません。漢字を覚えることが、私の課題でした。また、外国語は「聞く」力を伸ばすために、沢山の時間を要することを実感しました。それに付け加えて、学部で学ぶ内容はビジネスだとか国際経済、日本文学といった半分以上が専門的内容であったため、

理解するのは、とても困難でした。「今日の講義内容はわかりましたか？」と聞かれても、うーん、これは内容以前に日本語を習得しなくては…と痛感する日々が続きました。

私は元々、英語教師という職業に興味があったのですが、実際に日本で日本人に英語を教えるという機会に恵まれ、いろいろなことに気づかされました。教えるのは言葉だけではなく、自分の故郷の文化や風習も大事だと思いました。外国人だから他国の文化や風習等について知識があるだろうと思われ、その国について聞かれることも多く、どう答えたらいいのか困ったことも度々ありました。こんなにも自分の文化や風習のことを私は知らなかったんだ、と驚いたり…：自分の故郷について研究し始めるひとつのきっかけになりました。そして、改めて、外国語はたくさん使う機会を作ることで、それこそが言語習得への近道だと感じました。

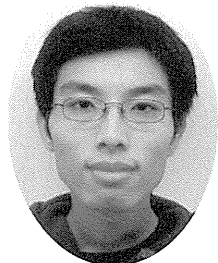
留学は、ひとことで言って、おもしろい。外国語や外国の文化に興味がある人、しっかりとした自分を持

っている人、少々のことを乗り越えられる人には、とても良い、そしてとてもおもしろい人生経験になるのではないのでしょうか。もちろん、順風満帆にはいかないでしょう。勉強すればするほど、なかなか低くならない外国語の壁、なかなか理解しがたい外国の風習、留学生活という狭い世界での友達関係、などなど、「もう、嫌だ！」と思うような気分の際は、もちろんあります。最初のうちはすべてが新鮮で、すべてが珍しく、生活にだんだん慣れてくると、今度は異国の地でちゃんと暮らしているんだという実感が沸いてきます。

日本で出会った人々は、国籍も年齢もまちまちで、本当にバラエティーに富んでいます。それぞれの目的や事情で留学にきていて、価値観も当然まるつきり異っています。日本で見えて、聞いて、触れて感じたことは、私に大きな影響を与えてくれたと思います。日本の生活から得た、あらゆるものが今の私にとって、本当にかけがえのないものであると感じる今日この頃です。家族を含め、留学するにあたってお世話になった全ての人々に感謝しています。

## 習うより慣れろ

国際産業情報学科一年 皆川 武志



生まれはシンガポール、育ちは日本。シンガポール人の母親と日本人の父親を持つ私の家では、日本語と英語が飛び交う生活環境が出来上がっていました。日本人が日本語という国語で両親とコミュニケーションを取るのと同じことです。私には国語が二つありました。

小学校に入ると皆、国語を勉強します。生まれてから両親とのコミュニケーションで国語を身につけ、文法や敬語など、社会的な国語は学校で身につけます。私も小学校時代は日本で過ごしました。小学校から始まる日本語の国語、そしてもう一つの私の国語は、中

学校から外国語として学ぶことになりました。

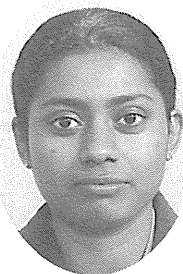
日本の英語教育は外国語として教えていることもあり、私にとつては非常に難しいものでした。もちろん日本で英語を国語のように教えることはできません。生まれてから英語も日本語も話しているという人は珍しいでしょう。しかし、そういう珍しい人にとつては日本の英語教育は難しいものがありました。特に文法は非常に煩わしいものがありました。日本語を話すとき、皆さんは日本語の文法を考えますか？主語から始まり、色々な品詞があり、そして述語で終わる。もちろん倒置法などによって文の形も変わります。しかし、

我々は日本語を話すとき、書くときに、いちいち日本語の文法を考えたりはしません。それは学校で習った国語ではなく普段の生活で身についたものだからです。「習うより慣れろ」という言葉があります。まさにその通りです。なのに中学校、高校ではただ詰め込もうとする勉強ばかりです。確かに英語を勉強する時間も少なく、英語で会話する環境もあまり整っていません。慣れる為の環境がありません。無いなら作ればいいのです。学校側でも外国人講師を呼ぶなどやっています。しかし普通一人しか呼びません。それでは足りません。一人で学校の生徒全てを相手にする事はできません。ならばどうすればいいのでしょうか？自分で環境を作ればいいのです。英会話塾へ通う、洋楽を聴く、歌が好きでよく聞き、歌います。勉学の視点で見れば、聞くことにより聞き取りを、歌うことにより発音を、そして歌詞カードを読むこと、知らぬ単語を調べることとで用語数を増やすことができるでしょう。もし聞き取りに自信があるなら、歌詞を見ずに聞き取ってみま

しょう。鉛筆を持ち紙を置き、CDを流す。歌を聞き右脳を働かせ、聞いた単語を書き左脳を働かせましょう。学校の勉強では左脳しか使っていません。せっかく右と左の脳があるのだから両方をフルに活かしましょう。意外とそれが英語を身につける近道になるかもしれません。精密機械は操作方法を知っているだけでは動かせません。車でも、飛行機でも、スペースシャトルでもそうです。練習しなければなりません。英語も同じだと思っています。学校で英語の操作方法を覚え、家や英会話教室で英語を運転しましょう。まずは自信を持って話しましょう。たとえ文法が少しぐらい間違っている構いません。私達はコンピュータではなく、人間と話をしています。多少間違いがあったとしても「こう言いたいのだろう」と相手を想う心があります。英語を勉強するなら習うのも大切ですが、それと同じくらい英語に慣れましょう。

# 日本語は美しい自分を美しくする

日本語学科二年 パティラナ・ティマリ・タヌンジャ



私は東南アジアのインド洋にある小さな島国スリランカから来ました。来日してちょうど三年になったところです。さてスリランカといったら世界地図のどこにあるかもわからない人の多い日本で私の人生と勉強はどんなものだったでしょう？振り返って見るのも面白い物語です。

私が来日したのは二〇〇二年十月一日でした。スリランカから日本に紅茶を輸入し販売する日本人の農業研究家と出会ったのが、きっかけでした。彼には今も私の保証人になっていただいています。日本に来る前にササカワ（笹川）という人に日本スリランカ技術、

学問、文化交流センターで半年間日本語を勉強しました。しかし英語で。英語でどんな学び方をしたかと言えば、ローマ字で書き、英語で発音し、先生の講義もすべて英語と言う形でした。内容的には、日本語の基本文法、つまり、た形、たり形、ます形、い形容詞、な形容詞などでした。勉強はすごく面白かったですが、日本語で会話をする時どれをどうやって使えばいいかまったくわかりませんでした。それに敬語や丁寧語などギリシヤ語みたいで訳のわからないものでした。しかしコースの後半に入って、日本人の先生がついてから本物の日本語を聞くようになり、日本語ってどれほ

ど難しい言葉なのかよくわかりました。

英語がまったく通じない先生と学生の間にはコミュニケーションが非常に少なく、教室は静かでした。しかしテストで私は九十八点、しかも三人しか九十点を超えていません。証明書はスリランカの日本大使からもらえることになり、胸がどきどきするほどうれしくて、いまだに忘れられません。しかし卒業式の日、私



麗陵祭で日本人の友人と

が日本へ飛ぶことになり証明書は結局もらえませんでした。

来日した私は文京区にある拓殖大学の日本語学校に入ることができ、一年半そこで朝九時から午後四時まで日本語を勉強しました。最初のオリエンテーションが英語であったので、学校での生活はこんなものかなという印象が頭に浮かびました。しかし初日からの授業はすべて日本語で行われ、これではまずいのではないかと感じ始めました。先生方の中で英語が通じる先生は一人しかいらつしやらなかったからです。けれどもその先生が一生懸命生徒たちの質問に対応してくれました。ほかの先生方にも徐々に慣れましたので、なんとなく日本語の通じる人間になりつつありました。

しかし電車や駅での音声で流れているのは全然通じませんでした。あまりにも丁寧すぎたかもしれません。人身事故で一時停車した電車に乗ってずっと待っていたり、あるホームの電車が遅れてくるから違うホームの電車に乗り換えてってという音声がかからなくて、いらいらしながら座っていたり、乗り過ぎたり、様々な

事件がありました。スーパーに行つて買い物をしたところせつけんだと思ひ、柔軟剤を買つてきたり、辛いと思つて買つてみたら甘いアンマンだったり、日本人と話せなくてだふ困りました。

それに最もバリアーだったのはなによりも「漢字」。いくら勉強しても漢字は、難しかった。これは私の足を引つ張つてゐるたつた一つのバリアーでした。しようがない、みんながんばつてゐる、みんな中国人みたいに漢字のできる人じゃないんだと自分で自分を励ましてながら前へ前へ一歩一歩。日本語学校卒業前のスピーチコンテストで、私は日本とスリランカの教育の違いについて話しました。両国のルールの違い、先生の姿、しつけ、怒られた場合など。みんな楽しく聞いて驚いたこともあった。最後に私もびつくり、コンテストの最もユーモアのあつたスピーチで私が優勝しました。感動と先生方への言葉にできないありがたさで心いっぱいでした。うれしい涙とともに。

私はいつか日本語の先生になる。これは日本語の先生の姿を見て毎日見ている夢です。そのため麗澤大学

に入りました。留学生三十六人に日本人三十五人の私たちの学年、小さな世界を大学の中で作つていました。礼儀正しい大学の先輩たちも、優しい教授たちも、入つた日から、入つてよかつたと言ふ気持ちを強めてくれました。日本語学校のとき外国人の友達ばかりでしたが、ここでは日本人の友達もたくさん作れました。日本人は冷たい人種であると言ふ印象も少しずつ消えていきました。今現在、日本語学科二年生で、将来の夢をかなえるために一生懸命勉強しています。大学に入つてからいくつかの事件（アルバイト先の工場で事故に遭う、父の病気で突然帰国）もありましたが、毎日私を励ましてくれる希望、夢、ゴール、将来の日本語の先生へ毎日一歩ずつ踏み出しています。勉強の内容は日々難しくなつてきています。漢字を書くのはそれほどどうまくなひですが読むのは問題ありません。日本人と話すとき、「発音きれいな」とか「日本人よりよく敬語を使うよね」とかほめられたことは数えられないほど。しかし日本人は『本音』を言わない『たてまへ』のほうが多い。だから日本語がうまいと言われて



もあまりうれしくしないで、「まだこれから」「いいえそんなことはないです」とか言つてと、日本語学校の先生が教えてくれました。それは、私たちの日本語の能力をアップするためのひとつのトリックでした。しかし驚いたことに日本で生まれ育ったのでしようと、勝手に思い込む日本人も少なくなかったようです。たてまえかもわかりませんが、なんと言つてもうれしい限りであります。これほど褒められてうれしく感じないのは変でしょうか？

最後に私の日本での学校生活は間違いなく私の人生の生まれ変わりともいえます。これほど豊かで面白い言語がしゃべれて自分のことを誇りに思っています。最初は どうしてこんなに訳のわからない言語を習いはじめたの？ と思つたのも私です。まだ日本語を触り始めているだけ。本格的な勉強はこれからではないかと感じます。しかしなにより外国語を学ぶ楽しさを自分に感じさせるのは大事。それから第一歩、自分にチャレンジ、一言しゃべってみて、日本語は美しい。自分を美しくする。これは私の学んだ日本語です。



# 「国際共通語としての英語教育」プロジェクトに至るまで

外国語学部教授・教務主任 櫻井良樹



麗澤大学外国語学部の教育プロジェクト「国際共通語としての英語教育」が二〇〇五年度の文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」（現代GP）に選定されました。現代GPとは、社会的要請の強い

政策課題に対応する大学等の取り組みの中から、特に優れた教育プロジェクトを選定して財政支援することにより、高等教育を活性化させる事業です。本学部が提案したプロジェクトは、「仕事で英語が使える日本人の育成」という政策課題に応えようとするもので、①多言語・多文化総合カリキュラムの推進、②外国語科目（第二外国語科目）の重視、③クロス留学制度の確

立、④課外における英語使用空間（英語サロン）の充実、⑤学科を超えた留学情報の共有化の五つのサブ・プロジェクトで構成されています。

今回のプロジェクトが選定されるに至るまでには、外国語学部の長い英語教育改善の積み重ねがありまして。直接的には、平成十二年度のカリキュラム改革が、そのスタートでした。それは他学科で開講している科目の履修を認めるとともに、第二外国語としての英語教育を刷新し、またTOEICやTOEFLテストの成績をもって単位を認めたことでした。その後、平成十四年度には共通・教養科目群に英語による授業科目

を設置し、平成十六年度カリキュラム改定では、それらを総合して多言語・多文化総合カリキュラムとし、多言語修得プログラム (Multilingual Expert Program 以下MLEXプログラム) を導入したのです。

これらのカリキュラム改訂は、多言語・多文化社会に対応できる能力の育成をめざしたものです。現在、外国語学部の学生に求められる能力は、グローバル・リテラシーの向上と、世界の多様な文化を相対化して理解し、かつ自国の文化を発信できる能力です。グローバル・リテラシーとしては、国際共通語としての英語の重要性はいうまでもありませんが、英語のグローバル化は必ずしも英語文化による世界の一元化を意味するものではありません。世界の四分の一の国で英語が公用語・準公用語として用いられている現状からすれば、英語は非英語圏でも重要なコミュニケーションの道具です。しかしそれは英語や英米文化の世界標準化ではありません。世界中のそれぞれの地域は、それぞれの文化的背景をもって英語を使っており、それらの国の言語や文化を学び理解することが、コミュニケ

ーション能力を高めることにつながります。

それを実現するための方法が、MLEXプログラムとクロス留学であり、英語を通じて日本語以外の言語を学ぶことは、グローバル化時代の趨勢に合致し、多言語・多文化の共存が可能な社会を築くために貢献できる人材を養成する有効な方策だと考えます。

現在、外国語学部では、卒業要件に他学科・他学部・大学院開講科目の取得を十八〜三十二単位まで認め、特に各学科設置の専門科目のうち入門科目・概説科目については、他学科開設のものも積極的に履修できるように履修案内の記述方法を工夫し方向づけています。またコミュニケーション科目を充実させて英語学科の基礎専門科目として「コミュニケーション入門」・「コミュニケーション概説」を設置し、「商業英語」を「ビジネス英語」へと変更、自学自習システムを取り入れた英語特別演習の設置、「総合科目」というオムニバース授業を導入し、多言語空間・多文化社会における英語による異文化コミュニケーション能力の向上を図っています。またMLEXプログラムは、多言語・多文

化総合カリキュラムの中核をなすものであり、これは各学科の専門演習科目（外国語の演習科目）を他学科の学生が履修できるようにしたものです。具体的には、一年次・二年次の段階で学生が所属する学科の専攻語および外国語科目において一定の成績を修めれば、他学科の専攻科目にも挑戦できるというプログラムです。すなわちドイツ語や中国語学科の学生は英語学科開設の英語の専攻演習科目を、英語学科の学生はドイツ語や中国語学科開設のドイツ語や中国語の専攻演習科目を履修できるのです。

このように外国語学部では、二つ以上の外国語習得を外国語学部に対する社会的ニーズととらえ重視しています。MLEXプログラムとは別に、英語学科以外の学生に対する第二外国語としての英語力増強については、学部の総意によって、教科書の共通化・CALL教材の導入・TOEIC（IP）テストの全員受験（平成十三年度から実施）などの方策を講じて成果をあげています。TOEIC（IP）テストは、入学直後の四月と二年次の終わりに受験させています。学生に

テストでの伸びを実感させるために、授業は二年間TOEIC対策に特化して行われ、成績評価もその点数の伸びが考慮されます。日本の大学生の英語力は、それを専攻としなければ徐々に低下する傾向にあります。が、本学部の英語学科以外の学生でも二年間足らずで平均八十八点の伸びを示しています（英語学科の学生は百三十三点）。

今後拡充に取り組んでいくものが、クロス留学です。これは、たとえば英語学科の学生が、第二外国語（ドイツ語または中国語）を母語とする地域（ドイツまたは台湾）の大学の英語学科に留学し、専攻語である英語の学習を続けながら、同時に現地での生活を通して第二外国語（ドイツ語または中国語）をも学習する留学制度です。ドイツ語学科や中国語学科の学生が英語圏に留学し、専攻語（ドイツ語または中国語）と英語の二言語を習得する道も開かれています。クロス留学の利点は、非英語圏の学生と共に、英語で多様な文化を学ぶことを通じて、より国際共通語としての英語運用能力を身につけられることです。

グローバル化の進展する現代社会においては、ビジネスのさまざまな場面で多様な文化的背景を持つ外国人と「国際共通語としての英語」を使って直接的にコミュニケーションする機会が増加し、それに対応することのできる日本人がますます必要とされるでしょう。ドイツ語学科や中国語学科の卒業生は、実際の仕事では英語を使うことが多いはずですが、しかし私の知っているドイツ語学科や中国語学科の卒業生が話してくれたように、相手の母国語を話すことで人間的な距離感がぐっと縮まり、円滑なコミュニケーションが図れるようになるのです。麗澤大学外国語学部「国際共通語としての英語教育」プロジェクトは、まさにこうした社会的要請に応えるためのプロジェクトです。

以下、ドイツのイエーナ大学にクロス留学してきた二名の感想を掲げておきます。

## 留学を終えて

英語学科三年 本多のぞみ



私は二〇〇四年九月から二〇〇五年九月までドイツのイエーナ大学に留学していました。イエーナ大学の授業は十月半ばから始まるので、それまでの約一ヶ月はドイツでの生活に慣れるためにリーダーズブルクへ研修に行っていました。私は英語学科でドイツに触れる機会といえば、たった週に二回のドイツ語演習だけだったので、ドイツの文化や地理などについてはまったくといっていいほど知識がありませんでした。そのため、ドイツに着いてからの一ヶ月は何もかもが初めてのことばかりで、買い物に行ったり、レストランで食事をしたり、電車に乗ったり、日本にいたときは当たり前だった日常生活を送っているだけで、毎日驚きと発見の連続でした。

十月になって学校が始まると、英語の授業はイエーナの学生と一緒に学べるクラスに参加することができました。イエーナの学生の英語力は非常に高くほとん

どネイティブと変わらないくらいだったので、授業についていくのが大変でした。英語の授業はほとんど英



コンフェデレーションズ・カップ2005・ドイツ大会で(前列右から2番目)

語のみで行われました。日本でやっているような和訳をすることがメインの授業ではなく、英語を使って発表したり、本の内容を考えたりと、英語をツールにする授業を受けることができました。授業中、学生たちは積極的に発言し議論し合うので、日本の授業の雰囲気慣れていた私はただ圧倒されるばかりでした。授業に参加して英語力のなさはもちろんですが、幅広いもの見方に欠けているな、と痛感しました。ヨーロッパは国境が地続きでドイツはそのほぼ真ん中に位置しています。周りを海で囲まれている日本とは異なり周辺の国々からの影響を直接受けやすいため、ドイツの学生が授業中に発言する意見の幅広さはここから来ているのだと思いました。

ドイツでは英語ができることが、よい職業に就くための最低限の要素だそうです。公共の機関で働いている人は土地にもよりますが、大都市ではほとんどの人が外国人には英語で話しかけてきます。確かにドイツ語と英語は語源的に親戚同士なので日本人が英語を学ぶのに比べれば学びやすいかもしれません。

寮は一人暮らしでルームメイトがいなかったのです

が、イエーナで日本語を勉強しているドイツ人の学生に会話パートナーになってもらい、日本とドイツの違いについて話したり、宿題を手伝ってもらったり、映画やカフェに行ったりと楽しい時間をすごすことができました。英語の授業で知り合った学生と一緒に、彼女のいとこの伝統的なティーンエージャーを祝うパーティーに連れて行ってもらいました。ほぼ親族全員の大きなパーティーで、私以外はみんなドイツ人だったので、最初どうしたらいいかわからず、ただおろおろするばかりでした。しかし、皆さんが私の名前を呼んでくださり、国籍に関係なく快く迎え入れてくれたことに非常に感動しました。

このような体験を通してドイツと日本の学生気質の違いや、文化、ドイツ人の温かみに触れ、とても充実した留学生活を送ることができました。できることならばまたドイツに行きたいと思っています。

## ドイツ留学を振り返って

英語学科三年 岩切泰英



ドイツから帰国してから数ヶ月が経ち、まるで一年間ドイツ留学していた事が本当ではないような、現在はそんな気分さえ感じさせる日々を過ごしています。ただ、大学の授業を受けていて明らかに留学以前と変わったところは、英語、ドイツ語がある程度まで話せるようになったことでしょうか。

私が留学していた期間（正確に言えばドイツに滞在していた期間）は、二〇〇四年九月十一日から二〇〇五年九月十日までの丸一年間でした。また、最初の一ヶ月間はレーゲンスブルクという所にある語学学校で勉強していました。そのあとチューリンゲン州のイエーナという町にあるフリードリヒ・シラー・イエーナという大学に二学期間留学しました。

イエーナという町にはいくつか大学寮があり、私はシュレーゲル通りの駅の近くにある寮に住んでいました。私の部屋は一人部屋で、かなり広く、そしてキッ

チン、トイレ、バスが付いていて、近くにはスパー  
が二つほどありました。洗濯するところも寮の建物の  
地下にあり、一通りのものは揃っていたと思います。  
何よりここでは何もかも自分でしなければいけないと  
いう生活を体験できます。私は実家住まいだったため  
この体験は貴重なものとなりました。

また、私は英語学科だったこともあり、一緒に行っ  
た人の中では友達がほとんどいませんでした。しかし、  
そこで住むようになって数人のドイツ語学科の友達が  
できました。そういうこともあって、夜は時々一緒に  
ご飯を食べたりしていました。しかし、基本的な行動  
は全て自分ひとりで行っていました。今思えば結果的  
にそれがドイツ語の能力を伸ばす練習になったのでは  
ないかと思っています。

大学での英語の授業に関しては、どの授業でもドイ  
ツ語もできなくてはいけないという事を痛感したので  
覚えています。大事な知らせや何かは、たとえ英語の  
授業であろうとも基本的にはドイツ語で言われるので  
す。また、レベルも全てドイツ人学生に合わせていま

すからそれについていくのはかなり大変でした。とい  
うよりいくつかの授業ではそれが無理なこともありま  
した。私の実体験上、日本人とドイツ人の英語能力を  
比べてはいけないと思います。こんなことを言うと言  
い訳になるかもしれませんが、ドイツ語という言葉は  
とても英語と近い言語です。文法や単語など、類似し  
ているものがたくさんあります。加えて、ドイツでは  
一般家庭で二十四時間CNNや一部BBCのニュース  
番組はもちろん、MTVなどの娯楽番組まで簡単に見  
る事ができます。やはりアメリカやイギリスの文化は  
かなり人気が高いのです。また、ドイツ人は英語の単  
語を発音する時は必ず「英語読み」になります。日本  
人のように変なカタカナ読みに直したりしません。も  
う根本から日本人とは違うのです。

もし日本人がドイツで英語を効率的に勉強したいの  
であれば、英語を勉強しているドイツ人と互角に渡り  
合える十分な語学力を身につけた人でないときついと  
思います。アメリカの大学においても同じようなこと  
がいえるかもしれませんが、やはり厳しい教授の授業



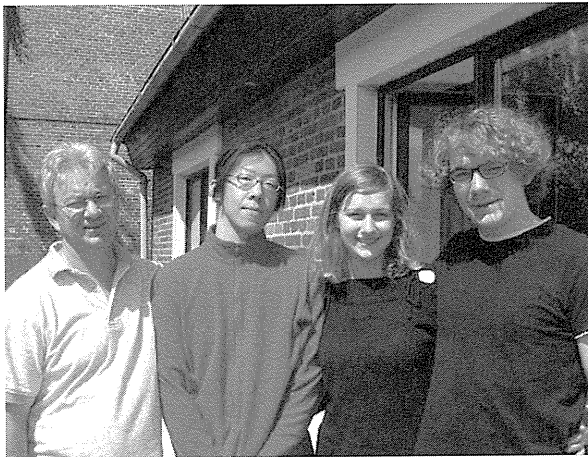
では宿題の量が半端ではありません。それに加えドイツ語の授業もあり、宿題だってもちろんあるのです。

ドイツでは、英語という言語は最も一般的な外国語だと思われます。同時に、彼らにとってみれば習得するのが最も簡単な外国語でもあるのでしよう。ですから道端を歩いてはおじさんにちよつと英語で話しかけてみても、それなりの答えを返してくれます。しかし、英語ができないドイツ人もトルコ系移民なども数多くいます。一概にドイツ国民が皆英語を話せるとは言えないようです。

また、ドイツはヨーロッパのほぼ中心に位置しており、近隣諸国へ旅行に行くことは容易にできます。前々からヨーロッパ各地を見てみたいと思っていた私は、ドイツの近隣諸国はもちろん、北欧やイタリア、イギリスなども見てきました。そのほとんどが一人旅であったため、語学の向上はもちろん、自分自身を成長させる意味でもとても役に立ちました。また機会があればやってみたいと思っています。

いろんな意味で自分を成長させてくれたドイツ留学、

私にとっては一生の財産になりました。



ホームステイ先の家族と

# 難産だった東亜専門学校

名誉教授 池田 裕



麗澤大学の前身、東亜専門学校（旧制）は廣池千英先生によって創立された。それは昭和十七年四月のことであるが、この創立に当たっては廣池千英先生の並々ならぬ御苦心があったと伝えられている。

昭和十七年と言えば、太平洋戦争が始まったばかりの時期で、挙国一致して戦時態勢にのめりこんで行った頃であった。

こういう容易ならぬ時代背景をふまえた頃に文部省の理解が得られず紆余曲折の末にやっと次のような認可を得ることができた。

文部省告示第一五五号

専門学校令に依り左記学校を設置し、昭和十七年四月より開校の件、昭和十七年二月二十五日許可せり

昭和十七年三月十三日

文部大臣 橋田 邦彦

名称 東亜専門学校

この際に臨んでの校長廣池千英先生の気概を煎じつめると、初代塾長、廣池千九郎先生が打ち建てられた教育の根本理念、即ち大義名分の教育と世界平和に活躍し得る人材の養成に向かって邁進する、というもの

であった。それは、財団法人廣池学園の第一回理事会にて廣池千英理事長の左の発言によっても拝察される  
ところである。

「組織と精神の問題であります。精神は永遠不朽のもので、組織は時とともに変化するものであります。ところが人間、形式には支配されがちなものであります。物が大となるに従って創立の時の精神を失いやすくなります。専攻塾もここに東亜専門学校として新しく組織ができ、いよいよ大となりましたが、この父の尽忠至誠の根本精神を永遠に伝えなくてはならないのでありまして、この最高道徳を失いましては単なる学校経営に墮して、他の学校とならんら選ぶところがなくなりまして、東亜専門学校はあくまでこの精神を根本に、すなわち最高道徳をますます体得実行できました結果、おのずから内容が充実して経営組織が大となる必要であります。この意味において不敏ながら私以下職員心を一つにして、教育報国に邁進いたします所存でございます」

かくてその年の四月十七日（水）午前十時大講堂

（現在の廣池千九郎記念講堂）において開校式並びに入学式が挙行されるに至った。

その新生の一人、大澤俊夫氏（元麗澤大学副学長、現廣池学園顧問）は入学式の印象を次のように語っておられる。

「昭和十七年四月、新聞の片隅に出ていた東亜専門学校の募集広告をみて応募した私は、その一期生として入学式に臨んだ。

『修天爵而人爵従之（天爵を修めて人爵これに従ふ）』と大書された扁額の下に立たれた校長先生は「きょうから諸君を紳士として扱う」と告示された。そして「本校には規則というものはない、自己反省か退学か、これが本学創立以来の鉄則だ」と付け加えられた。戦争下の、すでに紳士という言葉などまったく見聞することのできない時代に、それどころか配属将校のサーベルの威圧のもとに教育がすすめられていた時代に、しかもまだ十七、八歳の年若い青年に、このように呼びかけられたそのときの感激を、今も忘れることができない」

ついで、学校の開講科目並びに教授陣を紹介しよう。  
まず学科は、「支那科」と「南洋科」の二学科であった。

商品学・一般簿記・会计学

伊藤忠也

国文学

正富汪洋

法学通論

西沢彬

修身

廣池千英

ドイツ語

大野敏英

憲法・政治学

木檜栄雄

ドイツ語

青木秀男

錬成

一松又治

支那語

西田松樹

錬成

香川景三郎

支那語

中沢信三

錬成

山本恒次

マレー語

松倉栄之

社会学・英語

Ph.D高橋武市

マレー語

山田清隆

東亜経済論

高木友三郎

マレー語

ラディン・スイト

民法

野津務

武道

紀伊末雄

経済原論

山名壽三

武道

対馬丈夫

統制経済論・金融及び国際金融

永山善之助

教錬

陸軍中尉 横地誠

経済地理・南洋地理・マレー語

松浦興祐

教錬

陸軍中尉 高柳次男

歴史

藤原音松

以上

英語

大塚善治郎

論理・心理・哲学概論

池上周二

右のような教科目とスタッフで東亜専門学校はスタートした。なお当初から「研究科」が設置されていた。

商業数学

池田貫也

経済史・南洋経済事情

梶原清

学則によると、

## 第七章 研究科

第三十七条 研究科の入学は本校の課程をおえたる者又は之と同等以上の学力がありと校長認めたる志願者につき学力考査の上入学許可す（以下略）

第三十八条 研究科の学科目左の如し

（一）内は毎週の授業時数

東亜金融論（三） 東亜貿易論（二）

東亜経済地理（三） 南洋経済事情（三）

東亜経済政策（二） 殖民政策（二）

国際法（二） 東洋思想史（二）

支那語（四） マレー語（四）

武道（三） 教練（二）

錬成（三）

外に特別講義、年八十時間行う

ついで「校友会」活動は、戦時事情に鑑み、これを解消し、まったくその性格を異にした「学校報国団」というのがあった。これは現在の校友会に当る。その校友会の「部」に当るのを「班」といい、これが約二

十あった。

その中からいくつかの班を紹介する。

### 「軍事研究班」

伊藤忠也教授が班長。そこへ先輩の高柳次男陸軍中尉を教官としてお迎えした。時節柄人気のある班であったろう。というのは、当時すでに「校門から営門へ」というスローガンが巷に流れていた。

### 「弁論班」

班長は、高橋武市教授。第一回校内弁論大会は十一月十四日（土）大講堂にて午後六時より行なわれている。

### 「音楽班」

備品としては、レコード約三十五枚があつて、その内容はバロック音楽よりシヨパンの浪漫派音楽などを集めてあつた。そして毎土曜日の晩、レコード・コンサートを開いていた。軍事色がみなぎっていた当時に

も「詩<sup>うた</sup>ごころ」は失われていなかったようである。

#### 「剣道班」

班員は四十数名。十二月八日武徳会松戸支所主催の大詔奉載記念武道大会に出場。会場は松戸市北部国民学校。戦果は左のとおり。

無段者高点試合 一位 八田雅夫 二位 柳敏夫

三位 田島政芳（元廣池学園監事）

有段者高点試合 四位 沼田勝茂（初代麗澤瑞浪高

等学校主事）

珍しいところでは、「養豚班」というのがあった。班員十二名。昭和十七年六月に二頭の豚がきた。詳細は左のとおり。

種牝豚 ヨークシャー種 一頭

出生 昭和十七年四月二十五日

目方 二十三貫

肉豚 一頭 出生 牝豚に同じ

目方 二十二貫

飼料残飯 一日バケツ一杯 味噌汁のだしがら

米のとぎ汁

飼料は毎朝、食事前に班員三名が交替で食堂から運んでいた。

これらの組織の中から麗澤教育の真髓はどのようにして培<sup>つちか</sup>われ、発展していったかは、次号に詳しく述べたいと思う。



武道館（後の第一体育館、現在はキャンパスプラザ前の中央広場）に揃った12号舎の一同。

習志野練兵場での軍事訓練。昭和18年。専攻塾にはなかった軍事訓練は、専門学校になってから始まった。



6期生の運動会の仮装行列の一組。昭和17年。（前列中央の右から長谷川、木曾栄雄、香川景三郎先生）

生徒の奉仕による建物の基礎工事。（昭和18年頃）



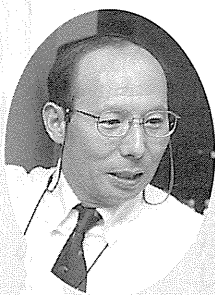
# ROCK 地域と大学――

## 新たな麗澤の挑戦

国際経済学部教授

麗澤オープンカレッジ長

成相修



はじめに

平成十八年度から麗澤大学の教育に新たな一頁が加わる。生涯教育プラザの完成がそのきっかけである。学校法人廣池学園の向かい側にある旧住宅都市整備公団保有用地の買い取りが決まり、そこに建設される新たな建物に、大学院教育、研究センターなどの機能を移管することが決まった。その際、この土地の性格上、地域住民に対するさまざまなサービスの提供が義務付けられた。これを機に、本学に地域住民を対象とするオープンカレッジを本格的に開設する準備に入った。麗澤オープンカレッジと命名

し、略称をROCK (Reitaku Open Collage in Kashiwaの頭文字をとって命名) とした。オープンカレッジの開設は、大学にとっても新たな展開とビジネスモデルの構築の上で、絶好のタイミングであった。少子化に伴って高校卒業生の数が減少傾向を続け、高校卒業生にのみ依存した大学経営には不確実性が伴う。社会人、退職者、主婦、子供たちなどの地域住民を対象とする教育機会を作ること、大学の経営の視点のみならず、麗澤教育を広める機会にもなる。さらに、大学が持つ知的資産を広く活用する絶好の場ともなる。大学が地域との連携を強めるこ



との必要性については、平成十七年六月、文部科学省が中央教育審議会に諮問した「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について」でも示されている。その中で「特に、地域における学習活動の場としての役割を果たしている公民館、図書館、博物館等の社会教育施設や大学、専修学校等が、地域住民のニーズを把握した上で、各地域において特色ある活動を展開していくことにより、新しい時代にふさわしいものになっていくことが期待されております」と説明されている。団塊の世代が定年を迎えるときが到来したいま、ROCKの市場は拡大し、内容についても高度なものが求められるようになっていく。それらに十分応える質と量を備えたROCKにしていかなければならない。

### 一、ROCKの事業展開

本学は、従来から公開講座として「コミュニケーション・カレッジ」、「文化講演会」などを実施して、地域の皆さんとの知的交流を行ってきた。今回のROCKは、従来の事業を引き継ぐのに止まらず、より

積極的に展開することを目指している。全体構想は大きく分けると、

- ① 本学で開設する講義、講演会の開設
  - ② 地方公共団体などの他機関からの研修受託
  - ③ 講師派遣や会場提供の受託
- の三つである。現在は、中核事業である講座の開設内容の詰めを最優先に検討を進めている。その内容を、以下で三つに区分してみる。

### 二、講座の開設など

#### (1) 講座の開設

語学、文化・教養、経済・経営、コンピュータ・情報、資格取得、スポーツ・健康、生き方、先端領域、国際政治・国際関係、教育の分野で、計百程度の講座を開講する。別紙のように百の講座の開講が予定されている。本学が持つ知的資産の優位性を発揮するとともに、参加者の関心に即した講義を創造していきたい。想定される参加者はシニアが中心になると思われるが、先に見たように、団塊の世代の労働市場からの退出が始まる二〇〇七年以降は、

「隠居的」なお勉強というよりも、更なる知的刺激や資格取得などに挑戦する人がでてくることが期待される。こうしたわれわれの市場の変化にも敏感に対応していく必要がある。人口高齢化社会における課題のひとつに、心身ともに健康で生きがいを持って生活できる高齢者の増大が重要である。このためにもシニア世代に対して弛まぬ知的刺激を与える場を確保することは重要である。さらに、大学教育に与つての「予備軍」である子供たちに対して、社会の仕組み、仕事の面白さなどを教えていくことは、将来の「ニート」化を防ぐ効果もある。

### (2) 特別講演会の開催

従来の文化講演会を引き継ぐもので、外部の著名講師を招聘することで、大学の知名度向上に寄与することを目標として実施する。これまでの方式では、年六回開催で、年間通しの申し込みだったため、広報機会が年一回に限られていたことが問題とされてきた。そのため、年間通しを半年通しに改め、半期四回で、年間二回の広報機会を確保できるようにす

る。これによって、四回完結型にすることによって、より焦点を絞ったテーマについて一流の外部講師、本学の講師陣を配して、刺激的な知的講演会を展開できる。平成十八年度前半のテーマは「日本の教育が危ない」であり、櫻井よしこさん、藤原正彦お茶の水女子大学教授（数学者、新潮社刊『国家の品格』が大きな反響を呼んでいる）のお二人を外部講師としてお迎えし、本学松本健一国際経済学部教授、及び中山理外国語学部長を学内講師とする日程が組まれている。

### (3) スポットの講演会等の開催

地元地域に対する貢献を具体的に実現するために、主として本学専任教員による講演会を開催し、無料で地域住民に提供することを検討している。

### 三、他団体の研修受託

地方自治体や民間企業における職員・社員研修などのコーディネートや実施の請負を受託する。すでに、柏市と松戸市とは協議の機会を設けたが、地方自治体は財政が苦しいことから、新たに費用を発生

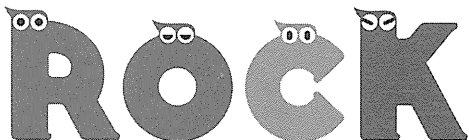
する研修への取り組みは期待出来ない可能性が高い。そのため、今後は民間企業への働きかけも行っていく必要がある。この点について、すでに柏市と松戸市の市幹部との協議を行った。地方分権の傾向が強まる中で、市職員の間には、経済・財政・情報などに関する専門性を深めたいとする傾向が強まっている。こうした需要に応える研修プログラムを組んで提案することも期待されている。さらに、中・高の英語教員の語学教育力を深める種には、平成十八年度から開設の本学大学院英語教育専攻科は、教員の資質向上のためには大きな期待がなされている。

#### 四、講師派遣や会場提供の受託

講師派遣の依頼は従来から官民を問わず多数あったが、教員が個人で受託する形態で引き受け、大学は紹介するに止まっていた。それを、より積極的に大学として受託する形態に移行していくことを予定している。また、会場提供についても、従来よりも積極的な展開を検討していきたい。

#### おわりに

ROCKの試みが成功するた  
めには、本学の教職員の丸と  
なった協力が不可欠である。ま  
た、本学が持つ対外的なネット  
ワークの質の向上が求められる。  
さらに、大学のみならず高校の  
教員も今後はROCKのプログ  
ラムに協力していただくように  
したい。麗澤大学周辺の地域住  
民の知的レベルは高い。こうし  
た質の高い「消費者」に対して、  
ROCKが何を提供し、どのよ  
うな評価を受けるかは、今後の  
われわれの教育の本質にかかわ  
る問題である。ROCKへの新  
たな船出が、麗澤教育の成果、  
評価、課題を考え直す好機にな  
ることを述べて拙稿を閉じる。



麗澤オープンカレッジ

# ROCK生涯学習講座(通年・前期)一覽表

2006年2月現在

講座名	講師	所属
<b>語学</b>		
ベーシック英会話 月・水コース	ヒューバー デボラ	ROCK講師
ステップアップ英会話	ヒューバー デボラ	ROCK講師
ベーシック リスニング	ヒューバー デボラ	ROCK講師
ステップアップ リスニング	ヒューバー デボラ	ROCK講師
トラベル イングリッシュ 月・土コース	ヒューバー デボラ	ROCK講師
Let's Speak English Together!	ラフ ビーター	麗澤大学講師
Learn More English Words!	ラフ ビーター	麗澤大学講師
Basic Communication!	アルノー クロード	麗澤大学講師
ENGLISHES	アルノー クロード	麗澤大学講師
インターナショナル・コミュニケーション	ジェイコップス マイケル	ROCK講師
英字新聞を読む	ジェイコップス マイケル	ROCK講師
英文記事から読む「今の世界と日本」	成相 修	麗澤大学教授
スポーツ英語より学ぶ生きた英語表現	市川 功二	麗澤大学講師
ホームドラマで見るアメリカ文化	彦坂 三重子	ROCK講師
やり直す英文法(初級)木・土コース	佐藤 憲一	ROCK講師
やり直す英文法(中級)木・土コース	佐藤 憲一	ROCK講師
「ハーリポッター」を原書で読む	中道 嘉彦	麗澤大学教授
ドイツ語(入門)と日本語	石村 喬	麗澤大学教授
初級ドイツ語	奥野 保明	麗澤大学教授
ドイツ語文法(入門)	草本 晶	麗澤大学講師
ドイツ語会話(初級)	ラング クラウディア	麗澤大学講師
ドイツ語会話(中級)	ラング クラウディア	麗澤大学講師
ドイツ語で電子メール	笹原 健	麗澤大学講師
中国語会話(中級I)	胡 兵	ROCK講師
中国語会話(中級II)	胡 兵	ROCK講師
中国語(入門)木・土コース	張 継英	麗澤大学講師
コミュニケーション中国語I(初級から中級へ)	張 継英	麗澤大学講師
コミュニケーション中国語II(中級)	張 継英	麗澤大学講師
コミュニケーション中国語(上級)	張 継英	麗澤大学講師
中国語作文	張 継英	麗澤大学講師
中国語文学作品鑑賞	張 継英	麗澤大学講師
中国語で電子メール	陳 君慧	麗澤大学講師
韓国語(入門)土コース	丁 仁京	ROCK講師
韓国語(入門)木コース	金 牡蘭	ROCK講師
韓国語(初級)	金 牡蘭	ROCK講師
韓国語で話そう! 木・土コース	金 牡蘭	ROCK講師
韓国語(中級I)	李 允希	麗澤大学講師
韓国語(中級II)	李 允希	麗澤大学講師
旅行にも役立つ「タイ語入門」	斉藤 スワニー	麗澤大学講師
フィンランド語(入門～初級)	千葉 庄寿	麗澤大学助教授
<b>文化・教養</b>		
万葉集の講説と鑑賞	池田 裕	麗澤大学名誉教授
源氏物語講読・評釈I	池田 裕	麗澤大学名誉教授
源氏物語講読・評釈II	池田 裕	麗澤大学名誉教授
かな書道(初級) 木・土コース	田頭 昭子	ROCK講師/全日本書道教育協会審査員 読売書法会幹事
かな書道(中級) 木・土コース	田頭 昭子	ROCK講師/全日本書道教育協会審査員 読売書法会幹事
かな書道(上級) 木・土コース	田頭 昭子	ROCK講師/全日本書道教育協会審査員 読売書法会幹事
韓国の文化と社会	李 允希	麗澤大学講師
古文書を読む(入門)	高橋 美由紀	麗澤大学講師
仏教と日本人	保坂 俊司	麗澤大学教授
宗教から世界をよむ	保坂 俊司	麗澤大学教授
名作を読む会	望月 幸義	麗澤大学教授
ミュージアムに学ぶ韓国の歴史I(入門編)	大井 剛	麗澤大学講師
ミュージアムに学ぶ韓国の歴史II(熟達編)	大井 剛	麗澤大学講師

講座名	講師	所属
<b>経済・経営</b>		
早分かり日本経済のいま	成相 修	麗澤大学教授
はじめて学ぶ経済学	下田 健人	麗澤大学教授
日経新聞を読もう!	下田 健人	麗澤大学教授
はじめての資産運用	清水 千弘 中村 哲也	麗澤大学助教授 ミレア・リアルエステイトリスク・マネジメント(株) 取締役企画総務部長
	岡村 隆行	ミレア・リアルエステイトリスク・マネジメント(株) 企画総務部フェイス・プレジデント
お金儲けを考える	望月 幸義	麗澤大学教授
社会人のための金融経済教室	島村 高嘉	麗澤大学客員教授
私たちをとり巻く経済問題	鈴木 恒一	教育NPO e-Drive理事
戦後歴代宰相	清水 幹夫	社団法人アジア調査会常任顧問
ジャーナリズム論	清水 幹夫	社団法人アジア調査会常任顧問
<b>コンピュータ・情報</b>		
暮らしに生かすインターネット	ITなのはな	市民ボランティア団体
ペイントで絵を描こう	柏ITかたくりの会	市民ボランティア団体
ワードで「簡単なお知らせ」と「便箋」を作ろう	柏ITかかしの会	市民ボランティア団体
Wordで作ろう初めてのホームページ	ITクラブひいふゅみい	市民ボランティア団体
インターネットと電子メール講座	柏パソコン探検隊	市民ボランティア団体
<b>資格取得</b>		
500点を目指す人のためのTOEIC対策講座	中道 嘉彦	麗澤大学教授
<b>スポーツ・健康</b>		
ゴルフ教室A/B/C	鏡 利夫	麗澤大学講師
ダンベル健康体操A/B	岩田 道子	麗澤大学講師/ダンベル健康体操総合指導士
ストレッチ&ダイエットエクササイズ	豊嶋 建広 井下 佳織	麗澤大学教授 ROCK講師/アスレティックトレーナー
正宗健身 太極拳(初・中級)(上級)	三代 正廣	日本太極拳友会会長
剛柔流健康呼吸法	山口 剛史	国際空手道剛柔会会長
<b>生き方</b>		
ライフ・スタイルに関する国際比較研究	大場 裕之	麗澤大学教授
老年学入門講座 ー社会貢献力の育成のためにー	水野 治太郎	麗澤大学教授
考え方を変える	望月 幸義	麗澤大学教授
生活に生かせるカウンセリング(入門) ※	御法川 誠次郎	モラロジー研究所相談センター相談員
モラロジー人間学講座(入門)ー心がつくる人生ー ※	田中 総司 中野 春雄	モラロジー研究所社会教育講師 モラロジー研究所社会教育講師
日本の先人に学ぶセミナー ※	上原 卓	自由主義史観研究会理事
<b>先端領域</b>		
科学技術の歴史と知的財産法制	山田 恒夫	大東文化大学法科大学院講師
<b>国際政治・国際関係</b>		
ビジネスマン現代中国理解講座	三瀨 正道	麗澤大学教授
朝鮮半島の明日を占う	伊 敏鎬	麗澤大学講師
超大国アメリカと世界 ー国の成り立ち、国内統一の理念とみちのりー	曾我 陽三	麗澤大学経済社会総合研究センター プロジェクトアドバイザー
台湾から見た中国	齋藤 齊	ROCK講師
民間の国際協力のすすめ ータイ北部チェンライ県とラオスの例ー	竹原 茂	麗澤大学教授
<b>教育</b>		
教育とカウンセリング	水野 修次郎	麗澤大学教授

※※がついている講座は、モラロジー研究所企画講座です。

## 英語劇グループ七十周年

### ―更なる向上目指し奮闘せよ―

学長室主任 中野 栄一



麗澤大学英語劇グループは、今年（平成十七年）七十周年を迎えました。英語劇グループは、麗澤大学の前身である道徳科学専攻塾で昭和十（一九三五）年に行われた英語によるスピーチコンテストをルーツとしており、以来、様々な活動がなされてきました。

七十周年を記念して、五月七日・八日には学内小劇場で卒業生公演としてリチャード・シェリダンの『悪口学校』が上演されました。英語劇グループ顧問（演出家）であるマーウィン・トリキアン助教授演出の下、個性たっぷりな卒業生と現役学生の熱演は観

客を大いに沸かせました。

また、七日夜にれいたくキャンパス・プラザで開催された記念パーティーには、前英語劇グループ顧問（演出家）ギャビン・バントック先生ご夫妻、かつて英語劇に参加した卒業生と現役英語劇メンバーが計八十名以上集い、盛大に行われました。私も英語劇グループOBの一人として、昔を懐かしみ、今の活動を心強く感じながら参加させていただきました。

この英語劇グループの七十年は、活動に携わってこられた数多くの諸先生方、諸先輩方、そして後輩

諸君の一人ひとりがその歴史を作ってきました。その一人ひとりの英語劇に対する愛情や想いは計りしれないものであると思います。

今回、こうして「英語劇グループ七十周年」と題して原稿を書く機会をいただいておりますが、私自身がその七十年の活動全てを語ることは到底できません。しかしながら、英語劇グループを愛した（愛している）OBの一人として、その活動を通して感じたことをお伝えできればと思います。

なお、英語劇グループの歴史や活動については、英語劇グループのHPをご覧くださいだけだと思います。<http://www.cs.reiaku-u.ac.jp/RUEDG/>

私が英語劇グループに所属したのは、大学に入学した昭和五九（一九八四）年のことです。麗澤瑞浪高校に在学中、英語劇グループに所属していた兄から英語劇のことを聞き、英語による演劇活動に非常に関心を持ちました。麗澤大学に進学することを決め、外国語学部イギリス語学科（当時）に入学をしました。以来、大学の四年間、そして卒業後も数回

の卒業生公演での活動などに参加し、早いもので二十一年の年月が過ぎました。

この二十一年の間、私の心の支えであったのは、劇グループのモットーである「STRIVE TO DO BETTER」（更なる向上目指し奮闘せよ）という言葉です。これは、決して自分自身のことを向上させようと努力することだけではありません。グループとして一つのことを創りあげる時、この言葉がさらに重要になってきます。

劇の公演は決して一人で行うことは出来ません。脚本があり、演出家があります。舞台で役を演じる人、裏方として照明、音響を担当する人がいます。さらには、衣装、大道具、小道具も必要です。そして、演じる舞台があり、それを観にきてくださる観客がいます。

また、グループの運営を行うには、全体の運営をまとめる委員、演出家を補助する人、メンバーをまとめる人、衣装、大道具、小道具をまとめる人、広報を担当する人、その他、挙げれば数え切れないほ

どの役割があります。英語劇グループでは、それらの全てをメンバーがその役割を担っているのです。当然、衝突もあります。上手くないことやトラブルもあります。その際に、グループとして一つの目的（最高の公演をすることだけではなく、それぞれが役割を全うすること）に向かって、所属するメンバーがお互いに協力し、助け合い、励ましあいながらその壁を一つひとつ乗り越えていくのです。

英語劇グループの活動の中で私が最も印象に残っているものは、大学三年生の時に主公演として行われた『ペリクリーズ』（一九八六年）での活動です。

このプロダクションでは、グループ全体の運営を行う委員（コミッティー・メンバー）の一人としての役割、演出家補助としての役割を担いながら、メインアクターを務めさせていただきました。自分なりの責任感を持ちながらその全ての役割をこなそうとするあまり、自分自身の中で様々な歪みが生じてきました。その歪みを抱えながら活動を続けていくに従って、段々と周りが見えなくなり、全てに時間

が足りないと感じ、独りよがりの行動をとるようになっていったのです。

あまりの状況に見かねたのでしよう。共に一年生の時からグループで活動してきた友人から「いい加減にしなよ、一人でやっているんじゃないのだから！」と強い口調で言われたのです。その言葉を聞いた時には反発心を覚えました。しかし、その夜、寝床につきながら言われた言葉を頭の中で繰り返ししているうちに、温かさを感じてきたのです。「自分がやっている」という意識から「自分一人だけがやっているわけではない」へ、「自分がやっているのではない」へ、「自分一人だけがやろうとしているのではない」へ、何か急に肩の力が抜けたように感じました。良いものを創り上げたいと思っていたのは、自分一人だけではなく、同じ目標を持った多くの仲間がいたのである。

無事、主公演が終了し一年の活動が終わりました。次年度のプロダクションに向けて主なメンバーへの引き継ぎが行われました。後輩へ伝えた言葉は、「メ



ンバー全員で良いものを作って欲しい。何かあった時は、先生、先輩、同級生、後輩という何ものにも変えがたい仲間がいることを忘れないで欲しい」この言葉を言えることができた友人に感謝しています。

私が友人の言葉を通して感じたことは、何も特別なことではないのかもしれませんが、ややもすると、日々の生活の中でも、仕事をしていく上でも、家庭の中でも、「自分一人が(で)」と思いつぎる場面が数多くあると思います。しかし、どんな時でも、必ず周りに同じ目標に向かう仲間がいて、先輩・同僚・後輩がいて、そして家族がいることを忘れてはいけません。これは決して周りに甘えるということではありません。自分の役割をしっかりと担いながら、周りがいてくれることに感謝しながら、一歩一歩目標に向かって進んでいくことなのです。そして、自らが更に向上していけば良いのです。

英語劇グループは、それに携わってこられた数多くの方々の歩みが七十年という歴史をつくってきま

した。一九八二年に“STRIVE TO DO BETTER”は劇グループのモットーとして掲げられました。それ以前にも同じ精神が流れていたと感じます。そして、今も連綿と受け継がれています。英語劇グループが、これからも八十年、九十年、百年と更なる向上を目指して、新たな歴史を刻んでいかれることを祈念いたします。

# 麗澤の教えと体育会系部活動

外国語学部助教授 平澤 元章



大学で学ぶことはたくさんある。なんといつても学習活動が中心であるが、そのほかにも自分を高める方法はいくつもあると思う。各種研究会、サークル活動、ボランティア活動、部活動、考えようによってはアルバイトなどからも学ぶことはできる。その中で私は体育会系部活動にひとつの価値を見いだしている。

「体育会系」というと縦割り社会の封建的な雰囲気から、「体格がよくて運動好きな人」「厳しい」「規則に縛られて自由がきかない」などを想像する人が多いかもしれない。受け止め方は人それぞれである

が、私が本学に来たころこんなことを言われた。「運動選手は汗くさくて汚い。授業にでないで単位だけくれという」。私はこの言葉に愕然としてしまった。あまりにもひどい誤解と、スポーツ活動に対する無理解にびっくりしたものである。私は経験上、運動選手は決してそのような面は持ち合わせていないと感じている。一部にはそういうところもあるかもしれないが、私の知る限り、清潔、爽やか、礼儀正しく、勉強とも両立できる好青年が多い。自己抑制や自己犠牲の経験から協調性も身につけており、集団のリーダーになれる部分にもつながっている。しか

しそれは体育会系部活動を志す人間にはじめから備わっているわけではない。目的をひとつにした集団が向上する過程において、取り組んだことやそのための訓練などにより後天的に獲得されたものである。私はその過程における葛藤や自己ジレンマの経験、そして結果としての精神的成長に意味があると思っている。

大学卒に限ったことではないが、私は社会へ出たときどれだけ役に立てる人間になっているかということが重要だと思っている。もう少しいうならば、勤めた会社に貢献できる人間になっていなければならぬ。基本は知識であり、それについてはどれだけ学力が身についたかが大きくものをいうと思うが、社会生活は学力だけでは語れないものがある。将来を見通して、この人物なら必ずやってくれるであろうという精神的基盤を感じさせるものが欲しい。そこをひとつの目標にしたときに、大学生活をどのように過ごすかによって結果は変わってくると思う。その実践活動として体育会系部活動はひとつの自己

鍛錬の場であるということがいえる。

そして体育会系部活動である限り、スポーツ活動、特に競技会で結果を出したいという願いがあろう。そのためにはトレーニングが必要になってくる。いいトレーニングをするためにはその環境を整えなければならぬ。特に精神的部分が充実していないと目的達成は無理である。

例をあげてみよう。競技を続けていくには多くの人の支えが必要である。家族、学校の先生、友達、地域の人などの温かいまなざしと支援がなければやっていけない。競技を続けていけばそのことは理解できるようになってくる。すると選手は自然に感謝の気持ち芽生えてきて、お礼、挨拶という形で表現するようになる（スポーツマンが礼儀正しいといわれる理由はここにある）。その行為に対して周囲はさらに応援しようという気持ちが出てくる。このように選手の気の持ち方によって、取り組む環境、特に精神面における人的環境は変えていくことができる。さらに成長していくとチームや仲間への接する

態度に変化が出て、思いやりの気持ちや謙虚さも身についてくる。それがチーム全体に浸透してくると、居心地がよくなってきてさらに仲間のために尽くそうという感情が芽生えてくる。この雰囲気を選手一人ひとりに出てくると、チームワークが整う手がかりとなる。

私はチームワークとは各自が自分の役割を果たすことだと思っている。自分の役割を果たすためには、自分自身が主体的な行動をとっていくことが必要となる。その中身は、厳しさ、自己コントロール、思いやり、社会性などじつに多種多様なことが含まれる。それらを包括的に表現すると、謙虚な姿勢と自己責任の遂行ということになるような気がする。これがでてくればそれは一つの完成である。各自がそのような気持ちを持って取り組んでいくとすばらしいチームになる。この経験は自分の中で充実感として残り、社会へ出たときにも応用されるようになる。

現代は科学技術が進歩し、快適で便利な生活が可能となってきた。しかしどのような場面においても

最後にものをいうのは人の力である。機械が多くの仕事をこなす中で事象に感情を入れることができるのは、地球上で唯一、人間だけである。スポーツでも仕事でもその活動が評価され、確かな実績を上げていくには人の心が大切になる。企業人になったことのない私に会社の利益云々は分からないが、スポーツに関することについては多少の知識がある。その部分において、人が心を清く正しく持つことは結果に結びついていると思ってきた。よい結果を求めするために、あるいは仮に結果が出なくとも活動を充実させるために、人の心、精神的な部分を鍛えることはとても意味がある。

私はスポーツ指導者として、指導の中心を技術・体力と精神面の二つを柱にして、両者を融合させるような方策を探ってきた。その中で精神面の指導として自分が強く意識していることに麗澤の教えがある。私は麗澤瑞浪高校を卒業している。高校時代にはその教えの意味するところはなかなか理解できなかったが、教員生活をするうちに、その内容がいかに

に優れており立派であるかということがおぼろげながらに分かってきた。私の指導者としてのポリシーは麗澤の教えを根幹にしている。高校教員の時にいつも生徒に言い続けたことは、麗澤の教えと大局的な部分で一致している。なぜかというところ、自分なりに真理を追究していくと自然にそうなっていくということと、麗澤の教えに従って指導していくことが、一番結果につながるということが分かってきたからである。

今までに述べてきた中に、挨拶、礼儀、思いやり、謙虚な心、自己責任の遂行などの言葉が出てきた。これは体育会系部活動の指導におけるキーワードである。麗澤の教えには、高い品性、恩人への感謝、義務先行と責任の全うなどがあるが、キーワードにあげたことは、それぞれが麗澤の教えにつながっていると思っている。ということは麗澤の教えにしたがっていけば、体育会系部活動でポイントになることは押さえられるということでもある。このことが実践できたら、より充実した活動につながり、ひい

ては一人ひとりを幸せにする礎いしずえになるものと信じている。



第82回箱根駅伝予選会に初めて出場した陸上競技部

# 麗陵祭から地域へ、世界へ

第四十二代学友会麗陵祭実行委員会委員長

英語学科三年

増田 昌義



今年も麗陵祭が終わり振り返ると、多くのことを学び、たくさんの人たちとの出会いがあったことを思い出します。委員長として活動する中で百九十九

名のスタッフ、OB・OGの皆様、参加団体、協賛企業、学生課をはじめとする大学職員の方々、毎年麗陵祭実行委員会が参加している手賀沼ジャズフェスティバルスタッフの方々と関わりを持つ事ができました。

委員長としての一年間は、麗陵祭が多くの人たちに支えられていることを実感する毎日でした。今回は、多くの人の温かい支援があったこと、麗陵祭活

動を通して気づいた麗澤の魅力、そして麗陵祭を紹介したいと思います。

## ○多くの人の支え

仕事をしていく中で一番身近で応援し、支えて下さったのは学生課の方々でした。学生課は実行委員会だけでなく各部活やサークルをはじめとする学生一人ひとりの事を親身に考えて下さいます。学生課のスローガン『大学一の学生応援団』は正にその通りで、私自身が仕事で辛くなった時も、「お前は一人じゃない、みんな応援してるから頑張れ！」と温かい声をかけて下さいました。辛かった気持ちには温か

く優しい一言で晴れ、嬉し涙が出そうになるのをこらえました。麗澤は小さな大学だから、そのぶん学生と教職員との距離が近く、アットホームな雰囲気根付いているとよく耳にしますが、三年間麗澤大学で過ごして感じたのは、ただ小さい大学だから教職員との距離が近いわけではなく、温かく見守り、支えて下さるみなさんがいることが麗澤大学の魅力になっているのだということでした。

また、母親も大きな支えでした。母はどんな時も体を気づかってくれました。夜遅く帰った時も夕飯の支度がしてあり、寒くなれば暖かい食事が待っていました。麗澤祭当日の朝には、「雨降らないといいね。風邪ひかないように頑張つてね」というメールを送ってくれました。短い文章ですが、自分のことを心配してくれていることが本当に嬉しかったです。私は一人暮らしをしていますが、仕事をする中で親のありがたみを実感しました。このことは私だけではなく、他の多くのスタッフも感じているようです。私にとっては親の存在の大きさを感ずる一年で

もありました。

#### ○麗澤のいいところ

今年はいよいよそう学生と職員とが歩み寄り、職員が企画したマナー向上キャンペーンと学生会本部によるクリーンキャンペーンや麗澤祭実行委員会が実施している学内清掃を融合させた学内の美化活動を行いました。今年度の麗澤祭テーマが『美心伝心』ということで、麗澤祭実行委員会でも毎週金曜日の放課後に校内のごみ拾いをしていました。学内清掃を始めたきっかけは麗澤祭テーマの宣伝だけではなく、麗澤祭でごみのリサイクルを担当していたある二年生の「麗澤祭だけではなく日頃からリサイクル活動をアピールし、自分たちの大学を自分たちの手で綺麗にしたい」という強い思いがありました。その思いを受け、麗澤祭の活動を本番の三日間だけに止めるのではなく、普段から二百名近いスタッフの力を大学のために発揮できる機会があってもよいのではないかと考え、学内清掃を始めました。これが職員との合同キャンペーンにまで発展し、学生と

職員との距離がより近くなったことは本当によいことだと思えます。実際に参加した学生は、教室のごみの多さや学生のマナーの悪さに驚いていました。多くの学生は最近の麗大生のマナーが悪いと感じているようです。ごみを拾う人がいる大学から、ごみを拾う必要の無い大学になればよいと願う学生はたくさんいました。今回の合同キャンペーンを通じて感じたことは、誰にでも大学のためにできることが身の回りにもたくさんあるということです。しかし、キャンペーンに参加にした学生・職員が少なかったので、今後今回のような合同企画が増え、参加する学生・職員も増えて麗大生のマナー向上と麗澤大学の特色であるアットホームな雰囲気をもっともっとな強くなって欲しいと思います。そして、ますます学生と職員が一体となった大学になればよいと思います。

#### ○麗陵祭から地域へ

麗陵祭実行委員会には活動の柱の一つに、地域貢献があります。具体的には、「近隣の方々との交流↓

麗澤大学の知名度の向上↓学生数の増加↓大学の質向上↓麗澤が有名になることで地域の方々に喜んで頂ける」といったもので、今年新たに方針の一つとしたものです。そこでフリーマーケットの一般募集を行い、近隣住民をはじめ多くの方々に麗陵祭に参加して頂き、交流を持ち、楽しんで頂くということになりました。今年初の試みでしたが、麗陵祭当日は最大で一日に三十五団体が参加し、大盛況となりました。これからも地域の方々との交流を深め、麗陵祭が学生のためだけでなく、麗陵祭に訪れる方々や参加する団体の皆様にも充実した時間を過ごして頂けるような大学祭であって欲しいと思います。

また、他に新たに始めた試みとして、ペットボトルを利用したおもちゃ作りを教えるペットボトル工作教室があります。当日は小学生くらいの子どもを中心に大盛況でした。反響も大きく、麗陵祭終了後には、ぜひうちでペットボトル工作教室をやって欲しいという電話もありました。子どもたちはもちろん一緒に来ていた親御さんにも喜んでいただきまし



た。そして工作教室に携わったスタッフたちもやってよかったと感じています。大変だったけど、子どもたちが喜んでくれて本当に嬉しかったという声もたくさん耳にしました。

### ○麗陵祭から世界へ

麗陵祭ではパキスタン沖地震の被災者のための募金活動も行われました。活動にはプアン、麗澤国際交流親睦会（RIFA）、天狗、ファルサ、JAZZ喫茶サニーゲイツ、竹原ゼミ、ダンスサークルが参加し、募金を呼びかけました。また、学友会本部の出店の売上金と麗陵祭実行委員会総務局と装飾局が運営した縁日の売上金を合わせ、合計十五万二百六十九円を「難民を助ける会」を通じパキスタンに送金しました。ご協力頂いた皆様、本当にありがとうございます。

麗澤大学には国際貢献に力を注ぐ団体があり、世界で大きな災害が起こった時にはすぐに募金活動やチャリティー活動を起こせる力があります。特に麗澤のいいところはあつた一つの団体がいろいろな団体

に声をかけ、活動の輪が広がるところにあると思います。困っている人達がいることを他団体に伝えれば、その輪がたちまち広がり大きな力になるのを私は何度か見てきました。麗陵祭においても、オーブニングやファイナルでダンスサークル・軽音楽部サニーゲイツ・フィルハーモニー管弦楽団が一つになり盛大な幕開けと感動的なファイナルを創りあげることができました。熱い思いで演奏する彼らの姿は観客を圧倒するほどでした。

麗澤という言葉には、立派な人間になろうとする者が志を同じくする友と切磋琢磨する姿は素晴らしいという意味がありますが、みんなが寄り集まり一つのを創る麗陵祭はまさに麗澤そのものではないでしょうか。これからもみんなが高めあえる力や雰囲気をもっと強くなつていくと思います。そしてその力が麗澤大学から地域社会へ、そして世界へと発信するパワーを秘めているのではないのでしょうか。委員長として多くの人達と触れ、麗澤大学ならそれができると感じた一年間でした。

# 編集後記

◆本号の特集は「外国語を学ぼう!—It's "not" all Greek to us—」です。語学は外国語学部のみならず、国際経済学部においても重視され、本学教育課程の柱石となっています。語学に関心がなく、この特集ページを読み飛ばしてしまうと大損するような内容です。

◆昨年を振り返ると、プロ野球K球団の消滅的統合、それに伴う新規参入、同じくプロ野球団の親会社であるS鉄道による株主偽装、さらには別のプロ野球団の親会社である鉄道会社に対するファンドの攻勢、既存マスメディアに対するIT企業の攻勢等が脳裏に浮かびます。年末にはマンシヨンの耐震偽装も発覚し、社会の随所が揺さぶられました。(Y・H)

◆「目から鱗が落ちる」とは、新約聖書の使徒行伝・九「直ちに彼の目より鱗のごときもの落ちて見ることを得」が語源だそうです。物事の事態がよく見えて理解できるようになったとしても、そこから不断の努力あるのみ、と語学に達人たちは教えてくれているようです。

◆本誌の編集委員会は左記の通りです。中野千秋委員長が長谷川泰隆委員長に、外国語学部の委員が小口叔枝委員、森勇俊(朴勇俊)委員から淡島成高委員、黒須里美委員に代わりました。(N・A)

◆ご執筆くださいましたすべての皆さまに心より御礼申し上げます。

◆ご感想・ご意見・ご提言などがございましたら、麗澤大学広報室までお寄せ下さい。

## 麗澤教育編集委員会(平成十七年度)

委員長・長谷川泰隆(国際経済学部)

委員(外国語学部)・淡島成高、黒須里美

委員(国際経済学部)・竹内啓二、土井 正

事務局(広報課) 田島正幸、斉藤恭子

鳥潟貞幸、小林友紀子

### —表紙説明—

表紙は、各言語で「何々語を学ぼう!」という意味になっています。上段左から韓国語、タイ語、二段目左からスペイン語、中国語、三段目左から英語、ベンガル語、ヒンディー語、下段左からフィンランド語、右上半ハラ語、右下ドイツ語です。

## 『麗澤教育』第十二号

二〇〇六年四月一日

編集 麗澤教育編集委員会

発行 麗澤大学

〒二七七―八六八六

千葉県柏市光ヶ丘二―一―一

電話 〇四―七―一七三―三〇三〇

印刷所 株式会社毎日新聞東京センター

表紙 株式会社エヌ・ワイ・ピー